

529
176

GOTTFRIED KELLER
ROMEO UND JULIA AUF
DEM ORFÈ
UND
ZWEI ANDERE NOVELLEN

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5

始





GOTTFRIED KELLER
 ROMEO UND JULIA AUF
 DEM DORFE
 UND
 ZWEI ANDERE NOVELLEN

高坂義之譯

ケルレル情話集

東京春陽堂版



譯者の序

第十九世紀獨逸文壇の逸才ゴットフリード・ケルレル (Gottfried Keller) は一八一九年七月十九日、瑞西國チューリヒのグラットフェルデン村に生れた。父親といふのが輻輳師ではあつたが、詩才の豊かな人で、母親も、それに連添ふ女だけに詩を愛でる婦人であつたといふ。彼は五歳のとき父親に別れたが、健氣な母親は部屋貸しなどをしてケルレルとケルレルの妹のレーグラとを養育していつた。だから、その生活が樂でありよう筈がない。ケルレルの貧乏はこの子供の時から始まつて一生を通じて彼から離れなかつた。

最初、彼は風景畫家になるつもりで一八四〇年の春ミュンヘンに出てきた。併し適當なお師匠さんにめぐり會はないうちに持つてゐた金を遣ひ果たしてしまつた。彼は、それでも自分の腕を信じて、何時かは畫家として自分を完成するつもりでゐた。が併し、それはやつぱり彼の畫夢にすぎなかつた。一八四二年の秋には、彼は自分の不成功を愧ちながら、心ならずも再び母の家へ歸つてゆくより他に仕方のない羽目となつてしまつた。

畫家としての失敗は彼に、詩人としての天稟を自覺せしめる機縁となつた。母の家へ歸つてから四年の後、即ち一八四六年には彼の第一詩集が世に現れることゝなつた。幸にもこの第一詩集

によつて認められた彼は、遂に國庫からの補助を受けて一八四八年から一八五〇年までハイデルベルグに、同年四月から一八五五年の末までベルリンに滞在して、大いに教養を積むことができた。この頃になると、それまでロマンティストであつた彼は個別に與へられた現實を忠實に描寫するリアリストに變つてゐた。彼の自傳と言つてもいゝ「緑のハインリヒ」と「ゼルドヴューラの人々」の第一巻はこの時代の作である。

斯くて彼は教養ある、一個の詩人として故郷に錦を飾つたわけであるが、貧困からは相變らず苦しめられ通しであつた。ところが、チューリヒ政府は一八六一年彼を一等書記に任命した。彼は四十二歳にしてはじめて定職に携る幸福を知つたのであつた。詩人ゲーテがワイマールの立派な宰相であつた如く、詩人ケルレルはチューリヒの立派な書記であつた。併し一八七六年には、彼は官を辭して再び創作に専念することゝなつた。彼の作品の重なるものを列擧すれば次の如くである。

Der grüne Heinrich (緑のハインリヒ)

(第一巻——第三巻 一八五四年、第四巻 一八五五年)

Die Leute von Seidwyla (ゼルドヴューラの人々)

(第一巻 一八五六年、第二巻 一八七四年)

Sieben Legenden (傳説七篇) (一八七二年)

Zürcher Novellen (チューリヒ短篇集) (一八七八年)

Das Singspiel (諷詩) (一八八一年)

Martin Salander (マルチン・ザラントル) (一八八六年)

Neuere Gedichte (新詩集) (一八四六年、一八五一年)

Gesammelte Gedichte (全詩集) (一八八三年)

譯者序

ケルレルの外的生活は決して幸福ではなかつた。結婚の幸福は幾度となく求めたけれども遂に彼には與へられなかつた。貧しい生活に變れた母は、彼の詩人としての成功をどんなに悦んだことだらう。母の死後は、妹のレーグラが専ら彼の面倒を見てくれたが、貧困に育つたレーグラは社交性に乏しかつたので、彼はいつもカフェーに行つては、友人の詩人や、作曲家などゝ談話に耽つた。一八八〇年にはこの妹さへも死んでしまつた。彼の生活は益々寂しくなつて行つた。國民の彼に對する尊敬と、友人のパウル・ハイゼや、テオドル・シュトルムとの繁き文通は晩年の彼の唯一の慰藉であつた。一八九〇年七月十五日、それが彼の永眠の日である。

「ゼルドヴェーラ」といふのは瑞西の山間にある假設の町の名で、三百年前の周壁にとり囲まれたまゝで、町の人たちは古い習慣に支配されて少しも近代の文化に浴してゐない。作者はこの町の人たちに假託して、人の世の姿を十篇の物語に書き分けた。こゝに譯出したのはその中の三篇である。

「おこりんぼのパンクラッツ」には剛情な、獨りよがりな、それでゐて内氣な、氣の弱いケルレル自身の幼年時代の複寫があるし、女性の存在の意義を男性への奉仕の中に見出さうとする彼の女性觀も伺はれる。殊にリディアへの淡い夢のやうな戀は、すべてに徹底せんとする現代人にとつては一種の物足りなさを感じしめようが、棄てがたい趣でもある。

「村のロマオとユリア」は「ゼルドヴェーラの人々」の中の白眉と稱へられるもの、誰かこの幸福にして不幸なるふたりの上に一掬の涙を濺がぬものがあらう。

これは彼がベルリンに居た頃、ライプチヒの近郊アルトゼルレルハウゼン村にあつた事實を新聞で讀み、それを骨子として書いたのである。

4 この小説の結尾の一節「船はその後暫らくして云々」以下は全然蛇足であつて、ケルレル自身も改版の折には之を抹殺することを承認したさうである。

5 「艶書濫用」はいふまでもなく當時の文壇に對する皮肉である。愛の琴線の奏でる曲は、エーオ
ルスの笛にも似て、實に人力以上である。

一九二四年七月十日

高坂義之 するす

内
容

おこりんぼのパンクラーツ(Pankraz, der Schnoller)

村のロメオとユリア(Romeo und Julia auf dem Dorfe)

艶書濫用(Die missbrauchten Liebesbriefe)



ラ
ー
ツ



町の周壁に近い、とある小さな廣場に寡婦が住んでゐた。ゼルドヴェーラ生れのその良人が墓場の土を冠つたのはもつと以前の事だつたが、この男はさうやくさな人間でもなかつた。いやむしろどうかして着實なしつかりした人間になりたい、といふ切な希望を抱いてゐたので、青年としてどうしても遁れることのできない一般の風習といふものがいやでならなかつた。で、男盛りがすぎて、愈々土地の風習に従つて隠居しなければならなくなつたときは、この世の中のすべてのことがわけのわからない夢のやうに思はれた、人生といふものがいゝ加減なうそ偽りのやうに思はれた。かうした悩みから身體を傷めて、彼はまもなく死んでしまつたのであつた。

彼があとに遺していつたものは、さゝやかな壊れかゝつた家と、入口の前の馬鈴薯の畑と、二人の子供——息子と娘と——であつた。そこで寡婦は捲糸竿で自家の畑に作つた馬鈴薯を煮る牛乳とバタとの代を稼いだ。それに貧民救護院から毎年下る僅かの寡婦手當があつたので——それはいつも下附の期日を二三週間も過ぎた頃まで貧民救護院で商賣に利用してゐたが——着物の代と他の僅かばかりの出費とはそれでどうにか足りてゐた。ところが子供たちの安着物はちやうど

受取のおくれる週間だけ早くぼろ／＼にいたんでしまふのと、バタ壺がいたるところ底をあらはすので、いつも／＼手當金はどうなるのかと心配して待たれるのであつた。緑色の壺の底が見えることは、空の現象のやうに、毎年定つて起る出来事で、これは冷たいがどうかかうか静まつてゐるこの家庭の満足を暫らくの間ではあるが、定つて本物の不満足にかへつてしまふのだつた。子供たちはもつと美味しいものをもつと澤山に、といつて母親を困らせた。それといふのも子供たちにとつては母親はすべてであり、唯一の保護者であり、唯一の目上のものであつたので、何もわけがわからずに、母親にはさうすることが出来るものと思ひ込んでゐたからだつた。ところが母親は母親で、子供たちにもつとわけがわかるか、もつと食へものが當てがはれるか、それともこの両方が叶つてくれるかしないのが不満だつた。

子供たちは各々異なつた性質を示してゐた。

息子は眼の灰色な、顔付の眞面目な、十四になるみつともない子だつた。朝はおそくまでベッドの中におゐて、それからちよつと破れた歴史や地理の本を讀んだ。そして夕方になると夏でも冬でも毎日日没を見に山に登つた。日没は彼にとつて唯一の輝かしく、美々しい出来事だつた。日没は彼にとつて、商人にとつての取引所の正午といつたやうなものらしかつた。少くとも取引所から歸る商人のやうに彼はいろ／＼な變つた氣持で歸つてきた。そして眞紅や眞黄の雲が戦場の

大部隊のやうに血潮と砲火を浴びて、壯麗な演習をやつたときなどは、彼はほんたうに喜んでゐる、といへるのだつた。

時々、といつても極くたまにであつたが、彼は紙片に妙な表や数字などを書いた。書き終るとそれを古い金糸の紐の切端で綴じた小さな綴込みに挟んだ。この綴込みには一枚の金紙を折り疊んで拵へた小さな手帳が一つ挟んであつたが、その白い裏にはいろんな線だの畫だの、線で結びつけた點だの、その間にまた煙雲や飛びゆく爆弾だのがいつばいにかいてあつた。この本をよく彼は、非常な満足を以てみるのだつた。そして、それは大抵馬鈴薯の畑に花がいつばい咲いてゐる時分だつたが、彼は新たにかきこむのだつた。青空の下で、花の咲いた雑草の上になが／＼と寝そべつて、いろんなものゝかきつけてある白い方の面をちつとみる。それから、それより三倍もながく、びか／＼光る金色の表の方をみつめる。そこには陽光がばつと散つてゐる。それに我儘な、怒りつぼい子供で、笑ふといふことがなく、といつて何一つするでもなく、習ひもしなかつたのである。

妹は十二で、長い房々とした鳶色の毛髪と、大きな鳶色の眼とをもつた、肌の眞白い、繪のやうに綺麗な子供だつた。おつとりとしてゐて無口で、大抵のことはよく我慢してしまつて、ぶつぶついふことなどは兄に比べるとずつと稀だつた。また聲がよくて、鶯のやうに歌つた。かうい

ふふうに男の子よりもやさしくて、可愛かつたが、それでも母親は兄の方を特別に可愛がつた。といふのも母親の考へでは、娘には大したものも要らず、どうにかやつてゆかれるだらうが、兄の方はかういふふうは何一つ習はうともしないので、いつかしら困つたことになるだらう、と思はれて、不憫だつたからである。

だから娘は、兄がもつと食べものを澤山に貰へて、いつかやつてくる自分の不幸をぶら／＼しながら待つてゐられるやうに、せつせと紡がなければならなかつた。息子はそれを當りまへのことのやうに思つて、女たちを働かせる小さい印度人のやうな顔付をしてゐた。妹も別に不平もいはずかうなければならぬもの、と思つてゐた。

が、妹はあるいたづらで——勿論よくないいたづらだが——唯一つの償ひと仕返しとをやつた。そのいたづらといふものは食事のときに狡いやり方か無理やりにかして、しよつちゆう繰返されるのだつた。母親は毎日正午に濃い薯粥を拵へて、それに濃い牛乳か、或はい、褐色のバタのソースをかけた。この薯粥を親子三人が一つ皿から、各々錫の匙で、自分の前に、堅い馬鈴薯の山の中に穴を掘つてゆきながら、食べるのだつた。息子は食べものゝことについては妙に軍人のやうにきちんとしたことが好きで、各々が自分の分け前より多くも少くも取つてはいけなと厳しく主張して、皿の縁をぐる／＼流れてゐる牛乳、或は黄色いバタが仕切つた溝に同じやうに流れ

込むかどうか終始注意してゐた。それにひきかへて妹は頗る無邪氣で、自分の泉が濁れてしまふとすぐに、いろいろな隧道や溝を拵へてこの美味しい小川の水を自分の方にひかうとした。そして兄がどんなに抗つても、また同じやうに堤防を築き、疑はしい穴のできさうなところをみんな塞いでも、妹はまたそつと粥の脈を開くか、てつとりばやく平和を破つて眼で笑ひながら、兄のいづばいになつてゐる溝に匙を浸出させた。かうなると兄は怒つて匙を放り出してしまふ。そして泣く。母親が皿を傾けて、自分のソースを子供たちの運河や堤防の迷宮にいづばい流してやるまではをさまらない――

6
かうしてこの小家族は一日々々と暮らしていつた、ながく／＼いつまでも。――そのうちに子供たちは、だん／＼世間といふものを知つて何かしらものにするといふやうないゝ機會もなく、大きくなつて、みんながかう一緒に暮らしてゐることがだん／＼不愉快に、惨めに感じられてきた。息子のパンクラッツは相も變らず怒りつぽく、怒つて母親や妹や自分自身を困らせる巧みな術の他、何もしなければ習ひもしなかつた。終ひにはこの怒ることが面白いゝ仕事になつてしまつて、パンクラッツは無爲徒然の頭をしぼつて、あらゆる小さな家庭悲劇を考へ出してはそのきつかけをつけ、自作のその悲劇の中で巧みに、いつも不正に苦しめられるものゝ役を演ずるのだつた。妹のエステルヘンは兄に叱られるとすぐにわつと泣き出す。が、その涙の雨の中からまたす

ぐに快活な太陽が輝き出す。さうするとこの上面なことがまたパンクラッツの氣にさはつて、益益その怒りを長びかせて、はては自分で構へた腹立たしさのためにそつと泣きだしてしまふのだつた。

かうした生活ではあつたが、彼はめつきり丈夫に生長して、力がついてきた。彼は自分の手足に力がついてきたことを感じると、活動の範圍をひろめて、頑丈な木の根や、箒の柄を手にして野や森の中を歩きまはつた。何處かに大いなる不正はないか、あつたらその力を試してくれようといふので。そして何かかうしたことが起つて大きくなつてくると、彼はすぐに相手をひどいめにあはせた。彼はこの妙な仕事では、敵を嗅ぎ出すことにも戦ふことにも、熟練と精力と機敏な戦術とを示した。自分よりもずつと力の強い青年に對しても、またさうした青年が團體をなしてやつてきても、やつつけるか、少くともひどいめにはあはされずに退却してきた。

かうした冒険に成功して歸つてきたときは、食事が倍も美味かつた。すると家族のものも、つれてはしやいだ氣分をたのしむのだつた。ところがある日のこと彼は、人を殴る代りに自分がひどく殴られてしまつた。恥づかしいのと、腹立たしいのとで胸がいつばいになつて家に歸つてくると、終日紡いでゐたエステルヘンが我慢しきれなくて、またもパンクラッツの分としてしまつておかれたのを持出して、その一部分を食べてしまつてゐた。しかもその部分が一番いゝところ

のやうに彼には思はれた。そこですつかり悲しくなつて、眼に涙さへ浮べて、彼はこのみすばらしい、冷たくなつた食べ残を見つめた。が、いたづらな妹はもう紡車に向つて、はあく笑つてゐた。これはあまりひどかつた。何か根本的なことが起らないではすまなかつた。匙もとらずにパンクラーツは、空腹のまゝ自分の部屋に這入つてしまつた。翌朝母親が朝餉に起しにいつてみると、彼はそこにはゐなかつた。何處を探しても見當らなかつた。その日はたうとう歸つて來ずに經つてしまつた。そして二日も三日もさうだつた。母親とエステルヘンとの心配は一通りでなかつた。殆んど困惑してしまつた。自分のものを持つていつたところから觀ると、覺悟の上の家出に相違なかつた。あらゆる手段を盡して手がかりを得ようとしたが無駄だつた。母親はもとめどなく泣き悲しんだ。かうして半年も經つた。今は母親のものも悲しい胸を抱いて、これまでの運と諦めた。運といへば、それは今は一入寂しく哀れに感じられた。

愛するものが今何處でどうしてゐるか分らない、その名さへ風のたよりにきくこともない、それでゐてまだ何處かにゐると信じてゐるとき、一週間、いやたゞの一日でもどんなにか長いことであらう。

8 かうして母親とエステルヘンとは、五年、十年、十五年の歲月が一日々々と經つていつた。が、パンクラーツの消息は、その生死すらわからなかつた。それにほんたうに長い、心からの怒

9 りかただつた。綺麗な娘になつたエステルヘンは、いつかその娘時代も過ぎて、美しい上品な老嬢になつてしまつた。が、年老いてゆく母親の傍に止つてゐたのは、孝養の心からばかりでなく、兄がいつか歸つてくるそのときに居合はせたい、どうしたことだつたかきいてみたいといふ好奇心からでもあつた。氣立のやさしい彼女は、兄がいつかは歸つてくる、さうしたら大笑ひするやうな面白いことがある、と堅く信じてゐた。それに聰明でもあつて、ゼルドヴェーラのものでいつまでもかはらない人生の幸福を楽しんでゐるものは大勢はないのに、自分は母親と靜かに、暮しむきの心配もなく、さゝやかながら幸せな暮しをつゞけてゐる、といふことに氣づいてゐたから、獨身であることが別に苦にもならなかつた。大食家が一人減つて、彼女たち自身には殆んど何も要らなかつたので困らずに暮してゆかれるのだつた。

それは晴れわたつた美しい夏の日の午後、小さい町の人たちが働くことに餘念のない週の中日であつた。ゼルドヴェーラの金持連はみんな太陽の昇るとともに閨門の前の綠草に蔽はれた投球の製造や、糊つけ仕事や、彫刻や、修繕などそれ／＼の仕事にせつせと働いた。それは日の長いを利用して、楽しい夕暮を心ゆくまでに味ふためだつたが、事實その結果は夕暮の偵打がほんたうにわかるのだつた。

寡婦の住んでゐる小さな廣場は、草の生えた敷石に落ちる靜かな夏の陽光の他何も見えなかつた。が、まはりの開け放つた窓のところでは近所の年寄連が何か仕事をして、子供たちが遊んでゐた。花の咲いた迷迭香ミセギクの向ふで、寡婦は仕事臺に腰をかけて紡いでゐた。エステルヘンは母親に向ひあつて縫物をしてゐた。食事後もう二三時間たつてゐたが、近所ぢゆうまだ誰も談話を始めるものがなかつた。と、靴屋が、多分ちよつと休憩する頃だと思つたのであらう、「はくしよつ！」と元氣よく噓めをした。窓がぶる／＼つと顫へた。すると向ひの製本屋、といつても實は製本屋ではなくて、出鱈目にいろんな厚紙匣を貼り合はせる仕事なんで、その戸口にぶらさげてある雨さらしの硝子箱の中では封蠟棒が日光にあたつて曲つてゐた——その製本屋が叫んだ。

「とこ萬歳！」

と、近所ぢゆうのものごとつと笑つた。窓から頭が一つ、二つとあらはれた。二三人のものは戸の外まで出てきて、嗅煙草を喫つた。かうしてこれが、もう方々の家からいゝ香をさせてゐた午後の珈琲どきに、ちよつと寄集つて、面白をかしく話しあふきつかけとなつた。この人たちはいつの頃からか、ちよつとしたことから冗談をいひあふことを覺えてしまつたのだつた。と、このたのしみの最中に綺麗に磨きのかゝつた風琴箱をもつて琴弾きがやつてきた。スミスには生え抜きの琴弾きといふものがないので、これはかなり珍らしいことだつた。琴弾きは外國や、その

風物に對する憧れの唄を弾いた。それは人々に非常に美しく思はれたが、殊に寡婦には、もう何年も行方の知れないパンクライツのことを思ひ出させて涙を誘つた。靴屋がその男に「クロイツェル」(譯者註、邦貨約一錢六厘に當る)やつた。琴弾きは去つてしまつた。廣場はまた靜かになつた。ところがまもなくまた大きな外國産の鳥を籠に入れた見世物がやつてきた。ひつきりなしに格子の間から小さな棒で突つついて説明するので、可哀さうな鳥は落ち付いてゐられなかつた。それはアメリカ産の鶯だつた。と、その上をこの鶯が自由に翔んでゐたに違ひないあの遠い、空のからつとした國々のことを寡婦は思ひ浮べた。そしてその國がどんな國だか、息子が何處に居るか、それさへもまるで知らないのが一入悲しい思ひを募らせた。近所の人たちはこの鳥を見に廣場に出てゆかないではゐられなかつた。鳥が去つてしまつても、そのまゝ寄集つて、あと晩までぐづ／＼して過ごしてしまひたい氣になつたので、鼻をつき出して、もつと珍らしいものが來はしまいかと待つてゐた。

この希望も充たされた。といふのはまもなく、大仕掛な見世物が大騒ぎをしながらやつてきて、その後から町の子供たちがみんなぞろ／＼ついてきたのであつた。大きな駱駝が、脊に二三匹猿をのせて廣場にやつてきた。大きな熊が鼻環をつないでひつばられてきた。男が二人か三人ゐた。つまり熊踊りが演じられるのだつた。熊が踊つて、滑稽な技を演じてみせた。が、時々氣むづか

走つてきたのだつた。車の中にはフランスの將校が冠るやうな帽子を冠つた男が一人乗つてゐた。その男は髭と、顎髯と、すつかり陽光にやけてばさ／＼した、その上弾傷や刀傷の痕のある顔を見せてゐた。それにブルヌス（譯者註、北アフリカの回々教徒の着る一種の毛織のマント）にくるまつてゐたが、そんな顔といひブルヌスといひ、それはみんないつもフランスの將校がアフリカからもつて歸るのだつた。その男は兩足を車の床に敷いた大きな獅子の毛皮につつばつてゐた。そしてうしろには洋刀と、あまり長くないアラビアのパイプとが他のいろんな珍しいものと一緒に置いてあつた。

この男は眞面目くさつた顔でをさまつてゐたが、その大きく見張つた目は、重い夢から醒めたものゝやうに、廣場の上をきよ／＼見まはして一軒の家を探してゐた。そして急に廣場の中央にとまつた馬車から殆んど轉がり落ちるやうにとび降りた。が、すぐに、獅子の毛皮と洋刀とを手にとつて、まるで一時間前に出ていつたかのやうにしっかりと歩調であの寡婦の家に這入つていつた。母親とエステルヘンとはびつくりして、物珍らしさうに眺めてゐた。そしてこの見知らぬ男が階段を昇つてくるかどうか、聴耳をたてた。先刻パンクラッツの話をしはしたものゝ、今これがそのパンクラッツだらうとは夢にも思はなかつた。むしろ母娘の考へは、びつくりさせられた好奇心のために、彼からすつと遠くへつれてゆかれてしまつてゐた。だが、その男が電光

しさに唸るので、氣の弱い人たちはこはがつて、すつと離れてみてゐた。エステルヘンは、ステッキをついてよろ／＼歩きまはる熊や、満足さうな顔付をした駱駝や猿をたまらなく面白がつて、きやあ／＼笑つた。それにひきかへて母親は斷えず泣かすにはゐられかつた。熊が可哀さうで、またしても行方の知れない息子のことを思はずにゐられなかつたのである。

たうとうこの行列も去つてしまつた。氣のたつた近邊の人たちも、あちこちで夕方の一ぱいを飲み、つれのものと去つてしまつたので、あたりが靜かになつたとき、エステルヘンがいつた。

「あたし何だか、今日屹度パンクラッツ兄さんが歸つていらつしやるやうな氣がするのよ。こんなふうにいる／＼思ひがけないことが起つて、こんな駱駝だの、猿だの、熊だのが來たんですもの！」

母親は、エステルヘンが可哀さうなパンクラッツをこんな獸なんかと一緒にして笑つてゐるのを叱りつけて、黙らせた。が、胸の中では自分もさう思つてゐたのだつた。母親は溜息をついていつた。

「わたしの生きてゐるうちに歸つては來まいねえ！」

母親がかういつてゐるとき、今日の出來事の中で一番珍らしいことが出來した。といふのは、特別仕立の無蓋の旅行馬車が勢ひこんで、まだ半ば夕陽に照らされてゐる靜かな廣場を目指して

のやうに素早く、ゆるい鍵をきちんと嵌めてから——それはのらくらしてゐるに似ず妙にきちんとしたことの好きだつたあの家出した息子のいつもすることだつた——階段を二三段とび越えて昇つて、昇りつめた狭いところをこえて殆んど同時に扉の引手を握つたその仕方、母娘ははつと彼と覺つたのだつた。彼らはあつと聲をたて、口をあけたまゝ、開いた扉の方を見ながら、椅子の前に釘付けにされたやうに立つてゐた。戸口にはすつかりかはつたパンクラッツが、外國の軍人らしく眞面目くさつてつツ立つてゐた。その眼のまはりが妙にびく／＼するのみだつたが。母親は彼を見つめてぶる／＼顫へてゐるばかりで、殆んど舉措を失つてゐた。エステルヘンも生れてはじめて、呆氣にとられてしまつて、身動きもできなかつた。併しそれはほんの瞬間だつた。大佐殿——どう見ても大佐より下ではなかつた——は、浮世の浪に揉まれて心得た鄭重さで、すぐに帽子をとつた。以前は部屋に這入つても決してこんなことをしたことはなかつたが。何ともいひやうのないやさしさが——少くとも彼のやさしいところを見たことのない、従つてやさしいと考へることもできなかつた母娘にはさう思はれた——皺のよつた、といつてまだ年寄でもないこの軍人の顔にひろがつた。彼は母娘の方に進み寄つて、二人を何とも形容することのできない悲しい心で抱きしめた。と、そのとき雪のやうに眞白な齒がちらつと見えた。先刻は殺伐な、まだ怒つてゐるとしか思はれなかつた態度の息子を見て妙に顫へたのだつたが、今や、母ははじめ

て、この再び歸つてきた息子の腕に抱かれて、戦くやうな嬉しさに顫へた。その丁寧に帽子をとつたこと、感激と後悔とがなければ表はれない、そして今までに見たことのないやさしさとはもう魔法の杖で打たれでもしたやうに母の心を動かした。想へばパンクラッツは、まだ七つにもならない頃から、もう母の愛撫から離れはじめたのだつた。それからといふもの、彼は非常に内気な、剛情な子供になつて、やたらに怒つては「おやすみなさい！」ともいはずにベッドに入つてしまつたことが數へきれない程あつた。が、それを除いては、母に手を觸れることさへしないやうにした。だから今、ものゝ三十年もたつて、いはゞ自分で生んでからはじめてその息子に抱かれた母には、この一生が籠つてゐるやうな一瞬間が、何ともわけのわからない、不思議な瞬間に思はれた。だが、すつかり様子の變つたこの兄は、エステルヘンにも眞面目くさつて見えたのだつた。で、嘗ては怒つた兄をむちやくちやに茶化してしまつた彼女が、今はそのやさしくなつた兄に笑ひかけることさへもできずに、眼に涙を浮べて、自分の安樂椅子の方にいつて、ちつと兄を見てゐた。

二三分間の後、先づパンクラッツが我に歸つて、善良な軍人らしく、荷物を上に運びはじめて、ゆきつまつたこの場を上手に切り開いた。母もエステルヘンと一緒に手傳はうとした。が、彼はやさしく母をその席につれ戻して、エステルヘンが馬車の傍に下りてきて、軽い荷物を二つ三つ

脊負ふのだけをだまつてみてゐた。これから先きは、エステルヘンがまもなく持前の茶目氣を取りかへして、その場をなだらかに運んでいつた。彼女はたうとう我慢しきれなくなつて、獅子の毛皮の長い、大きな尻尾を掴まへて、お腹が痛くなる程笑ひながら、幾度も――

「こりや何ていふ毛皮でせう？　こりや何ていふをかしたものでせう？」

といひながら、床の上を引き摺りまはつた。

「これはね、」パンクラッツは、その毛皮を足で抑へながらいつた。「獅子だよ。三月前にはまだ生きてたんだが、わたしが殺したんだよ。此奴はわたしの先生で、且つ説法者だつた。凡そ十二時間わたしに痛切に説法をして、たうとうこのやくざなわたしの怒り病を永久的に治してくれたんだ。その記念にわたしは、この毛皮を手離さないのさ。あれはほんたうに面白い話だつたなあ！」

と、彼は溜息をつきながら附加へた。

若しまだ生きて會へても、どうせ自家には高價なものあまりあるまいと豫め考へたし、それにゼルドヴェーラで人々が騒ぎ出さないやうに、落ち付いて母や妹と夕食の食べられるやうにと思つて彼は、通つてきた最後の稍大きな町で、葡萄酒のいゝのを一籠と、いろんな美味しい食べものを一籠買ひ込んだ。

だから母親はほんの、食卓に卓布をかけるだけでよかつた。パンクラッツは、炙つた鶏を二三羽と、美事な肉パンと、上等な小さな菓子の包みとを食卓に運んだ。いやまだあつた！　その昔みすぼらしい鯨油ランプで暗かつたことや、そのため玩具の七道具が使へないといつてよく怒つたことや、母は年が寄つて眼が不自由なのにいつもランプを彼の鼻先きに押しやつてくれたと、またエステルヘンが何とかかんとかいつては自分の方に取り戻してしまつた、そんなことなどを歸る途中で想ひ出したのであつた。あゝさう／＼、あるときなどはかういふこともあつた。彼が怒つて泣きながらランプを吹き消してしまつた、すると母親が心配して、またつけた、と、今度はエステルヘンが笑ひながら吹き消した。彼はたうとうたまらなくなつて、ベッドにもぐりこんでしまつた。こんなことや、まだ他のいろんなことなどを想ひ出して、彼は見棄てた母や妹にあへるかどうか覺束ないと氣遣ひながらも、蠟燭を二三本買込んだ、で、今その中から二本とりだしてつけた。すると母娘は何もかも立派なのにびつくりして我を忘れてしまつた。

こんなふうで寡婦の家は、小さな婚禮のやうだつた、たゞずつと静かなことだけが婚禮とちがつてゐた。パンクラッツは明るい蠟燭の光りで母や妹の年とつた顔を見た。それは今迄に出會つたすべての危険よりも強く、彼の心を動かした。彼は人間といふものや、人生といふことを深く悲しく考へ込んでしまつた。そして氣立がおとなしいとか亂暴だとかいふやうな割合に小さな吾

吾の氣質が、吾々の運、不運をきめるばかりでなく、周囲のものゝ運まで定めることができる、そして吾々の氣質といふものは自分で自分に與へたものでないので、どうしてさうなつたのか自分でも氣づかずに周囲のものに對して何ともすまないやうな間柄になることのあるものだといふことを考へた。彼はかうした考へに耽らうとしたが、もうこの上珍らしいもの見たさの心を抑へてゐることができなくなつて、かはる／＼彼の部屋に押しかけてくる近所の人たちに妨げられた。それは、行方不明のパンクラッツが歸つてきた、しかもフランスの將軍になつて四頭立の馬車で歸つてきた、といふ噂がもうばつと町ぢゆうにひろがつてしまつたので、この珍らしい人を見ようと舞めくのであつた。

この事件は遊び場を集つてゐたものたちにとつては、若い者にも年寄にも、まるで狐につまゝれたやうなことだつたので、みんな呆氣にとられて、耳のうしろを搔いた。かう天から降つたやうに、しかもゼルドヴェーラでは普通もう隠居してゐる年輩で、成功者、將軍として歸つてくるといふことは、全然ゼルドヴェーラの秩序に反し、風習にあはないからであつた。一體何を始める氣なんだらう？ 碇りの生涯をすつと、殊に年などつても、零落者とならずに此の土地にほんといふ氣かしら？ かういふものになつた、その抑々のはじめはどうしたのだらう？ 一體あのやくざものが、長い青年時代を、身體もいためず何をしてゐたんだらう？——といふ疑問

がみんなの胸を動かした問題であつたが、この謎をとく鍵は彼らには全然見つからなかつた。人間とか人の心とかについての知識が足らなくて、パンクラッツ自身や、家族のものに辛い苦しみを嘗めさせたその嚴しい性質が、強い酢が羊肉の片を保存するやうに、彼の本性をよく保存し、そのおかげでゼルドヴェーラのものなら危険な男盛りを過ぎた今まで元氣でゐるのだ、といふことがわからなかつた。この疑問をとくために、先づこの出來事の眞否を問題にして、かういふことがあり得ることか否かについて争つた。そして先づ眞否を確めるために、年老いた隠居が多勢使ひに出された。で、それでなくても彼のところに集まつた近所のものみんな隠居連だつたので、パンクラッツは、古の英雄が冥土でかけ寄つてくる亡者に團まれたやうに、珍らしいもの好きな呑氣な隠居連にとり團まれてしまつた。

パンクラッツは、トルコパイプに火をつけて、部屋ぢゆうにトルコ煙草の異國적인いゝ香りを漲らせた。亡者即ち隠居連は、愈々物珍らしさうに紫の煙を鼻をひく／＼させて嗅いだ。エステルヘンと母親とは、パンクラッツがそれらの人々と話す其の話しかたの上手なのと、應接の上手なのとに斷えず感心して見てゐたが、終ひに、パンクラッツがこれらの集まつた人々を、頃あひと思ふ時分に追拂つてしまつたその物柔かな、しかも確實な腕前にすつかり感心してしまつた。でも、母兄妹の間の喜ばしい出來事に對する嬉しさは、隨分長い間心配したにかゝはらず、

世間の興奮といふものはすべてこんなものだが、みんなを急に若々しく元氣にしてみましたので、子供たちは無論のこと、年老いた母親も、疲れや眠氣を少しも感じなかつた。そしてもう、満足して飲んだいゝ葡萄酒にぼうつとなつて、たうとう母親は、もつと〜我慢のしきれなくなつた娘と一緒に、パンクラーツの運命に就て、もつと詳しいことをきかせてくれと頼んだ。

「細々と、」パンクラーツは答へた。「わたしの悲しい物語りははじめることは今はもうできません。多分、わたしのめぐりあつたいろ〜な出来事を追々に一つ〜お話しする時があるでせう。今日のところはまあ輪廓だけ、結論、つまりわたしが歸つてきたこと、どうして歸るやうになつたかといふことがおわかりになるのに必要なだけをお話しませう。何故つてこの歸つてきたことは、先きの家出に副つた出来事であり、また家出と同じ氣持から出てゐることなんですから。あの當時あゝ向ふ見ずに出ていつたとき、わたしの胸はもう抑へることのできない腹立たしさと悲しさでいつぱいでした。でもそれは、あなたがたに對してははなく、自分自身と、この地方、このつまらない町と、自分の若さとに對してであつたのです。このことは家を出てはじめて、はつきりわかつたのでした。わたしがしよつちゆう食べものゝことでぶつ〜怒つたそのかくれた原因は、自分は何も勉強せず、何もしないから、さうです何一つとしてわたしを働くやうに刺戟するものがなく、従つていつか變つてこようといふ期待もなかつたので、自分はパンをいたゞく

資格がないのだ、といふ胸を抉るやうな氣持だつたのです。實際他人のしてゐることを見ると、それがわたしにはすべてみじめな、莫迦らしいことに見えました。あなたがたがしよつちゆう紡いでをられたそれさへも、そのおかげで何もしないわたしは養はれてゐただけれど、わたしには堪へられなくて、頭痛にやんだものです。だからわたしは或る夜、もうたまらなく苦しくなつて逃げだしたのでした。そして朝まで、七里位歩きました。太陽が昇ると、人々が廣い草原で枯草を乾してゐました。わたしは一言もいつたり訊いたりしないで、包を端において、熊手か枯草扱をとつて、憑きものでもしたもののやうに、みんなと一緒に、大いに上手に働きました。どうしてそんなことができたかといへば、この土地で方々をぶら〜してゐるとき、働いてる人たちの骨や練習ぶりをみんなよく見ておいたんです。いやそれどころか、かういふところあゝいふところが下手だとか、苟且にも働くものといふ以上は、あんな手振りではだめだなんてよく考へたものでした。

みんなびつくりしてわたしを見てゐました。誰もわたしの仕事の邪魔をするものはありませんでした。朝食を食ふとき、わたしを招いてくれました。わたしはこれを狙つてゐたんです。それからまた午食まで働きましたが、これもわたしは朝食同様きれいに平げてしまひました。併し今度は枯草扱をとる代りに急に口を拭き、包を抱へて、何ともいはずにさつさといつてしまふと、

百姓たちは尙一層驚いて、あきれたやうな笑ひ聲をうしろから浴せました。よく茂つた涼しい山毛櫛の林で、わたしは横になつて夕暮まで眠りました。それからふいとび起きて、林を出て、星の輝きはじめた空をあちこち見廻しました。星の配置は、のらくらしてゐた時分に氣をつけてみてゐた僅かのことの一つだつたのです。そしてその中に立派な秩序と正確さを發見したので、それがわたしは大好きだつたのです。殊にこの輝くものが、日給や一皿の馬鈴薯のスープのためにかうした正確をつとめるのでなく、唯放つておいていけないことを娛しみのためにするやうで、しかも立派にやつてゆくので益々氣に入つたんです。うちの地理の本をだん／＼覚えていつたので——そんなにこれは簡単だつたのですが——この地球のことがい／＼かげんわかつてゐたので、自分のゆく方向を定めることができました。そこでこのときわたしは、北に向つてすつとドイツをつつきつて海に出ようと決心しました。で、また夜ちゆう凡そ八時間もぶつとほしに歩いて、夜明方ライン河畔の、ある人里はなれた寂しいところにきました。と、ちやうど目の前に、穀類の袋を積んだ舟が淺瀬にのりあげてゐました。そして河水は積荷の一部を流してゐるんです。舟にゐるのはたつた三人で、こんな朝早く、そしてこんな人里離れたところでも、あたりには他の人は誰も見えないんです。で、わたしが來たことは丁度もつてこいだつたんです。すぐに手を下して、重い積荷を岸に運んで、舟を淺瀬からおろすのを手傳つてやりました。濡れた穀物は、

板を日向においてその上に撒いて、一生懸命で引つくりかへして、たうとうまた舟に積みました。併しこんなことで、その日の大部分はとられてしまつたんです。で、わたしはこの船頭たちから、いろんな食べものをたつぷり分けて貰ひました。いやそればかりぢやありません、すつかりすんだとき、船頭たちは金までくれて、わたしの乞ふまゝに、親舟の後に縛りつけてあつた小舟でわたしを向岸にわたしてくれました。

向岸は大きな森でね、そこでわたしはすぐに寝込んでしまひました。日が暮れてからまた歩きだして、夜明けまでぶつ／＼に歩きました。つゞめて話せば、同じやうなことを繰返して、二ヶ月とちよつとでわたしはハムブルグに着いたんです。あんまり口數をきかずに、晝の間は仕事がありさへすれば何處にでも手を出し、腹がいつばいになるとさつさと去つてしまふ、そして夜ちゆうまた歩くといつたやうにしてね。わたしのこのやりかたはいつもみんなをびつくりさせてしまつて、ちつとも文句などは持ち込まれませんでした。そしてぶろ／＼いひだしたり、珍らしさうにしたりするときには、わたしはもうそこにゐないんです。同時にわたしは町を避けて、いつも廣い畑や、山の上や、森の中といったやうな原始的な、素朴な人間のゐるところばかりで仕事をしたので、實際家長時代に旅をするやうでした。自分が通つてゐるその國々の政治のことなどは、微塵も見ようとはしなかつた。わたしの考へてゐた一つのことは、物乞ひしたり、

若くは自分に必要なパンのために誰かゝら義務を負はされるといふやうなことなく、といつて何もしないのではなく、自分のしたいと思ふことをし、殊に休みたいときに休み、気がむいたらまた歩きだすといふふうにして、この國々を通つてゆかうといふことでした。勿論後には、自分の頭の外にある動かすことのできない秩序や、規則的な忍耐に頼ることを覚えました。前に、働くことを急に覺えたやうに、これも、たゞ一度、どうしても必要だと氣づくが否や、さほどの努力もせずに覺えてしまつたのです。

とにかくうんと働き、たつぷり食ひ、心配なく休むといふふうにしてゐますと、不斷に移り變るこの自由の天地での生活が大變氣持のいゝものでした。かうして手や足やは立派に鍛へられたので、わたしは見るからに強さうな潑刺たる若者として大商業市のハムブルグにつくと、すぐに海にかけつけて、その邊をうろついて、舟荷の積込をやつてゐる水夫の仲間に這入りました。何にでも手を出して、こんな仕事は莫迦げてゐるなどといふ心はおくびにも出さず、またつべこべ饒舌つたり、口を歪めたりしないやうに氣をつけてゐたので、單純で粗野な彼らは、すぐに何ともいはなくなりました。一週間あまりを彼らの中ですごして、それからわたしは、あるイギリスの商船に忍び込みました。ところがその船長は、航海中船長の私用手傳ふといふ條件でわたしを船に置いてくれました。私用といふのは、彼が舊世界に碇泊中にうんと買込んだいづんな銃器や

ピストルの古くてもう使へなくなつた部分をうまく組合せて、銃器やピストルを拵へることでした。船長はこの妙な殺人道具をもう一生懸命になつて組合せて、未開地の海岸についたとき、高價な平和的生産品や、甘い天産物と交換するのです。わたしは黙つてこの仕事を積古しました。そして間もなく油や、金剛砂や、鍍層にすつかり汚れて、あつぱれ鐵砲師になつたのです。かういふピストルなんかをどうかかうか組合せると、實射試験をやりました。が、二度とは試しません。二度目は遠い島の赤肌か、黒んぼの買手に委したのです。併し船長がニューヨークに行つただけで、そこからすぐイギリスに引き返したときでした。鐵砲製造にすつかり通じてしまつたわたしは、船長に別れて、すぐに東印度に行くことになつてゐたある聯隊に採用して貰ひました。

ニューヨークでは上陸して、二三時間アメリカの生活を見ました。この土地では誰でも自分のしようと思ふことをやつて、全然自分の欲望と氣持のまゝにこの仕事からあの仕事といふやうに活動してゐました。ある仕事を恥かしがつたり、又はある仕事を他の仕事より高尚だなどいふやうなことなく、自分がいゝと思ひさへすれば、どん／＼他の仕事に移るといふふうでした。で、このアメリカの生活は、確かにわたしの氣に入る筈だつたんですが、どうしたことか自分にもわけがわからないんですが、わたしは急いで船に歸つて、新世界に止るところか、世界の一番古い、夢のやうな國、古い熱い印度に行つたのです。しかも赤い服を着て、口數の少ないイギリスの兵

隊として。ですがこの新生活は、それはもう聯隊の乗つてゐた大きな軍艦の上で始まつたのです。が、これはわたしに不愉快だつたとはいはれません。わたしたち一同は——随分大勢ゐたんですよ——各々自分の分前を星の運行のやうにまちがひなく貫つて、しかも誰が多くて誰が少ないなど、いふ不公平なことなく、他人に迷惑をかけるやうなこともせず、それは——正確に、几帳面に貫ふのでしたが、これが大いにわたしの氣に入つたのです。殊にそのために誰かに感謝しなければならぬといふこともなく、すべてがたゞ吾々のきちんとした生活に適してゐましたから、益々わたしの氣に入つたのです。吾々新兵は、もう艦の中なかから教育を施されて、毎日教練をしなければなりませんでしたが、この仕事は、上手に馬鈴薯をつきさすといふやうなこのために鐵砲を振りまはしたりするのではなく、食ふこととは直接何の關係もない、單なる練習にすぎなかつたので、非常にわたしの氣に入りました。唯何事にもきちんとして、注意深くあればいゝので、その他には何にも頓着するに及ばなかつたのです。艦が出て二日目に、もういろんなすばらをやつて上官に叱られ、更にぶつ／＼不平をいつて殴られてる兵隊も見ました。わたしはそのときすぐに、自分はこんなめにあふまいと思ひました。かうなるとわたしの怒りつばい病氣は、黙つて几帳面に注意深くすることを容易くし、始終どんなふうにしても自分をあまやかさないことができるやうにしてくれて、わたしには大變ためになつたのです。

かうしてわたしは立派な、有爲な軍人になりました。すべてを正しく理解して、模範的と定められたその規則通りにやつてゆくことが面白かつた。またさうやつてゆくことができたので、終ひにはかなり満足に思ふやうになりました。が、以前よりも口數を多くきくといふやうなことはありませんでした。ごくたまには、いゝかげん陽氣になつて、軍人としていかにも適あははしい、同時に他人ひとから嫌はれるのを防ぐやうないたづらもやりました。かうして、この暑い、妙な國に一年を送つたかと思ふと、そろ／＼昇進はじめて、たうとう立派な下士官にまでなりました。そして二三年経つとなか／＼重要な人物になつて、大抵は聯隊長の事務室で仕事をするやうになつたのです。讀書、算術などの必須な學術を、仕事をしてゐる間に、ぢきに、別に頭を痛めることもなく修得してしまつて、立派な事務家になりました。かうしてもうすべてが規則通りにいつて、苦勞も心配もなく、暖かい青空の下にゐることができたので、いかにも満足らしい氣持がしました。わたしのしなければならぬことは、もうひとりで思ふ通りにできていつて、わたしは仕事をしておるんだか、ぶら／＼遊んでゐるんだか、さつぱりその區別も感じなかつたんですからね。かうなつてはもう、食事などはちつとも大事なことでなくなりました。何時いつ食べようと、何を食べようと殆んど氣にかけませんでした。この間二度、ためておいた僅かのお金かねを添へて音信たまをあげたんですが、不思議なことには二度とも船が沈んでしまつたんです。腹がたつたので、

それつきり音信をあげることは断念してしまひました。そしてできるだけ早く自分が故郷に歸つて、鍛へこんだ仕事の腕と、確實な規則正しい生活の仕方を試みようかと決心したんです。これこそ、百萬の金銭を携へてゼルドヴューラに歸るよりもつといふものを持つて歸ることになるのだと思つたんです。で、わたしは例の莫迦のまねでもする奴が途中で邪魔をしたら、どういふふうにやつつけてやらうかつていふやうなことまで考へたんです。

併しことはすらくと運んでいつたんです。といふものは、先づこんな經驗をすることになつたんです。そしてわたし頭の頭の中がすつかりかはつてしまつて、他人にぶつかつてやらうなんていふ氣がなくなつてしまつたんです。それはかうなんです。聯隊長は、わたしをまるで自分の片腕にしてしまつたので、わたしは殆んどすべての時を彼の傍ですごさなければなりませんでした。聯隊長は五十前後の一風かはつた男でしてね、奥さんは多分聯隊長以上にはあつてゐたんでせう、アイルランドで、ある古塔の中で暮してゐました。二人が一緒に暮して居られたときは、たえず野猫のやうにがみ／＼いひあつて、お互に思ひ違ひをしたと確信して、苦しんで居たのでした。どつちもどつちだつたんですがね。夫婦とも丈夫で、かういふ空想をしては、この空想がなかつたらもうどつちも生きてゆかれなかつたでせうが、氣樂に暮して居られた。そして離れるとお互にいろ／＼と氣をつけては、心配してゐるのだつた。二人の間にリディアといふ一人娘がありま

したが、大抵は父親の傍にゐました。父と娘との間でも性の相違といふことは異なるもので、娘は母親よりも父親の方に餘計にやさしい同情をもつてゐましたので、父親に對してはそれは孝順なものでした。また父親が好きでもあつたんです。そのくせ不幸と思ひちがへてゐるかうした關係に就ては、母親も父親と同じやうに、何の責もなかつたのです。あつたとしても父親と同じ程度だつたのです。

聯隊長は、町の外の、椰子や扁柏ひのきや大楓や、その他の樹々の茂つた谷間に、綺麗な風通しのいい住居を構へてゐました。瀟洒とした白壁の家のぐるりに、谷の樹々に包まれた庭園があつて、期節々の新鮮な野菜や花がいろ／＼培養されてゐました。花はこゝら邊りなら、何處の隅にもさらにあるものでしたが、この老人は自分の手近くに出來るだけ澤山集めておくことが好きだつたのです。ですから緑の木蔭は、紅白とり／＼の大きな花で實際見事なものでした。仕事がないときには、わたしは確實な信任の厚い男として、この庭園に手を入れなければなりませんでした。さもなければ、何もしないで知らずしてゐると柔弱になるといふわけで、大佐と獵に出かけなければならなかつた。おかげでわたしは、これでもひとかどの獵人になりました。家のすぐ後ろに何もできない荒地があつて、その涯は、無邪氣な鳥や獸がうんとゐるばかりでなく、ときどき猛獸、殊に大きな虎なんかをかぎつけると、大仕掛な遠征をやりました。かうした機會にわ

たしは、人間と戦^{たたか}をするずつと前に危険といふものを知つたのでした。併し他にもう何もするところがないと、わたしはこの老聯隊長と將棋をさして、娘さんのリディアの代理を勤めなければなりませんでした。娘さんは、將棋が好きでもなければ上手でもなく、まるでいたづら半分だったので、大佐はあまり面白くないんです。それにひきかへてわたしは、ぢきに覚えこんで、無論負け越しには違ひないんですけれど、ある程度まで應戦することができるようになりました。若しあるとき、頭が他のこととかき亂されてゐなかつたら、ぢきに大佐がいくら齒ぎしりしてかゝつてきたつてわたしの方がうまくなつたらうと思ふんですが。

かういふふうにしてわたしは、世の中の随分かはりものになつたんです。軽い蘆のステッキを手にもつて、頭には熱い陽光除けに白い布を冠り、椰子の木の下を黙つて、得意顔に歩いたものです。わたしは軍人であり、事務家であり、庭師であり、獵人であり、親しい友だちであり、閑つぶしの客だつたのです。しかも決して口敷を餘計きかないんですから、全く妙なものでした。この頃はもうさう腹もたてず、かなり満足だつたんですが、黙つてゐることが習慣になつてしまつて、命令を下すか、だらしない兵を叱りつけるやうなこと以外には舌が動きませんでした。併しこれがまた聯隊長の氣に入つたのでした。かうして五年近くずつと聯隊長の傍にゐて、閑なときには何でも自分の好き勝手のことかしてゐられました。この暇を利用してわたしは、大佐の

もつてゐた十二冊の本を何回もくくりかへして読みました。どれも大分ぶあつなものだつたので、その中から世間の特別な一面を知りました。かうしてわたしは——これはその後まもなく自分で氣がついたので——その知識が世間で役にたつかどうかは知らずに、唯黙然と、熱心に読んで知識をとり入れてゆく讀書子だつたのです。何しろ今までに見たり、聞いたりしたいろんなことは、幾分部分的なもので、しかも世間の多くの事柄はその他にあつたのですから。

そのうちに聯隊長は、遂にわたしたちが今までのこの地方全體の總督に任命されました。するとわたしを自分の手許に置いときたいといふので、イギリスに歸ることになつた聯隊から、わたしを、交替にきた聯隊に轉任させたのです。で、再びわたしは、軍人として、猶またその他のいろんなものとして總督の周圍に居ることゝなつたのですが、これはわたしにとつて都合のいいことでした。何故つてかうしてゐればわたしは、軍旗の他には誰も頭に戴かない獨立の人間でゐられたんですから。

ちやうどこの時分に娘さんも、またアイルランドの古い塔からやつてきて、父總督の許で暮すことになりました。娘さんは非常に美しい、姿のいゝ女でした。併し單に美人といふばかりでなく、きりつとしたところがあつて、一目みてぼうつとなりでもした男には、かうした女に代る女や慰めはさう方々にはない、かうした女に二度とはあふまい、と思はれるやうなしつかりした人

物だ——といふ印象を與へる女でした。殊にその氣品の高い凛としたところが、非常に無邪氣な子供々々した點と、氣立のやさしさとに結びつき、このやさしさの中での純真さと何事にも囚はれない無邪氣さと結びついてゐました。あの純真さは、果斷と結びついて、眞の卓越さを與へるものです。そして何事にも囚はれない自然のまゝのこのろの人に、立派な生れながらの卓越さの光りを與へるものです。それに、かうした境遇にある女の常として、幼いときから年頃までの歳月を身嗜みの修業に暮したので、上品なこと何でも出来ました。でも、それがちつとも眼にたゝなかつたので、無學な男がこの娘さんと對談することがあつても、「役に立たない飾物同様のお嬢さんよりもまだものがわからない」といふあのみつともないあわてかたをしないですんだ。娘さんの頭のいゝことは、主に、いろ／＼の小さい出来事や大きな出来事などに對して適切な判斷を下し、處置してゆくところにあらはれました。そしてその考へも言葉も、その聲の調子や動作のやうに可愛らしくて、しかもきつぱりしたものでした。かうしたいろ／＼の特徴以上に——もう前にもお話ししたやうに——子供らしくて悪氣がなかつたので、考へ／＼將棋をさす、なんといふことはできないのでした。それでも快活に、辛抱強く盤に向つて、しよつちゆうお父さんから負かされるのでした。こんなふうだつたので、誰でもちきにこの女の傍にゐても氣がおけなくなつて、いゝ氣持になりました。そして、これこそ女の中の女だ、これ程の女は世間にまたと

あるまい、と思ふのでした。その美しいブロンドの縮髪と、殆んど始終眞面目に、自由に世の中をみつめてゐるその碧い眼とは、いふまでもなくその爲すべきところをなしました。殊にそんなに目立つ美しさの中に、ほんたうの女らしい謙遜と處まじさがあつて、それがまた全く唯一のもの、独自のもの、といふ印象を與へるのでなほさらでした。要するに人物でしたね。——といふのは、さう思はれたつていふんですよ。それともさうだつたのかな。いや結局さうだつたんだらう。偽りの仮面と見えたのは、わたしにだけさう見えただらう。つまり——」

と、いつたきりパンクラツは、先きをつゞけることを忘れて、悲しさうな物思ひに沈んでしまつた。かなり軍人らしくない、殆んど馬鹿みたいな顔をして——。蠟燭は二本とももう半分以上燃えてゐた。母親と妹はうなだれて、もう何も見も聞きもしないので、眠くてたまらない、といふふうに頸をぐらつかせてゐた。が、實は、パンクラツがああ恋らしい女の話をはじめてた頃からそろ／＼ねむくなりだして、今はもう遠慮會釋もなく、しんから寝入つてゐるのだつた。だがわたしたちの好奇心にとつて幸せなことには、大佐はそれに氣がつかかなかつた。いや、一體誰の前で話してゐるのかそれさへ忘れてしまつたのであらう、伏せた眼をあげもせず、寝込んでしまつた母娘の前で話した。長い間胸に秘めてゐたあることをたう／＼話さずにはゐられなく

なつたものゝやうに——

34 「わたしはこの時まで、まだ女といふものを仔細に見たことがなかつたのです。女については殆んど、犀がチーテルを弾くことを知らない程度に知らなかつたのです。前々から人に知れないで、しかも苦もなく垣間見の出来るときでも見るのが嫌ひだつた、といふのはありませんが、女といふものには道理に叶つた明確なことなどはどうでもいいのだ、女といふものはほんの六つの單語をいふ間も、ちやんとしてゐることができなくて、今尤もさうなことをいつたかと思ふと、すぐその後からとんでもない馬鹿げたことや、あべこべのことをいはうとする、それでゐてそれを、腹の底は不正直なくせに、女らしい愛嬌とか氣輕とかいふものに見せかけようとする、殊に半分は自分でもさうと知つてゐる意志に導かれて、このとりとめのないことの蔭に隠れて、あらゆる不正な本能や、ひねくれ根性を満足させようとする——かういふふうに考へてゐたから、もう女と口をきくさへいやでなりませんでした。ですからもう以前から女といふものに對しては腹が立つて、まともに見もしなかつたのです。印度だつて——そこではわたしはすつかり満足で、怒つたりはしませんでしたが——多勢の商人、將校、兵隊などが妻子をつれてきてゐましたから、イギリス生れも、印度生れも、女は多勢ゐましたが、この印度の女も、花のやうに美しく見えま

35 したし、砂糖のやうに甘つたるく話してはゐましたが、たゞそれだけのことで、少しもわたしの心を動かしませんでした。美しいだのやさしいだの、氣がきくだの、氣丈だのといふことはわたしにはつまらなく思はれたんです。殊にこんな女が自分の妻だつたら、わたしの機嫌のわるいきなどはとてもたまらないだらう、と考へるだけでももう悲しくなつたんです。それにひきかへ、印度でわたしのみたヨーロッパの女は大部分イギリス人でしたが、印度の女に比べてすつと氣丈のやうには見えましたが、氣立がよくないんです。萬が一に氣立がよくても、そのやさしさ、正直さを、まるで味も素氣もない手先の仕事みたいにやつてゐました。そしてこの自覺した尊敬すべき女の大いに矜りとする女らしさへも、女としてといふよりはむしろ香味屋として取扱つてゐるので、こゝで少しばかり量り賣りしたかと思ふと、あつちでは町人根性といふ吸取紙の箱の中に大事にしまつておくといふふうでした。それにわたしは日頃から、この西の國の女は、美しい醜いの別なく、みんなその胸の底に賤しい根性をもつてゐると思つてゐました。これは現代の病氣で、吾々即ちヨーロッパ人の男から傳染したのですが、異性にうつつてまた新しい禍になつてしまつたのです。實際近頃は、兩性がその病氣を交換して、生來の弱點を片方から他方に傳へるよくない時代ですからね。これが女に對するわたしの態度の底を流れてゐる、自分にもわからない神經衰弱的の考へで、わたしはこの考へを抱いて、女といふものにまるで無頓着に、自分の

思ふまゝにやつていつたのでした。

ところがこの美人のリディアが現れて、毎日その傍にゐるやうになると、わたしのこの知識はひとたまりもなく壊れてしまつたのです。彼女がそこにゐると、わたしはもう心底からいゝ氣持も侮蔑も感ぜず、そつとながしめに見たいといふあの卑しい氣持も起らなかつたのは、實際不思議ですね。いやむしろ、彼女の居ることそれがもうそのまゝ嬉しくて、圖々しい心持からでなく、自由にあからさまに彼女を見たものです。賤しい身分の兵隊のことですから、訊かれなければこつちから言葉をかけるにも及ばず、従つて端正な、眞面目な下士官らしい動作の他、別に變つたこと、殊に女に對して黙つてゐることは、わたしの永年の不機嫌から第二の天性になつてしまつてゐたので、例外を作る方がいゝと思ふやうな場合でも、いくらさうしまいと思つても、やはりさうなつてしまふのでした。併しわたしはこの女に對しては、心ひそかに大きな好感、異常な好感を感じてゐました。そしてこの女のために、わたしの、女に就ての悪い觀念を變へて、女といふものをそんな悪くばかり考へてはいけない、少くともこの女一人のために、以後は悪く考へないでやらうと考へたものです。リディアが傍にゐるか、リディアのゐるところに行くきつかけを

見つけたときは、非常に嬉しかつたです。でもそのために、事物の自然の歩みを狂はせて、その中から一步先きに踏みだすといふやうなことはしませんでした。同じ部屋に一緒にゐるときなどは、一定の理窟に叶つた理由がないのに彼女の方を見たり、傍へ行つたりは決してしませんでした。そして胸の中には、風もなく太陽に照らされてゐる涼しい海の水のやうな静けさを感じてゐました。

こんなふうだつたのは凡そ半年、一年、いやもつと長かつたかもしれませぬ。もうはつきり覚えてゐないんです。その時分のこととはたゞ全體がぼうつと、蒸暑い、夢ばかりみてゐる夏の日のやうにちら／＼するだけで、勘定なんかまるでできないんです。はじめのうちは——それが長かつたか短か／＼つたかもう覚えてゐないんですが——何もかも都合よく、靜かに運んでいつたのです、この女も屢々わたしと顔を合せなければならなかつたのですが、特にわたしと頻繁に交際はうとか、話をしようとかいふやうなことはしませんでした。でも話をするときには、非常に深切でした。そして、いつでもその美しい顔に子供らしい、無邪氣な微笑を浮べてゐるので、わたしは益々實直さうな顔付をして、『さうでございます、お嬢さん！』とか、滅多にそんなことはありませんでしたが、何か思ひちがひでもしてゐるやうなときには、率直にそれを打ち消して、その深切に有難くお答へしてゐたものです。併し娘さんがゐなくて、わたし獨りぼつちのときには、いろ

いと彼女のことを考へました。併し決して惚れた男のやうにはありません。眞面目に彼女のことを思ひ、彼女の幸福を希望し、彼女のためにいろんなことを考へ出してやる親しい友だちか、乃至は縁者のやうにでした。でもそのために——よく考へてみると——總督に對して十分自尊心を保つてゐること、義務以外のものは何も知らない軍人らしくしてゐること、その他の仕事に於ても——斷じて俸給を貰つてゐなかつたからでもあらうが——獨立の外見を維持してゐたこと、俸給を受ける事務室内の仕事がすむと他の用事は悉く親密な、信用された者としてすること、そして時折總督と食事を共にしたり、酒を飲んだりすること——などには少しの變化も來さなかつた。だからわたしは前にもいつたやうに、全く平靜で、満足してゐました。勿論自分の特別な方法で例外をやることはありませんが。

と、ある日のことです、こんなことがありました。わたしが木蔭で庭の手入をやつてゐると、リディアが一時間程の間に三度、別に用事もないのにやつてきたんです。最初は籠をひつくりかへしてその上に腰をかけて、ひつきりなしにわたしと饒舌つて、わたしに話させよう／＼としながら、小さな籠にいつばいあつた櫻實を食べてしまひました。二度目には、わたしが手入れしてゐる薔薇のすぐ近くに籠を押しやつて、またその上に腰かけて、綺麗な夜の帽子につける白絹のリボンか、さもなくば何かさういつたふうのものを縫ひはじめました。そのときはわたしも少な

からず面喰つて、彼女の方を殆んど見もせず、あまり話もしなかつたので、その縫つてるものが何だつたかはつきり見分けがつきませんでした。彼女はちきにまた去つてしまひましたが、三度目には、象牙に細かな細工を施した支那の智慧の環をもつてきて、あの古い籠は掴んで少し向ふの方へ引き摺つて行きました。そして少しはなれて、わたしの方に背を向けて籠に腰をかけ、すつかり黙りこんで環解きにかゝりました。今度はわたしの方が、ぢつと彼女を見てゐました。と、彼女はその玩具を隠しに入れたがら急に立上つて、それは／＼いゝ聲を頼はせて歌ひながら、わたしたちの方を振りむきもしないで去つてしまひました。さてこれが、このすべてのやり方がわたしにはどうも合點がかなかつたのです。そしてわたしの心は、かうした振舞に少々鼻を歪めたのでした。が、この時からわたしはリディアに參つてしまつたのでした。

極めて變挺な工合に、が、ほんの少しばかり興奮したわたしは、そのまゝ手入れをやめて、雙銃を携へ、夕方にかけて荒地に出かけました。いろんな獸を見ましたが、みんな撃つことを忘れてしまひました。狙ふ度に、あの女の動作を思ひだして、はつとして氣づくともうその時は獣の姿はどこに行つたか見えななんです。

彼女はわたしに何の用があるのだらう？　そしてあれにはどういふ意味があるんだらう？——とわたしは考へました。併しこのことをとやかくと考へるうちに、この出來事の中に在るすべて

のありうること、あり得ないことに對する大いなる感謝の念が胸に燃えてきました。そしてそれに對してわたしの着實な心と、自分がやくざな、愛嬌のない人間だといふ自覺とが激しく戦ひ合ひました。しかもそれをどうすることもできないところから、わたしの心は急に、この美しい才氣ある女も、結局は誰とでもかゝりあふ、賤しい身分の下士官とでも浮名をたてることを恥づかしいとも思はない至極單純な、輕はづみな、淫な女だといふ逃避を探しました。が、この呪はしい考へは、反てわたしを非常に悲しませるのみでした。そして豫想もしなかつた程の打撃を、わたしの胸に與へました。わたしは悲しさのあまり憤怒を感じてその瞬間深い茂みの中から跳び出した大きな野猪をはつしと射止めました。彈丸は丁度わたしの頭の中のあの賤しい考へと殆んど同時に、そして同じやうに思ひがけなく、生憎その腦に止つたのです。わたしはそこに横たはつた野猪を見下しながら、むしろこの野獸の方が、生の惱みを絶つてしまつただけに羨ましいやうな氣がしました。わたしはその屍の上に腰をおろしました。そしてちつと考へ込みました。頭の中をあ的美丽い姿が通つて行く。そして彼女が、三度、三度とも彼女らしい動作をしてやつて來たあの姿がはつきり見える、彼女のいつた言葉の一つ／＼がまだ耳に響いてゐる。併し不思議なことにはこの美しい記憶は、今日の出來事をこえて、遙かに、彼女に初めて會つた日、わたしがまだ非常に平靜であつた頃まで溯つて行きました。大氣の澄んだ、雨模様の日、遠く連なる山

山の、ふだんは見えないいろんな物がはつきり見えたり、靜かな夜に遠くの鐘の音が聞えたりするやうに、今はわたしは、あの時分の彼女の一舉一動が、自分自身の氣づかない間に、深くわたしの胸に刻みこまれてゐるのを見て不思議に思ひました。いやそればかりか、殆んど、彼女のいつた言葉の一つ／＼が、別になんでもない、ほんのその場かぎりのものさへ、この荒野の寂寞の中ではつきり聴きとれるやうに思はれました。考へて見ると、この美しいことの數々は、今迄みんな眠つてゐたのです。でなければそつとわたしの胸の中に宿つてゐたのです。ですから今日の出來事は唯その前の門を除いてくれたに過ぎないのです。言ひ換へれば松明を藁束に投げてくださいにすぎないのです。

かうした思ひに耽つてゐるうちに、腹立しさもいつしか忘れたやうに鎮まつて、たゞもう食るやうに美しい記憶から記憶へと喰ひ入つて行き、リディアの姿についてわたしの手に收められる一切のものを奪つてしまひました。家に歸つてからも、ひたすらこの楽しい思ひに身を委ねました。併しもうかうなつては平氣で彼女の傍にゐられませんでした。といつて別に變つたことを始めることもできなかつたし、考へてもゐなかつたので、できるだけ彼女との交渉を、殊に彼女のことを考へることを避けようと努力しました。そこで彼女はといへば、よほど控へ目にしてゐるやうでしたが、それでもわたしのために何かしたりいつたりする機會をはずさないやうにしてゐ

るのが感じられました。が、たゞそれ丈けのことで、別に變つたことも起らずに三、四週間ばかり経ちました。すると、彼女はわたしの言葉の使ひ方や、物事に對する判断や、嗜好を眞似て、何んでもかでもわたしの好きなやうに、わたしの氣にいるやうに仕向けだしました。併しそれも初めのうちは、以前から彼女が、理窟に合つたことにしろ合はぬことにしろ兎に角、わたしの考へと同じ考へを抱いてゐるのをわたしは愉快に思つてゐたので、別に變つたことゝも思はなかつたのです。わたしが笑はずにゐられないことには、彼女も笑ひました。またわたしが腹をたてずにゐられない間の抜けたことがあると、彼女も腹をたてました。しかし終ひには、わたしが一言も口をきかないので、氣に入るやうにしよう、氣に入るやうにしようとする彼女の態度が目立つてきました、しかもそれは胸に一物あつて嬌態を見せる女のやうではなく、單純な、邪氣のない子供のやうなので、わたしはすつかり當惑して、どういふ態度をとつたらいいものかわからなくなりしました。ところがうまい工合に、當時すつかり癒つてゐた例の怒る術の中に遁れることを思ひ付いて、早速この術の磨きにかゝつたのです。そしてすつかり練りあげて、彼女とのこの特殊な状態をちつとも幸福だと感じない位にまで達しました。すると彼女は、すつかり胸を痛めて、萎れて、物思ひに沈み勝ちに見えました。ところが困つたことには、その結果が平常しつかりした彼女に更に魅惑的な力をつけ加へることになつたのです。普通の女では、そしてそれが賤しけ

れば賤しい程、かうした羞むやうな謙遜によつて輝き、人を引きつけるといふことはあまりないものですから。いや、むしろ女は、非常にしつかりしてゐること、圖々しくすることより他に、似合ふものはないと思つてゐるんですから。かうしたことになつたところへ更に老總督が、わたしにはなぜだかそのわけがわからないが、あまり品のよくない態度でからかつたり、冗談をいつたりしだして、日に十遍も、「リディアや、ほんとにお前はパンクラッツにお思召しがあるんだね！」なんていふので、わたしにはもう面倒くさくなつてしまひました。實際悪い冗談だと思つたものですからね。娘さんに對する言葉としてはあまりに潤ひがなくて、その調子が賤しいし、わたしに對する言葉としては出鱈目で、亂暴ですもの。わたしは彼に面と向つてこのことを告げ、今後彼のことを氣にしようかとしたことが度々ありました。後の方のことは、わたしがすつかり用心深くなつて、何事も控へ目にするといふ程度でやりました。リディアは單調になりました。さうだ、顔色が蒼ざめて、惱ましげにさへ見えませんでした。わたしは少なからず心を痛めました。どうすることもできませんでした。併し、かうしたわたしの態度にもかまはず、彼女が再びわたしの後をつけたして、しよつちゆうわたしの居るところで何かしらするやうになつたとき、わたしはがっかりしてしまひました。そしてがっかりしながらも、彼女とときれ／＼な、ぎこちない^雑話を交すやうになりました。わたしたちの話したことは、別にとりたてゝいふ程のことではあ

りません。二人はまるで馬鹿のやうに、ぼんやりしたつまらないことばかりいつてゐるのでした。でも、二人はそれにはちつとも気がつかなくなつたらしく、お互に子供のやうに笑ふのでした。そしてわたしはそのために他のことをすっかり忘れてしまつて、果てはほんの短かい話でも彼女とするのが嬉しくなつたのです。けれどもこの幸福は二分間以上は続きませんでした。何故つて二人とも落付きと思慮の足りないところから、すぐにまた話の糸を断つてしまつたのです。ちやうど眞珠紐を切つて綺麗な眞珠が抜けてゆくのを悲しさうに見てゐる子供のやうに。それからまた二三週間たつて、かうした大きな企ての一角が成功しました。が、わたしはすぐに、自分の名譽を傷けるやうなことはすまい、この少々變人らしい人々のところでは、決して馬鹿なことをすまい、と考へたものですから、決してこちらから先きに手を出すやうなことはしませんでした。そして此處を去つてしまはうともう何遍となく決心したのですが、そのうちに月日がどん／＼たつて、その實行はしよつちゆう延ばさなければなりませんでした。もうその當時はこのことばかり考へ込んで、頭が大分變だつたんですからね。

總督の書物にも、しまひにはいゝ加減飽きてきました。もう何もそれから教へられることがなくなりました。わたしがよく本を読むのを見てゐたりディヤは、この機會を利用して自分の本を二三冊呉れました。その中に聖書のやうな厚いのが一冊ありました。装幀が黒い皮に金文字入な

ので、頗る宗教的に見えました。併しそれには正劇と喜劇ばかりが一番小さな英語の活字で印刷してあつたのです。この本をシェイクスピアといつてゐましたが、それは實はこの作者の名で、卷頭にその肖像もありました。この誘惑的な似而非豫言者はわたしをすっかり困惑させて了ひました。彼は世間をあらゆる方面に亘つて、獨自に、ありのままに描いてゐます。併し彼の描いたその社會は、善に於ても惡に於ても自分の生存と嗜好の働きを完全に個性的に營み、且各々が透明な水晶のやうな、純粹な水のやうな、さういふ人間の社會なんです。だから下手な文士が、平凡な色のない不完全な世界を支配し、描き、それによつて愚物を迷はせ、盛澤山のやくざな欺瞞で充たすところを、この人は完全な、出来上つた世界といふのはかうあるべきだといふ世界を支配し、それによつて賢いものを——もし賢いものが世の中でこの本質的な生活を見、再び發見することができると思ふならば——迷はせる。大膽な、不良な女はまだ外にも澤山ゐる。併しマクベス夫人のやうに美しい夜の彷徨や、小さな手をおど／＼と擦るやうなことはしない。吾々の遭ふ毒を含んだ女は、たゞ圖々しくて後悔がない。その罰を耐へた後には、もうすぐに自分のその話を書いたり、店を開いたりする。自分はハムレットだと思つてゐるものは他にまだ多勢ゐる。彼らはみんな誇つてゐる。眞のハムレットたるものゝ大きな心の悩みなんか夢程もないくせに。こゝにマクベスのやうな惡魔的な男らしさもなければ、それかといつてまた人道的な男らしさも

ない殺伐な人間があるかと思へば、そこにはリチャード三世がある。しかもその機智と雄辯とはなくて。こゝに美しくないポルチアがあるかと思へば、そこには才氣のないのがある。あそこにはまた才氣があつても、賢くない、そして人々を不幸にすることは知つてゐても、自分自身を幸福にすることを知らないのがある。今のシャイロックは吾々の肉を切り取りたがるだらう。併しそのために決して現金を立換へてはくれまい。今のヴェネチアの商人は、呑氣な友だちの無一文のために危険に陥るやうなことはない。却つてつまらない相場の變動のために危険に陥る。陥ても決して美しい憂鬱な演説なんかせず、馬鹿げた顔付をするだけのことだ。實際のところ、前にもいつたやうに、かういふ人々はみんなこの世間にあるだらう、併しあの詩の中のやうに都合よく一緒にはゐまい、決してほんたうの悪人がほんたうの豪氣な男にぶつかつてゐない、また完全な馬鹿がほんたうに賢い快活な男にぶつかつてゐない、だから眞の悲劇にも、また眞の喜劇にもなることができない——のです。わたしはしかし夜通しこの本を読みました、いかにも深刻に、そして適切に書いてあるやうに思はれたので、わたしはすっかり引き込まれてしまひました。すべてが卓^たれて居り、眞實であり、完全であるやうに思はれて、わたしはそれをほんたうの正しい世界であると思ひました。殊に描かれてゐる女性などに就ても、美しい星のリディアに誘はれ導かれて、すっかり彼れ作者を信用してしまつて、こゝにわたしの光明が見えはじめたのです。わ

たしの疑問に充ちた混乱と苦悶の解決が見つかつたやうに思はれたのです。

よし——デスデモナ、ヘレナ、イモーゲン、その他いろ／＼の美しい女性が、その高い女性の自主をすて、妙な奴の後を追ひかけ、想ひをよせて、無邪氣な子供のやうに向ふみずに、英雄のやうに氣高く、強く、眞心あり、空の星のやうにかはらないのを見て、わたしは考へました——さうだ！これがわたしたちの場合だ！何故ならこのリディアは、堅固な、綺麗に出来上つた、眞直に走る女といふ舟にちがひない。かういふ舟が錨をおろすのは後にも前にもたつた一度きりで、一旦おろした以上はもう底しれぬ深みに喰ひ入つて、自分の欲するものをよく識つてゐるのだ。——かういふ考へが、輝き出る灼熱の太陽のやうにわたしの胸の中に昇つてきました。そしてあの美しい娘の一舉一動や言葉をみんなその光りに照らして見ました。さうするとまもなく、彼女がわたしの眼には、あの偉大な詩人が力強いその空想の力を以て考へ出したすべてのものより卓^たれて見え出しました。この生きた詩には血と肉があり、ほんとの心臓が高鳴り、房々とした金髪がほんとに頸に垂れ、陽光の中を駆けまはつてゐるではありませんか。

あの薄氣味の悪い謎はやうやくとけました。わたしはもう、シェイクスピアと腕比べをしてものにしたこの幸福の中に浸ることと、やくざな、そして人好きのしない自分を一生懸命にあの美しい蜃氣樓に結びつけて出来たいろんな計畫やら目算やらによつて、かうした運命の氣まぐれ乃

至は氣高く偉大な女性の氣まぐれに對してある點まで確實に支持しようとする以外何もすることがありませんでした。かうした愛人に對して抱いた限りない感謝と尊敬の念は、無論大部分はわたし自身の自惚のうちに根をはつてゐたのです。併しそれよりもつと大きな部分はたしかに、これが、この大切な女性を侮蔑したり、同情したりしないで、解決を與へることのできる唯一の方法であつた、といふことにあります。何故つて彼女に對して抱いた尊敬は、もうわたしの生活に缺くことのできないものになつてしまつて、どんな人に對しても、またどんな猛獸に對しても、未だ嘗て顛へたことのないこのわたしの心臓が、彼女に對しては顛へたのですから。

かうしてわたしは半年ばかりといふものは、夢遊病者のやうに、林檎のいつばい實つた樹のやうに夢をいつばい擔つて、しかもリディアとの關係は一步も進めることなく、同じところをぐるぐる廻つてゐました。わたしはもうどんな小さな出來事でも起ることを恐れたのです。ちやうど善良なキリスト教徒が死によつて永久の幸福に這入れることを確信しながら、その死を恐れるやうに。ですからわたしの頭の中は益々混亂してきたのです。

わたしは仕事に手がつきませんでした。何の役にも立たない人間になりました。このとき一番いやだつたことは、二時間も三時間も老人と將棋をさゝなければならぬときでした。そのときはどうしても注意をこの遊びの方へ向けなければならぬと、苦しい胸の思ひに耽ることは、一

番すんで、また碁子をならべるその僅かの時間しか出來ないのですから。そこでわたしはあまり目立たない範圍で、できるだけ早く草臥れてしまつて、なるたけながくかゝつて王や、女王や、僧正や、桂馬や、歩等をならべて、城のまはりをあちらこちらと徘徊させました、だもので總督は、わたしが茶目になつて、碁子をおどらせて面白がつてゐるのだと思つてゐました。

併ししまひにはこのわたしの肉體も精神も、いやすべてのものが、ぼんやり夢ばかりみてゐるその幸福の中に溶け込んでしまひさうになつてきました。そして危く癲狂院行きになりさうになりました。それにかうした金色の蜃氣樓を見てゐながら、見果てぬうちにいつも、かうしたいろんな夢に向つて控へてゐる現實に打ち壊され、實在のあの冷却と放散の兩力によつて愈々その幻を打ち消され、もう何ともいひやうのない程小膽になつて悲しみました。それはまあ實際生活の美しい薔薇が身を包んでゐる防禦の棘トゲですね。リディアがやさしく、打ち融けて來ればくる程、わたしは愈々不安になりました。何故かといへば、口に出さずにほんとの戀を相手に示すことがどんなにむづかしいものであるかといふことを考へましたから。彼女がいかに切なげに惱んでゐるやうに見えるときだけ、わたしはある尤もな希望に對する半分の理窟を作りあげました。併しその結果、それがまた愈々わたしを苦しめることになりました。そしてこのわたしの頭を踏みたいといへば、喜んで踏ませたであらう彼女が、わたしのためにたゞの一分間でも苦しむ程の値

打は自分にはないと考へました。ですが、あるとき、彼女が自分が愉快でゐたいために、自分に戀をしてゐる阿房者の仕立屋のやうなふうをしてゐてくれと頼んだのには腹が立ちました。わたしは斷じてそんな阿房者ではないといふ理性はもつてゐましたが、事實の上では、彼女の満足のためにはどうにでもなるといふ考へがあつたものですから。つまりわたしは、頭がすっかり混亂してしまつて、もうたつた一つの仕事さへも満足に片づけることができなかつたのです。ですから何にも使ひどころのない、まあ人の代りを勤め下僕にでもなつて總督の家にすがりでもしなければ、軍人としては位を落されるか、さもなければ罷めさせられるかしさうになりました。

そこで、イギリス人が印度人と劇しい争を起して、遠征することになつたとき——この遠征の結果はイギリス人にとつてかなり悲惨でしたが——わたしはすぐに決心して、總督から暇を貰つて、立派な軍人として自分の中隊に這入りました。併し總督は遠征のことなどはどうでもいゝといつて、怒つたり、すかしたり、頼んだりして、わたしを引止めようとはしました。まるで、人間といふものはそのすべてが、身體や生命や、幸不幸を度外にして、たゞ自分の暇つぶしや、快樂のために、勝手になるものだと思つてゐる人々のやうに。

それにひきかへてリディアは、わたしが暇を貰ひたいといふ話を持ち出してから三四日の間といふものは、殆んどその姿を見せませんでした。二度か三度か姿を見せましたが、そのときはわ

たしの方を全然振りむかないか、さもなければ怒つた視線をちらつと投げるやうに見えました。でも怒つてゐるやうに見えたのはその眼ばかりで、彼女の歩き振りやその他の所作は至つて淑やかで、氣高く、慎ましやかなものでした。ですからこの美しい怒りともいひませうか、それが猶更わたしの胸を痛めるばかりでした。またわたしは、彼女が毎朝遅く部屋から出てくるので、みんながどうしたのかと案じてゐるといふことも聞きました。何故つて、それは、彼女が夜眠らないといふことを意味してますからね。

かうして最後の日がやつて來ました。その日、わたしは偶然彼女が自分の部屋の窓の蔭にゐるところを見ました。彼女の目はすつかり泣きはれてゐるやうに思はれました。わたしがそこを通りすぎるとき、彼女は急いで引込んでしまひました。こんなことがありましたが、わたしは平氣で、わたしの辿るべき曹長としての峻しい道を歩きつゞけて、脇目をせずにしてすべてを片づけて行きました。夕方もう一度、下僕に菜園の手入法を簡単に教へて、手慣れたものがくるまでのまにあはせに俄かつくりの植木屋に仕上げるため、下僕と一緒に菜園を廻りました。ちやうどわたしの育てたいかにも氣品のある薔薇の植込の中にあるときでした。この薔薇の木は顔の高さ位まで伸びてゐて、その中を歩きまはると、花が鼻の邊を撫でて、頗る詭へ向きに出來てゐました。總督も花の香をかぐのに腰を屈めるに及ばなかつたので、よく笑つてそのことをいはれたものです。

その薔薇の中でわたしが下僕にかういふやうにあゝいふやうにと教へてゐると、そこへリディアがやつてきて何か用事をいひつけて下僕を向ふにやつてしまひました。そして自分もすぐ一緒にやつてしまひさうな振りを見せましたが、暫らく薔薇の花を撈りながら、下僕がいつてしまふまでためらつてゐました。わたしも同じやうに暫らく、枝を揺ぶりまはしてゐましたが、もう行かうと思つて振りかへると、リディアの目に涙が浮んでゐるのを見ました。ぐつと自分を押へるのはなか／＼骨でしたが、ぐつと踏み耐へて何も見ないふりして急いでゆきました。併し十歩も行ったか行かないうちに、彼女が駆けだしたり、立止つたりしながら、わたしの後をつけてくるやうな足音が聞えました。いやさういふふうに感じられたのです。そしてそれがしばらくの間續きました。わたしはもう我慢ができなくなつて不意に振りかへつて、わたしからもう三步と離れてゐない彼女にいひました。

「お嬢さん、何故わたしの後をつけていらつしやるんですか？」

彼女は蛇にでも驚かされたやうに立止りました。そして視線を地に落して、顔を眞赤に染めました。それから蒼白になつて、全身を顫はせながら、その大きな碧い眼をわたしにむけて、一語もいはないのです。が、たうとう彼女は、怒つた誇りとすべてを堪へ忍ぼうとする謙遜とが争つてゐるやうな聲でいひました。

「自分の屋敷の中は、わたしはどこでも勝手に歩きまはることができると思ひますわ。」
「御尤もですね！」

と、わたしは小さな聲で答へて、また歩きだしました。その時は彼女はもうわたしの側にきて、並んで歩いてゐました。わたしは併しひどく興奮して、大股に速歩はやあしで歩いて行つたので、彼女は精いつばい努めてもなか／＼ついてこれれさうにありませんでした。が、それでもついてきたんです。わたしはびつくりして幾度も流し目に彼女を見ました。彼女の目にはまた涙がいつぱい溢へてゐました。そしてその眼を悲しさうに淑やかに地に伏せてゐました。わたしも顔が燃えるやうにあつくなつてきました。目も濕つてきました。事件は今やかうして頂點に達したのです。兩方とも、いやわたしはしようと思へてはゐなかつたが、馬鹿げたことか、良心があつたらできないやうなことをしさうになりました。併しわたしはかうして彼女と並んで歩きながらも貧しい頭の中で考へましたね——この女がお前を愛して居り、お前も眞面目に彼女の手を握るなら、お前は永遠に彼女に仕へるべきだ。たとひ彼女が鬼であらうと！

彼是してゐるうちにわたしたちは、オレンジの木が十本か二十本植ゑ込まれた場所にやつて來ました。あたりにはえもいはれぬ香が漂つて、軟かい新鮮な微風が美しい、姿の嵩高な幹の間を

通して吹いて來ました。この魅惑的な微風と芳香とは、そのときのことを考へると今も猶ほ感じられるやうな氣がします。多分わたしと並んで歩いてゐた娘にも、わたしと同じやうな影響を與へたのでせう。彼女は、實は自分自身に對する愛であつたその妙な情熱を極端に感じて、まるでそれが男に對する眞の愛でもあるかのやうに表現しました。彼女はオレンヂの木蔭のベンチに腰を下して、美しいその顔を兩手の中に埋めてしまつたのです。金色の毛髪がその上にふりかゝつて、指の間から涙がぼた／＼と落ちました。

わたしは彼女の前に立止つて、何か拒否するやうな調子でいひました。

「リディアさん、何の御用なんです、どうなさつたんです？」

「何の御用なんですつて！ 身分のある綺麗な女をこんな苦しみたり、いぢめたりすることを、わたしは今までできたことがございません！ 一體あなたは何處の野蠻な國からおいでになりましたのですか？ そして胸の中にはどんな木をもつてらしやるんでせう？」

「わたしがどうして苦しめるんです、どうしていぢめるんです？」

と、わたしは當惑して答へた。いゝ意味でいつてゐるのかしれなかつたが、とにかくこの言葉はわたしにとつては不當だと思つたものですからね。

「随分粗野な高慢な方ですわ！」

彼女は顔を伏せたまゝいつた。

わたしはもう自分を抑へてゐることができませんでした。わたしは答へました。

「お嬢さん、わたしがこの胸の中に抱いてゐる心持を、あなたに對してどんなに粗野でなく高慢でないかといふことを御存じだつたら、よもやそんなことは仰しやいますまいが！ わたしの心からの慇懃と謙遜、それが——」

わたしが句を切つたとき、彼女は顔をあげました。そして痛ましい、哀願するやうな微笑でその顔を晴やかに装ひ、あわたし／＼しくいひました。

「それで？」

この時彼女の投げた一瞥によつて、わたしの思慮の最後の残りが奪はれてしまつたのです。愛人の足許に跪くなどといふことは、馬鹿々々しくて氣障なものだ、そんなことはとても自分にはできさうにないと思つてゐたこのわたしが、——どうしてさうなつたのか今となつては分りませんが——不意に彼女の前に跪いて、うなだれ、悔悟して、顔を彼女の着物の裾に埋めて、それを熱い涙で濡したのです。彼女は併しすぐにわたしを退けて、お立ちなさい、といひました。わたしが立上ると、彼女の微笑は愈々綻びて、一段の美しさを加へてゐました。そこでわたしは、

「さうですか——それぢやお話ませう。」

と、叫んで、自分でもこんなに雄辯に話すことができようとは思はなかつた程雄辯に、しかも残らず話して聞かせたのです。

そも／＼のはじめから今日に至るまでのことを何一つ隠さず、殊に喜びに漲る心から、わたしの胸の中に生きてゐる彼女の繪姿の素描までみせて、それをもう半年も、いやもつと前から熱心に忠實に描きあげてきたことを話す間、彼女は珍らしさうに耳を傾けて聞いてゐました。彼女はうつ向いたまゝ、顎を片手で支へ、満足さうに聞きながら微笑んでゐました。そして自分の卓れてゐる點や、魅力や、言葉など、一として忘れてたものゝないわたしの話し振りに、有頂天になつてきて、まるで欲しくてたまらなかつた玩具を與へられた子供のやうに見えてきました。それから彼女はわたしに手を差出して、ぼうつと顔を染めながら、でも満足さうに落着いていひました。

「あなたの心からの御好意に御禮を申し上げますわ！ わたしのためにそんなに長い間お心を痛めていらしたことを、わたしほんとお氣の毒に存じますわ。でもあなたは立派なお方ですこと。こんなにきれいに、深く愛して下さることがおできになるんですもの。わたしあなたを尊敬しすには居られませんわ！」

56 この落着いた文句は、熱しきつてゐるわたしの胸に、一片の氷のやうな感じを與へました。が、

すぐにわたしは思ひ返して、彼女が今とり紊さない、氣取りやの女の眞似をしたいといふのならそれを宥してやらう、そして彼女がどんなことを企てようと、またどんな調子をとつてこようと、今はすべてを諦めてしまはうと考へたのです。

併しわたしは心配さうに答へました。

「お美しいリディアさん、わたしのことなんかどうでもいゝんですよ！ わたしが現在苦んでゐるかゐらないか、また過去に於て苦んだか、將來に於て苦しむか、そんなことは、あなたが堪へ忍んで居らつしやる不愉快な、さもなければ苦痛の一分間に比べたなら、なんでもありません。わたしのやうなやくざな、片意地な人間は、かうした一分間を、どうしたなら、補つたり報いたりすることができでせう？」

「それちや、」矢張り目を伏せたまゝ、そして微笑みながら、が、前とはすつかり變つた調子で彼女がいつた。「それちやわたしも申上げないでは居られませんわ、あなたの冷たい氣のきかない態度にすゐぶん怒つたことや、苦しめられたことをね。だつてわたしあなたのやうな應接には慣れてゐなかつたんですもの。いえ、わたしは何處へ行つても親切に、丁寧にあしらはれてゐたんですもの。あなたの粗野な、まるで感情といふものがないやうなのに、わたしすゐぶん怒りましたわ——思ひきつて申上げますけれど——父やわたしがあなたを大切にしてくれ、なほのこ

と腹がたちましたの。それだけに、あなたも幾らか心ある方だといふこと、殊にわたしが自分自身、身の値打をこの上疑ふに及ばなくなつたことが判つて嬉しうございますわ。何故つてわたしの心を一番痛めたのは、わたしの胸の中で動きだしたこの自分自身に就ての、わたしといふものに就ての疑ひだつたんですもの。その他ではあなた、あなただつて、他の人と同じやうに別にお好きだつて感じはしませんの。でもあなたは、今みせて下すつた奉仕と優しさのすべてで、いつまでもわたしを嫌はずに愛して下さるでせうと思ひますわ。』

わたしが率直にうち明けてしまつた後は、もうすつかり兜を脱いで彼女の前に額づくものと思つたのなら、それは彼女の思ひ違ひであつた。善良な可愛い女と思ひ違へたればこそ、わたしの心もあやしく顫へたのですが、今眼の前に見るこの偽りの、危険な我執の獸に對しては、虎や蛇に對していつもさうであつたと同じやうに、もうわたしは決して顫へたりはしませんでした。そこで彼女の豫想とは反對にまごついてがっかりするかはりに、或はまたかうした場合によくある思ひ違ひを取除けようとする、そんなことも敢てせず、わたしは急に冷たく、思慮深くなつてしまつたのです。それはちやうど、ひどく辱しめられ罵られた男か、さもなければ氣高いおづおづしてゐる鹿の代りに、急に眼の前に野生の牝豚を見つけた獵人でなければできないやうに。といつて、勿論今眼の當りに美人を見てゐなければならなかつたのですが、それだけにその時は實

に、妙にこんがらがつた不氣味な冷たい感じを味ひました。これは美人の持つ不可思議な祕密ですね。

この時わたしの顔が眞黒に陽灼けがしてゐなかつたら、恐らく、頭の上のオレンジの花のやうに白く見えたらうと思ひます。暫らく黙つてゐてからわたしはいひました。

『それではあなた自身の人柄に對する立派な信仰をとりかへすために、あなたは、純真な深い愛と諦めとのあらゆるしるしをお使ひになることができたんですね？ 母を探す無邪氣な子供のやうに、わたしの後をつけたり、始終わたしの氣に入るやうにしたり、蒼白になつてさも切なげになつたり、涙を流したり、わたしが一言でもあなたと話しをすると、いかにも嬉しさうになつたのは、あれはみんなかうした目的だつたんですね？』

『わたしのしたことがさうお見えになつたのでしたら、彼女は相變らず満足さうにいつた。』多分さうだつたんでせう。あなたはちよつと意地わるな、自惚れ屋さんですわね！ あなたはこんなに優しい、此上もない女が身をすてゝもとまで思ひ込む、その愛の對象ぢやないんですか？ 可哀さうな可哀さうなわたしは、満足していらつしやるあなたからごらんになればメー／＼いつて鳴く小羊ぢやありませんか？』

『わたしは満足してはゐませんでしたよ、お嬢さん！ でも、キリストさへ人間に對する絶大

な愛のために自分を犠牲にし、人類が遠い昔から、この神々の正しい愛に値してゐること、その愛を追ふことの中に最高の幸福を見出してゐるのに、わたしだけがどうして愛されてゐると考へることを恥ぢなければならぬでせう？ いゝえ、リディアさん！ わたしは自分があなたの捕虜になつてしまつたこと、蔭で演つてる馬鹿げた喜劇の他何も怖れなかつたといふよりはいつそはつきりと、何物にも囚はれない心の純な愛と深切とを信じてゐたといふ方をわたしの名譽に數へます。實際馬鹿らしいことですからね！ 哀れな軍人の中でも最も哀れなこのわたしを自分のものにするために、こんな手段をおとりになつたのは、一體あなたは御自身自身に對する信用にどんな保證があつたのです？ え、おきれいなイギリス貴族のお嬢さん！」

「どんな保證ですつて？」だん／＼蒼白になつて、あわてゝきたリディアが答へた。「あら！ たうとう無理に白状おさせしたわ、あなたが思ひこんでいらしたことを。でもあなたのお心がわたしに奪はれてしまつたこと、前から随分わたしがお氣に召してゐたと仰しやつた今のお話とは、まさかうそではございませんでせうね？ それがほんとでしたら何故あなたは粗野な方なのにそのことを、ちつとも飾り氣のない無類な人に似つかはしいやうに、少しも外におあらはしにならなかつたのです？ それが羊飼ひでしたら、今あなたが仰しやつたやうなこの喜劇を、わたしたちは演なくてすんだでせうに、そしてわたしは満足したでせうに！」

「あなたがわたしを平靜にしておいて下さつたら、お嬢さん！ あなたの方が得をなさつたでせうが、あなたはもうお忘れになつてゐるやうですね、この好意が今はどうしてもその反對に變らずにはゐないといふことを、ほんたうにわたしにとつても悲しいことですから！」

「あなたには何をもつてきたつてだめですわね。わたしは自分があなたのお氣に召したこと、あなたの血の中に暮してゐるといふことを知つてゐますわ！ あなたの告白をおき／＼しました、そして確かに自分が勝つたと信じてゐます。他のことはみんなどうでもいゝんです。かういふものですよ、パンクライツさん、美の女王の國で罪を犯したものは、かういふふうに罰を受けるんですのよ！」

「と、仰しやると、この國はチゴイネルの群と同じやうですね。どうしてあなたは、卑しいかつさらひの女みために、盗んだ鳥の羽毛を帽子につけることがおできになるんですか？ 持主がいけないといふのに？」

彼女は答へた。

「持主さん、この世界ではね、盗むといふことが名譽になるんです。あなたがお怒りになるのは、たゞわたしがどんなに上手にあてたかつていふ證據になるばかりですわ！」

こんなふうにしてわたしたちは半時ばかり、爽かなオレンジの林の中を、苦い冷たい言葉で争

ひながら歩き廻りました。そしてこの人目を忍ぶ戀愛が彼女にとつて、彼女の考へてゐる程値打のあるものでないといふことを、いくらいつてきかせても得心が行きませんでした。わたしは世間にさらに轉がつてゐる馬鹿げた例を引いて、證明をしてやつたばかりでなく、彼女の間違つてゐること、彼女自身の行ひの度ましくなくことを感づかせようと努力したのですが、どうしてもだめでした！ほんとの心といふものは、希望の根柢があると信じてはじめて、完全な、周囲のことなど全く考へない戀となつて燃えるものであるといふこと、従つて何も感じずにこの根柢を與へることは常に下品な、不道徳な詐欺であること、欺かれたものが質朴な、正直な、邪氣のないものであつたらそれだけ愈々いけないことであること——といふやうなことをいくら話しても彼女にはわからないのでした。何といつても彼女は、わたしが戀を告白した事實にかへるのでした。おまけに平常は、なか／＼しつかりした判断を下すやうに見えた彼女が、馬鹿らしい、下らない、そして女らしくない議論なんかをむちやくちやにやつて、全く子供みたいな頭だといふことを暴露しました。考へてみると、この最後の口論の二三時間に交した言葉の數は、一緒に暮してきたこの二三年の間に交した言葉の數より多いのでした。そして今わたしは、彼女が、その立居振舞こそは貴族の中にも稀にみる女らしさだが、頭は——その後バリーの歌劇場で何千人となく見た全く普通の女中のやうな、才氣のある女だといふことがわかつたのです。この口論の間わ

わたしは絶えず彼女を食るやうに見てゐましたが、その不可解な、底の知れない、いかにも個性的に輝く彼女の美しさは、二人の交す言葉と競争してわたしの心を苦しめるのでした。併し終ひに彼女が、まるでわけのわからない圖々しいことをいつたとき、わたしは悲しさに涙を流しながらいひました。

「お嬢さん！あなたはわたしが今までにみたことのない大驢馬ですね」（譯者註、驢馬は馬鹿者の意。）

彼女は房々したその縮髪を激しく揺ぶつて、蒼白な顔をあげました。そしてびつくりした表情を以て、わたしの顔に見入りました。そのとき粗野な斜めな筋が、いつもはあんなに美しい口元に浮んでゐました。それは侮蔑の微笑だつたのでせうが、事實は妙にあわてたしるしになつてしまつたのです。

「さうです、わたしは拳で涙を碎きながらいひました。普通驢馬になつてゐられるは吾々男ばかりです。これは吾々の特權なんです。ですからあなたのことをかう呼んでも、それはまだ一種の尊稱で、あなたにとつてはむしろ名譽なんです。あなたがもう少し平凡で、卑しかつたら、わたしはたゞいやな鶯鳥（譯者註、愚かなる女の意）つて罵つたでせう！」

かういつてわたしは、彼女から身を背けて、そのまま彼女の方をふりかへりもしないで行つて

しまひました。が、胸には、いつか運命が自分に與へてくれたらしかつたものを今永久に残してゆくのだ、そして今は、かうした事柄に於ける信念が失くなつたといふ感じを抱いてゐました。これはお前の厄介な怒りぐせのせゐだ！——わたしは自分に向つてかういひました。——若しはじめから、今日の半分くらゐな時間でも、彼女と親しく話を交へてゐたなら、彼女がどんな心の女だかわからないこともなかつたであらう、そしてお前はこんなひどい幻滅の悲哀を感じなかつたであらう！ 美しい蜃氣樓よ、向ふにいつて碎けてしまへ！——

わたしが干々に亂れた思ひを胸に抱いて、總督に請暇を願ひ出たとき、總督は満足さうに、狡さうな顔をして、わたしを眺め、嘲けるやうな目瞬きをしました。わたしは彼が、わたしの事件をよく知つてゐたこと、大體それをはじめつから觀察して、それに意地のわるい興味を感じてゐたことに気がつきました。彼は平常は、全く正直な、尊敬すべき男でしたから、恐らくかうした彼の態度は、残酷な不良ないたづらに對して俗人の誰でもが感じる馬鹿氣な興味に違ひありません。前世紀の身分の高い人たちは、阿房や、侏儒や、その他の家來を酔はせた上で、水をぶつかけたり、ひどいめにあはせたりして、面白がつたものです。今日の教育ある人々の間には、もうかうしたことはありませんが、それとは反對に、好んでいろ／＼な、輕いませつかへしをやりたがります。かういふ俗人は、自ら強いほんとの情熱を感じるものが少ないだけに、愈々無作法な

方法で、その程度の大小はありますが、無慈悲にもしかけたかういふ鼠落しにかゝりやすいものの心の中に、かうした情熱を焚きつけてみたいといふ欲望を感じるものです。

總督の方で、自分の娘を餌に使ふことを恥と思はないのなら、そのことに就てはもう何も文句はない、とかう思つたものですから、まだ荷馬車のいゝのが出るのですが、わたしは意地を張つて、重い背囊と小銃を脊負つて、残つてゐた隊をひきつれて、早朝に出發した聯隊の後を追つて、夜にかけて出發しました。

戦闘が既に開始されて、東印度會社の軍隊が英領印度の國境で山間の蠻族と戦つてゐるとき、困難な熱い行軍をして到着したわたしは、自分が新しい世界に移されたと思ひました。わたしの聯隊の各中隊は、絶えず進出しました。ところがある日のことでした。味方がひどい包圍攻撃を受けて、わたしたちは、まるで盜賊みたいな騎士や、象や、妙な繪の描かれた鍍金した車などのごや／＼してゐる真中に這入つてしまひました。その車には立派なヒンドスタンの諸侯らしいものが、酋長たちに引つばられて、黙然と坐つてゐました。この日味方の將校はすっかり斃れてしまひました。そして中隊は三分の一に減つてしまひました。わたしはこの戦に於て立派な處置をとつて、相當功績をあげたので、中隊の一等中尉に任ぜられ、戦争がすんだ後中隊長になりました。

それからわたしは中隊長として百五十人ばかりの部下を率ゐて、二年の間、吾々の方の領土を圓形にするために占領した國境の小さな區域の守備に任じました。その間、わたしはこの蠻地で最上の勢力者でした。が、わたしはこの時程寂しさを感じたことはありません。で、誰に對しても機嫌が悪く、といつて無暗に怒つたり、間違つたことをいつたりはしませんでしたが、仕事の方ではかなり峻厳でした。わたしの主な仕事といふのは、キリスト教徒の警察を用ひるやうにすることゝ、吾々の方の宗教家が迫害を受けずに働くことができるやうに、それを保護することでした。が、わたしはその仕事以外に、良人を失くした女を焼くインドの悪習をも斷然禁止してしまひました。併し一般に、ともすればこの禁制を破つて、夫婦の愛のために生身を焼かうとするので、わたしたちはかうしたことを防ぐのに始終忙がしい思ひをしました。ところが彼らは、この土地に於て許されてゐない娯樂を警察が妨げる時と同じやうに、矢張りぐづぐづいふのでした。あるときなどはこんなことがありました。遠方の村でこの禁制を冒して頗る巧妙に、内密にやつたんです。わたしが息をきつて馬をとばして、みんなを追ひ散らした時には、もう積んだ薪が眞赤に燃えてゐました。そして火の上には年老いた、まるで乾からびたやうな親爺の死骸があつて、もう少しばかりぢり／＼いつて焼けてゐました。ところがその傍にはやつと十六ばかりの、繪のやうに綺麗な娘が横たはつてゐるんです。微笑みながら銀の鈴のやうな聲で祈りの歌を唄つてゐ

るんです。幸ひこの娘にはまだ火がついてゐませんでした。わたしが馬からとび降りて、彼女の可愛らしい足を掴まへて、積み重ねた材木の上から引きおろすだけの時がありました。彼女はしかし、呆氣にとられたやうな顔をして、どうしてもこの年寄おやぢと一緒に焼かれないといふんです。さういふ彼女をなだめて納得させるのに、わたしはどれ程口をすつぱくしたかしれやしません。無論かういふ可哀さうな寡婦たちはかうして救はれても大して得はしなかつたのです。何故かといへば、かうして救はれたあとは、總督府で、救はれた生命を安樂に繋いで行かれるやうに何とかしてやらなければ、彼らの間ではひどく賤しまれて、かまつてくれるものはないのですから。併しこの可憐な女は、わたしが支度をしてやつて、わたしたちのところでは使つてゐた洗禮を受けたインド人に嫁がせたところが、彼女もその男に忠實につくしました。

ですがこの不思議な出來事は、妙にわたしに考へさせるところがありました。わたしの胸の中には次第に、かういふ絶大の誠を盡さしてみたいといふ望みが目覺めたのです。併しわたしにはかうした氣持にならせることの出来る女がなかつたので、反對に、自分の方からかういふ眞心に對する眞心を盡さうといふまるで弱々しい憧れに陥つてしまひました。それと同時にリディアに對する熱い憧れに――。地位もあつたし、また先に出世する愉快な見込もあつたので、わたしは、若し彼女がまだ結婚してゐなかつたら、うまくいつたら或は手に入れることができるかもしれないと

思ひました。それに彼女もわたしの頭を狂はせるために随分骨も折つたし、心配もしたといふことが、わたしのかうした愚かしい考へを益々強めたのです。何かしら値打があるやうに彼女の眼に映つたにちがひない。さうでなかつたら確かにあゝまで骨を折る筈はない。かう考へるとそれが事實になつてくるのでした。そしてわたしは、假令現在彼女がどんな状態であらうとも、わたしを愛してくれさへすれば、リディアと結婚しよう、そして絶對的な彼女の美しい人柄のために、何らの制限も目的もなく、彼女に忠順であり、恭順でゐよう、彼女の無理もよくない性質も徳と看做して、それが極めて甘美い菓子パンでももあるやうに耐へよう——と、固く考へてしまつたのです。さうです。わたしはまたも空想の中に溺れてしまつて、彼女の缺點、稍愚かしいと思はれる點までが、地上のあらゆる財寶のうちで最も望ましいものになりました。またこれをいろいろに考へなほして、かうも思つてみるのでした。利口なわけのわかつた男が、可愛い女の無理や缺點を、日毎時毎に同じやうに愛すべく、喜ぶべき修業とかへ、女の愚かしい行爲に、愛と真心に負はされた想像力によつて黄金の値打を與へてゆく。すると女はそれを笑ひながら自分の矜りとする、といつた生活を——かうした活潑な想像の力を、わたしは何處から得たのか知らないが、多分矢張りあの魔女がくれた、そしてそれでわたしを二重に毒殺したあの厄介なシェークスピアから得たのでせう。わたしはたゞ、彼女自身もあれを眞面目に讀んだことがあるかどうかとわ

からないんです！

簡単にいひますとね、わたしがまだ自分の夢にすつかり酔つてゐるとき、そして同時に遠い土地の勤務が交替になつたとき、わたしは休暇をとつて大急ぎで總督の許にいつたのです。總督の生活は、以前と變つたこともなく、非常に快くわたしを迎へてくれました。お嬢さんもまだ總督の許に居られて、思つたよりも親しくわたしを迎へてくれました。再び彼女にあつて、その話すのを二言三言きくと、忽ちわたしは彼女に參つてしまつて、固く決心したあの考へを十分に強めたのです。そしてこれを實現しなければもう幸福になることができないやうに思つたのです。

ところが彼女は、まるで病氣みたいに興奮して、おほびらに大仰に商賣をやるのでした。そして何の顧慮もなく、厄介な我欲の奴隷となつてゐました。今や彼女は、かなり粗野な浮ついた將校連にとりまかれてゐました。その將校連は、極めて陳腐な方法で、彼女に阿諛おまつをつかひ、彼女の意を迎へるやうなことばかりいつてゐました。彼女も亦それを喜んできくのでした。それで、何のことはない愚にもつかない獸みたいなものなんです。結局、ごく圖々しいことが、たゞ彼女に對する心からの恭順から出てゐるやうにみえ、不幸せなこの女の自信を維持さへしたら、それで最もよく受入れられるのでした。その他に彼女はまた、可哀さうな鼓手の頭を一目で狂はせてしまつたのです。鼓手は威張りくさつて方々歩きまはり、何處へでも姿をあらはして彼女の邪魔

をしました。更にまた彼女の仕事をしてゐる靴屋の頭も變にしてみましたのです。靴屋は、彼女のところに靴をもつてくるときは、いつも玄關で鏡のついた小刷毛を隠しから取出しては、猫のやうに念入りに頭を綺麗にするのでした。それは今度こそ屹度、何事か起るに違ひないと思つたからでした。ですからこの男のやつてくるのが見えると、話しあつてゐたみんなのものが、廊下に出て、この可哀さうな奴の大騒ぎをみるのでした。特に變だつたのは、誰もこの男に對して腹をたてないことでした。だからみんなはみんなリディアからよりよいことを何も期待せず、彼女の行ひを彼女に相應しいと思つてゐました。ですから心に、彼女のことをこれ程に考へてゐるのはわたし一人でした。で、わたしは彼らを輕蔑しました。が彼女を、彼女のまゝで手に入れたこの馬鹿者たちはみんな、底の深い情熱に燃えてゐるわたしよりも利口なやうに思はれました。いや併し！——わたしは叫んだのです——彼女はわたしの考へるやうな女だ。奴らがみんな馬鹿者だから、奴らに向つてあゝ圖々しくするので、自分がどんなものか、或はまたどんなものでありうるかを知らないのだ！そこでわたしは、も一度彼女の目の前に鏡をつきつけて、彼女のよりよい姿を映してみせ、彼女を取りかこむやくざ連中をも照らして追拂つてしまはうと思ひました。併しいくら骨を折つて棄てようとしても棄てることのできない表面的の作法や態度が、この馬鹿者たちの仲間入りをして、リディアに向つてごく小さな一步を踏みだすことを、どうしても

できないやうにしました。わたしはまたしても頭が變になり、我慢ができないやうになりました。で、急に印度の隊から去つて、故郷に歸り、あの厄介な女のことを忘れようと旅立つたのでした。パリに着いて、わたしはそこに二三週間滞在しました。そこでわたしは、綺麗な利口な女を多勢みて、自分の不幸な事件から遁れるには、綺麗な女の顔を澤山見るのが一番いゝ方法だと考へました。劇場から劇場へ、或はまたかうした人の多勢集まる場所に出かけてゆきました。またいろんな面白い家や、會合にも案内されました。かうしてわたしは實際に高尚な、しつかりした多勢の女を見ました。そしてその眼に、まんざらでもないころを讀むこともありました。が、わたしの見たすべては、唯リディアのことを想ひ返させて彼女に都合のいゝやうな役に立つばかりでした。どうしても彼女のことを忘れることができなかったのです。それどころか益々はげしく彼女を愛するやうになつたのです。そしていつまでも變らなかつたのです。わたしは彼女のことを考へると、妙に薄氣味のわるい、變な氣持がしました。そして外見と、立居振舞がこのリディアにそっくりな、つまりこの女のいゝ半面を持ち、それに相應しい他の半面を持つた女性が、この世の中に確かに居るに違ひない、そしてこの完全なリディアを見つけてはじめて、わたしは落ちつくだらう、といふやうな氣がしました。さうかと思ふとまた、この美しい半分は妖女にほんとの魂を探してやる義務を、自分が負うてゐるやうな氣もしました。一口でいへば、わたしはま

た彼女に對する憧憬のために、病氣になつてしまつたのです。
併し再び彼女の許に歸つて行くこともできなかつたので、わたしは新しい太陽の灼きつくやうな熱と、危険と活動を求めて、佛領アフリカの軍隊に奉職することにしました。早速アルチェリアに向つて、まもなくアフリカの領地のごく國境近くに着きました。わたしはそこで、灼きつくやうな太陽に照らされ、燃えるやうな熱砂の中をあちらこちらと駆けずりまはつて、カビーレ族と方々で戦ひました。

ちやうどこのとき、いつも邪魔をしずみられない彼女——眠つてゐたエステルヘンが、階段から落ちた夢をみて、椅子の上で不意に頓狂な聲を出したので、話手のパンクラーツはたうとう顔をあげて、聴手が眠つてゐるのに氣づいた。と、同時に、自分が戀物語の他何も話さなかつたことにはじめて氣がついて、恥づかしく思つた。そして相手が何も聞かないでゐてくれ、ばよかつたがと希つた。彼は母と妹を起して、ベッドに就かせた。彼自身もベッドに這入つて、長いうち寛ろいだ溜息を洩らしながら寝入つた。彼は、怠けもの、何の役にもたゝない小パンクラーツだつたときと同じやうに朝寢だつたので、以前と同じやうに母親がおこさなければならなかつた。みんなが一緒に朝食の卓に向つて、珈琲を飲んでゐるとき、彼は昨夜の話をつゞけた。

「あなたがたがお眠りにならなかつたら、わたしが、ある綺麗な女のために、おこりんぼから、ごく親しみやすい深切な人間になるところだつたのが、また例の怒り癖がその女を親しく知るところを妨げて、わたしに對してひどくいたづらをし、盲目的にその女にうちこんだこと、併しそれから欺かれて、更に鍛へあげられたおこりんぼになつて、印度からアフリカにきてフランスの軍隊に投じ、ブルヌスを着た奴らのあの可笑しな塔のやうな恰好をした麥藁帽子を叩き潰して、いやつといふ程奴らの頭を殴つてやることになつて、これをまたわたしが熱心にやつたので、軍隊でもだん／＼昇進して大佐になり、今まですつと大佐の勤務をやつてゐたこと——をお聞きになれたんだけんど。

わたしはまた以前と同じやうに、無口に、陰鬱になりました。そして自分を樂しませる手段は、軍人としての自分の義務を盡すことと、獅子狩との二つしか知りませんでした。獅子狩はいつもわたし獨りでやりました。鐵砲のいゝのを一挺携へて、徒歩で出かけました。ですからうまく命中するか、自分が喰はれるか、二つに一つといふことになるんです。この大きな危険を繰り返すことゝ、いつか射ち損ふことがあるかもしれないといふことがわたしの氣質によくあつたのです。だからたつた獨りで灼きつくやうな丘陵をぶらつきまはつて、猛烈に強さうな奴を嗅ぎつけ

たとき程愉快を覚えることはありませんでした。こつちが喫ぎつけると相手もわたしを見つけて、わたしが相手を押搦ふやうに、相手も怒りながら同じやうに押搦ふのでした。ところが今から四週間ばかり前のことです。非常に大きな獅子が近邊に現はれました。こゝにあるのがそいつの毛皮ですが、こいつがベデウイーネ族の家畜をあらし廻つて、どうしても捕へることができなかつたのです。なか／＼心得た奴と見えて毎日のやうにあつちこつちとのさばり歩くのですが、わたしのやうに徒歩で狩るやりかたでは、ほんの遠くからそいつの姿を認めるだけでもなか／＼時がかゝりました。射ちはしなかつたのですが、二度か三度奴を見かけたことがありました。すると奴はもうわたしを覚えて、わたしが奴に對して何か企らんでゐるとみてしまいました。ですからわたしをみると奴は恐ろしく咆えだして、姿を消してしまひます。が、また他のところで出會ふといふふうで、わたしたちは三四日の間、わたしは墓場のやうにひつそりと、奴は時々荒々しく咆えたてゝ、さながら掴み合はうとする二匹の牡猫のやうに互ひにぐる／＼追ひまはりました。

ある日のこと、わたしはまだ太陽の昇らないうちに出かけて、今まで行つたことのない方角に向ひました。例の獅子が前の日の反對の方角をうろつきまはつて、何も獲物がなかつたものから。その土地の人たちは家畜をつれて逃げてしまつてゐたので、わたしは、腹の空いた先生、恐らく昨夜はこの道を辿つたに違ひないと見當をつけたのですが、果してさうでした。太陽がさ

し昇つて、黄金色に色づいた臺地の廣野を、わたしはいゝ氣持になつてぶら／＼歩いてゐました。その臺地の更に一段高まつたところが長い空色の影を黄金色の地上にひいてゐました。空はリディアの眼のやうに濃い碧色でした。リディアの眼はふと空から思ひだしたのだつたが。遙か彼方にはわたしの住んでゐたあのアラビヤの町のある碧い山々が蜿々と連なつて、眺めの片方の端には二三の森や緑の廣野があつて、そこには煙が、いやベデウイーネ族の天幕までが黒い點のやうに見えました。一帯に死のやうな静けさで、生きたものゝ姿などは何一つも見出せませんでした。と、ある溪の縁にぶつかりました。その溪は岩石の多いこの邊をすつと貫いてゐて、すぐ近くに來るまでは見えないのでした。冷たい、氷の綺麗な小川がその底を流れて、ちやうどわたしの立つてゐたところは、下の方に花の咲き揃つた夾竹桃が茂つてゐました。この灌木の滴るやうな翠、その様々な薔薇色の花、溪の底を流れる美しい流れ——それはまたとない美しいものでした。それを眺めてゐるとわたしの胸には、忘れてゐた憧憬の心が浮み上つて、何故自分が此の邊をぶらついてゐるのか、それさへも忘れてしまひました。わたしは夾竹桃の中を降りて行つて、小川の水が飲みたいと思ひました。で、うつかり銃を地上に置き、大急ぎで溪に下りて行きました。それから地べたに腹這つて、小川の水を飲み、顔を濡らし、美しいリディアのことを考へました。彼女は何處にゐるだらう、今頃は何處を歩きまはつてゐるだらう、大體どんな暮しをしてゐるだ

らう——といふやうなことを考へました。と、すぐ近くで獅子が短かい叫び聲をあげるのが聞えて、大地がぶる／＼と顫へました。ものに憑かれでもしたやうにわたしは跳び上つて、一散に斜面をのぼつて行きました。が、上で、この大きな獣がわたしから十歩と離れないところで、ちやうどわたしの銃の傍にきてゐるのを見て、わたしは釘付けにされたやうに立止つてしまひました。そしてそのまゝいつまでも、ぢつとこの猛獣を見つめてゐました。何故なら、猛獣はわたしを見ると、跳びかゝらうと蹲くまつたので——しかもわたしの銃は獅子の腹の下に斜めになつてゐました——わたしがちよつとでも動かうものなら、跳びかゝつて、屹度わたしをすた／＼に引き裂いてしまふに違ひありませんから。で、わたしは瞬もせず獅子を見つめ、獅子もわたしから眼をそらさず、凡そ二三時間の長い間立つてゐました。獅子は氣持よささうに腹這つて、ぢつとわたしを見つめてゐました。太陽はもうかなり高く昇つてゐました。併し恐ろしい暑さに苦しめられだした時分は、時の經つのが遅く感じられて、まるで地獄のやうでした。ほんとにこのときは、いろんなことを考へましたね。わたしはリディアを呪ひました。この女を思ひだしたばかりに武器を忘れて、またもこの災難にあつたんですからね。何もかも片づけてしまはう、この猛獣に素手で跳びかゝつてゆかう——と、幾度思つたか知れませんが。併しいつも生に對する執着の方が勝つてしまつて、わたしは石にされたロートの妻か、日時計の針のやうにつゝたつてゐました。

實際わたしの影が時の移るにつれてわたしのまはりをめぐる、すつかり短かくなつて、また伸びはじめました。この時ほど腹のたつたことは今までなかつたです。若しこの危険を遁れたら、近づきやすい人間にならう、やさしくならう、家に歸つて、自分のためにも他人のためにもできるだけ楽しくしよう——かうわたしは誓ひました。汗が流れる。一つところに動かすにぢつとしてゐようと固くなつて骨を折るので、手足がかすかに顫へる。わたしがちよつと乾いた唇を動かしてもすると、獅子は半ば起きあがつて、尻を振り、目をぎら／＼光らして吼えるので、わたしは急いでまた口を閉いで、齒をぎつと噛みあはせました。併しかうしてながい／＼一分間を順々として、過ぎさなければならなかつた間に、胸の怒りや忌々しさが、獅子に對するのまで消えてしまひました。そして弱くなればなるに従つて、自身には愉快だと思はれる程耐へるのが上手になつて、あらゆる苦しみも勇ましく我慢しました。時はかなり進んでゐましたが、わたしが思つた程でもなかつたに違ひありません。その時不意に思ひがけない救ひの手が現はれました。獸とわたしとお互ひに夢中になつてゐたので、二人の兵士が獅子の後ろからやつてきて、ほんの三十歩ばかりの近くに来るまで、どちらも氣がつかなかつたのでした。仕事に滞つたのでわたしを探しにやられた斥候でした。傳令の銃を肩にかけてゐましたが、わたしが天の恵みの太陽とも思はれるやうに眼の前でそれが輝くのを見たとき、わたしの相手もあたりの静けさの中に彼らの聲音をき

つけたのでした。二人の兵士はもう遠くから何か眼についたので、できるだけそつと近づいたのでした。この時不意に彼らは叫びました。

「猛獣だ！ 大佐を助けろ！」

獅子は後ろを振りかへつて、跳び起き、悪魔のやうに怒り猛つて大きな口を開け、誰から先きに跳びかゝつたものかと暫らく決し兼ねておました。併しその二人の兵士が元氣なフランス人らしく躊躇なく跳びかゝつたとき、獅子は猛然と彼らに躍りかゝりました。と、その瞬間に一人は獅子の足の下になつてしまひました。若し他の一人が、同時に射ちながら銃で獅子の横腹を刺さなかつたら、恐らくお終ひだつたでせう。併しこの男も、わたしがやつとのことで自分の銃に跳びかゝり、格闘の場所によろめきながら駆けつけて、無我夢中で獅子の耳に二發射ちこまなかつたら、結局はだめだつたでせう。獅子は一旦四足をつゝ張りましたが、また跳び起きました。そこでも一度つゝ張らせるには、他の銃でもう一發射たなければなりません。たうとう三人がかりで殴つて、銃床尾を滅茶々にしてしまひましたが、それ程獅子の生命は頑強でした。不思議に誰も怪我をしませんでした。獅子の下になつてゐた兵士さへ、上着がすたゝに破れて、肩を二三ヶ所ひどく引搔かゝれた他には怪我もありませんでした。まあかういふふうにして今度は幸運で、おまけに長い間探してゐた獅子を射ちとめてしまつたのでした。少しばかりの葡萄酒

とパンでわたしの元氣はすつかり恢復して、わたしはこの正直な兵士とまるで馬鹿になつたやうに笑ひ續けました。兵士はいつも怒りつぽいこの大佐のやさしく、話し好きになつたのを不思議がり、且又大變に喜びました。

併しわたしは同じ週のうちに、自分の誓ひを守つて、辭表を呈出し、かういふふうに戻つてきたのです。

パンクラッツの生涯と、そのおこりんぼの癖を改めた物語は以上の通りだつた。家の人たちは彼の考へや、したことを大變不思議がつた。彼は家族と一緒にゼルドヴェーラを去つて、州の首都に移り、そこで彼の経験や知識を以て國の有要な人物になり、永久にその地位に安住してゐられる機会を捉へた。その手腕と、堅實で沈着なことゝ、深切なことのために人々の人氣を得、尊敬された。そして決してもとの性質に戻るやうなことはなかつたのであつた。

エステルヘンと母親とは、リディアの話聞き落したのを残念がつて、絶えずも一度繰り返してくれと頼んだ。併しパンクラッツはいつた。——あるときお眠りにさへならなかつたらお聞きになつただらうに。あの話はたつた一度したので、もう二度とすまい、わたしの戀の経緯を誰かに話すのは、あれがはじめてと最後です。話の筋は簡單で、わたしが外國である女と猛獣とのお

蔭で怒りやすい悪い癖がなほつたといふだけのことですよ。
そこで母娘はせめて、外國風なために忘れてしまつたその女の名だけでも知りたいたいと思つて機會ある毎に「何ていふ名だつたのよ？」といつて訊ねた。併しパンクラーツもいつも「氣をつけておればよかつたのに！ この名も二度とはいひませんよ！」と答へるのだつた。彼はこの約束を守つた。誰も彼が再びこの名を口にするのを聞かなかつた。そしていつか自分も忘れてしまつたやうに思はれた。

——をはり——

村のロメオとユリア

207
12
125

43
30
49
41

この物語をお話しするのは、古い偉大な文藝作品の基礎になつてゐる話といふものが皆それぞれに如何に深くこの人生に根ざしてゐるものであるかといふことを實證せんがためなのである。従つて若しこの物語が實話でなかつたなら一顧の値だにない模倣にすぎないであらう。かうした話はさうやたらにあるものではないが併しその姿を現すや、常に新らしい衣服を纏ひ、無理にもその姿をしかと捕へさせるのである。

ゼルドヴェーラから凡そ半里、その邊を流れてゐる或る美しい河の畔に、廣く擴がつた大地の波が一脈むつともり上り、その波自身も立派な耕地をなして豊饒な平野に流れ込んでゐる。その麓から稍はなれて、大きな農家の幾軒もある村落が一つある。ずつと以前このなだらかな傾斜地を越えて、美事な細長い畑が三つ大きなボンのやうにならんで、遙か彼方まで長々と延びてゐた。陽照りのいゝ九月のある朝のことである。この畑地に百姓が、といつても別々に、しかも兩端の畑であるが、それ／＼農作に従つてゐた。眞中にはもう長い間荒れ放題にうちやらかしてあるのであらう。一面に、石や高く伸びた雑草に蔽はれて、その上をいろんな昆虫類が我物顔に

ぶん／＼飛びまはつてゐる。その兩側の畑で鋤の後からせつせとついでゆく二人の百姓は、どちらも背の高い頑丈な四十恰好の男で、一目見ただけでもなか／＼わきまへた、着實な百姓だと點頭かれた。二人とも丈夫な撚絲織の、短い半ズボンを穿いてゐるが、これにはまた同じやうにもうとてもとれないやうな皺が、まるで石にでも刻み込んだやうについてゐる。何か邪魔ものに行き當つて鋤を執る腕に、ぐいと力をいれると、その度にこは／＼した襦衣の袖が小刻みに震へたが、併し綺麗に剃刀をあてた顔は落ちつき拂つて少しの油断もない。だが心持ち眩しさうに陽光のあつた前方を見渡したり、畝の廣さを測つたり、また時たま遠方からの騒がしい音が野の靜けさを破ることもあると、何とはなしにあたりを見廻したりした。彼らはゆる／＼と一種の自然的な巧妙さで一步々進んで行つた。そしてどちらも、傍で四頭の立派な馬を追つてゐる下僕に指圖でもする時の他は一語も口をきかなかつた。こんな風に少し遠目にみると彼らは何から何までそつくりだつた。といふのも彼らが此の地方の昔ながらの百姓の恰好をしてゐるからで、一目見て辛うじて區別の出来る點と云へば、その白い尖頭帽の先を一人は前に、一人は後ろに垂らしてゐる、それ位のことだつた。併しこれとても、彼らはお互に反對の方角に向つて耕してゐたから、かはる／＼になるのだつた。といふのは丘の頂で出會つて行き違ひになる時、涼しい東風に向つてゆく方の帽子は後ろに跳ね返り、追風を受けた方のは前に逆立つたからである。で、その都度、

ひらくする尖頭帽が宙に揺らめいて、ちやうど、天に向つてめろ／＼と燃え上る二つの白い炎の舌のやうに見える一瞬間があつた。かうしてふたりは悠々と耕して行つた。彼らが丘の頂きでゆきちがひになる、が、物もいはずにまたゆる／＼と遠ざかる、ます／＼遠く離れて行つて、果ては沈みゆくあの二つの星のやうに丘の圓みの彼方に隠れてしまふ、暫らくするとまたひよつくりと現れてくる、それはこの静かな九月の金色の野に如何にも美しい情景であつた。彼らは自分の畝に石を一つでも見つけると、無雑作に、真中の荒れた畑めがけてぶん投げた。が、そんなこともほんのたまにしかなかつた。といふのは真中の畑にはもう兩隣りの畑の石が殆んどみんな放り込まれてあつたから。

かうして日脚のおそい朝も大分経つた頃、村の方から小さな可愛らしい車が一つ近づいて來た。緩やかな丘を登り初めた時分はまだ目につかなかつたが、暫く経つとそれが綠色に塗つた乳母車で、押してくるのは男の子と、一人はまだ幼い女の子だといふことが判つた。それ／＼この二人の百姓の子供で、一緒に朝の辦當を運んできたのである。車の中には同じやうにセルヴィエツトに包んだ美味いパンと、洋盃を添へた葡萄酒の瓶と、優しい女房が稼ぎ者の亭主のために添へてよこした御菜とがあつた。その他には、子供たちが道傍で拾つて嚙りかけて妙な恰好になつた林檎や梨の包と、足が一本で顔といへば垢で汚れた裸の人形とがあつた。この人形はさも令嬢然と

パンの間に座席を占めて心地よげに車を押させてゐる。車は幾度も石にぶつかつたり、止つたりしてやつと頂上に着いて、畑の端の若い菩提樹の茂みの蔭に止つた。そこで今やうやくこの二人の車屋さんを稍細かに觀察することができたのであるが、少年の方は七つで、少女の方は五つ、そしてふたりとも元氣で丈夫さうだ、といふことの他には、これといつて別に見立つ點もなかつた。たゞふたりとも眼が非常に可愛いかつた。殊に少女の方はその鶯色がかつた顔色とすつかり縮れた黒つばい髪の毛が一本氣で、そして實直らしい感じを見る人に與へた。此の時百姓たちも、また頂上に上つてきた、そして馬に三葉草を少々くれてやり、鋤は半分仕上つた畝につきたてたまふ、仲のいゝ隣人同志らしく、一緒にして運ばれた辦當の方へやつて來た。そしてこのとき初めて二人は挨拶を交した。朝からまだ一度も言葉を交さなかつたのである。

さて大人たちは楽しい朝飯を始めた。そして飲み喰ひがすまない間は側を離れない子供たちに如何にも満足さうな暖い心をもつて食べ物分けてやりながら、彼方此方を見やつた。山の間、あの小さい町がぼうと煙りながら白く光つてゐた。それはゼルドヴニラの人々が支度する毎日の晝餉の馳走が遠く輝きわたる銀色の雲を屋根から屋根の上に靡かせるからで、その雲は笑ひさざめきながら山際を傳ひ、漂々として消えていつた。

マンツ——百姓の一人——がいつた。と、マルチ——も一人の百姓——が答へた。

「昨日この畑のことで俺んここにやつて来たものがあるぜ」

「郡會からだらう？ 俺んここにもやつて来たよ！」

「さうか？ ぢややつぱり、この土地を使つて、借地料を拂へつてんだらう？」

「あゝ、畑が誰の所有だか、それをどう始末をつけたいかきまるまでつてな。しかし俺は御免を蒙つたよ、こんな荒れた畑なんか他人のために手を入れることなんか誰がするものか。そしてな、お前様たちでこの畑を賣拂つて、持主が見つかるまでその金をしまつておきなさるがいゝつていつてやつた。ふん、持主なんか見つかるまいがな。裁判沙汰にでもして見ろ、たゞの公事でさへなか／＼らちのあかねえゼルドヴェーラの裁判所ぢやねえか、おまけにこいつはちつとやそつとぢや判決はつきつこはねえや。奴らはその間に借地料で美しい汁を汲はうといふんだらうが、そりや賣拂つた金でも出来るこつた。だがね、俺たちはあんまり高くせりあげねえやうにしようぜ。さうすりや俺たちの有つてゐるのが何だか、この畑が誰のものだかわかつて来ようといふものさ。」

「全くだ。俺もさう考へてる。郡會の奴にもさういつてやつたよ！」

彼らは暫らく黙つてゐた、やがてマンツがまた口を切つた。

「だが考へてみると、こんないゝ地面をかう遊ばしておかなきやならねえなんて惜しいもんだなあ。第一見場がわるいや。これでかれ二十年にもなるが、誰も何ともいひ出さねえし、村ぢやこの畑を欲しがるものもねえし、それにまたあの落ちぶれた喇叭吹きの子供たちが何處にいづたか誰も知らねえしな。」

「ふん！」マルチがいつた。「だがそいつが問題だと思ふんだがね！ あの無宿連中と一緒にゐたり、村で舞踏の時に弾いたりするヴァイオリン弾きの黒公を見ると、俺はいつも、喇叭吹きの孫にちがひねえと思ふんだがね。無論奴は、自分が地所持だなんてことは知るめえが、知つたところで奴にこの畑がどうなるもんか。一月飲んだくれて、あとはもとの奎阿彌さ！ それにはつきりわかりもしねえのに、誰が奴にさしがねなんかするもんか！」

「だがさうな。たら事だね！」マンツが答へた。「奴から村の公民権をふんだくるにもなか／＼面倒だぜ。町ぢや奴のことですいよつちう俺たちを苦しめる氣なんだから。兩親が無宿者の仲間に這入つたんだから、奴もその仲間ゐて、旅稼ぎの連中と一緒にヴァイオリンをぎい／＼やつてればいゝんだ。奴がああ喇叭吹きの孫だつてえことが、どうして俺たちにわからう？ 尤も俺は奴の黒い顔がああ爺にそつくりだと思ふけれど。だから俺はいふんだよ、人間てえものは思ひぢ

がひばかりやるもんだ、罪を冒した人間の面を十竝べるよりも、紙の切れつばしか洗禮證一枚の方が俺の良心にとつちやよつぽど有難いつてな。」

「さうだとも！」マルチは云つた。「奴は洗禮を受けなかつたのは自分の科ぢやねえつて云つてゐるが、それぢやお前、洗禮盤をもち歩けるやうにして、森ぢゆうもちまはれつていふのかい？ そんなことができるもんか。洗禮盤は教會の中に据ゑつけになつてゐるんだ。その代り戸外の壁に懸つてゐる棺桶臺が擔げるやうになつてらあ。それに村ぢやもう人間が多すぎて、もうぢき學校の先生も二人要るやうになるだらうからね。」

これで百姓たちの食事と對話がすんだ。彼らは今日の午前の仕事の残りを片づけてしまふために立上つた。

子供たちの方では、父親たちと一緒に家に歸る計畫がちやんと成立つてゐたので、車を菩提樹の若木の蔭に曳いて行つて、それからあの荒れた畑へ遠征に出かけた。その畑が雑草や灌木や石の山で注目すべき、無人の蕃地を作つてゐたから。二人はこの青々とした荒地の眞中を、暫らく手に手をとらあつて歩き廻つた。そして續いだ手を、高く伸びた薊の上を越えさしては嬉しがつてゐた。が、たうとう薊の蔭に竝んで腰をおろした。少女は早速、細長い雑草の葉で人形に着物を着せはじめた、やがて人形は縁にぎざ／＼のある、綺麗な緑色の服を拵へて貰つた。たつた一

輪そこに咲き残つてゐた赤い罌粟の花が帽子に調へられて、草でしかとく／＼りつけられた。出来上つたこの小さな人は魔法使ひの女のやうに見えた。殊に小さな赤い莓の實で頸飾と帯を拵へて貰つてからは一層そんな風に見えた。それから人形は薊の上の方の枝に乗せられて、暫らくの間視線を合せてちつと眺められてゐた。と、ぢきに見飽きた男の子が、ぼんと一つ小石を抛げると人形はぱたりと地に落ちて、綺麗なおめかしが滅茶々々になつてしまつた。すると少女はまたおめかしをしなければさうと思つて、急いで人形に着物を脱がせた。ところが人形が裸にされて赤い帽子だけになつた時、亂暴な男の子はその女友達の手からこの玩具を奪ひとつて、高く空中にはふりあげた。少女は、べ、そをかきながら後を追つかけた。少年はすばやくそれも受取つて、またはぶりあげた。少女はやつきになつて取り戻さうとしたが駄目だつた。少年は面白がつて幾度も幾度も繰り返して暫らくの間少女をからかつた。併しこの飛ぶ人形は彼の手にかゝつて怪我をさせられた。しかもそれはたつた一つしかない大切な足の膝で、そこに小さな孔が開いて、靱殻がぼろぼろこぼれはじめた。拷問者はこの孔に氣がつくと、急に靜かになつて、口をあけたまゝ、一心に爪で孔を大きくして、靱殻の出所を詮索しだした。この靜かな様子が、可哀さうな少女には大いに不審に思はれたので、駈け出して行つてみると、このわるいたづらなんで、少女はびつくりしてしまつた。

「みてごらん！」
と、叫んで、彼は少女の鼻先でその足をぶら／＼振り廻した。靱殻が飛び出して少女の顔にふりかゝつた。少女は手を伸ばして、泣いたり頼んだりした。が、彼はきかないでまた逃げてしまつた。そしてたうとう人形の足がまるで空になつて、その見るも無残な脱殻がぶらん／＼になるまでどうしても止めなかつた。散々虐待された揚句に抛り出された玩具の上に、少女はさめ／＼と泣きながら身をなげかけ、さもいた／＼しさうにそれを前掛で庇つた。それでも少年は憎らしい程酒々と澄しこんでゐた。やがて少女は再び人形をとりあげて、この不幸な運命を擔されたものを悲しげにちつと見つめてゐたが、その足が目につくとまたもさめ／＼と泣きだした。何故ならその足はまるで山椒魚の尻尾のやうに胴體からぶらさがつてゐたので。その泣く姿がさも悲しげに見えたので、悪戯者も少々心細くなつて、心配と後悔とに悶えながら、泣き悲しんでゐる少女の前にしよんぼり佇んだ。少女はこれを見ると、ふと泣き止めて、人形で二つ三つ彼をぶつた。彼が痛さうな振りを見せて、さも本當らしく「あつ！」と叫ぶと、少女はそれですつかり満足して、今度は彼と一緒になつて人形の破壊と解剖とをつゞけた。

二人はこの殉難者の胴に次から次へと穴をあけて、たうとう靱殻を出して、それを丁寧に平らな石の上に集めて小山を作り、それを掻きまはしては念入りに観察を試みた。まだ健全な唯一の

部分は頭だつたが、それは今何より先づ子供たちの好奇心を唆らすにはゐなかつた。二人はそれを脱殻になつた死骸からそつとひきはなして、空な内部を覗き込んで呆れてしまつた。だが二人がこの怪しげながら、どうと靱殻を見たとき、先づすうつと胸に浮んだのはこの頭の中に靱殻を埋めよう、といふ思ひつきだつた。早速に二人の小さな指が先を競つて埋めこみにかゝつた。そこでこの頭には生れて初めてものがつまつたのであるが、少年はそれでもまだ「死せる知識」と思つたものか、彼は突然大きな青蠅を一匹つかまへて、ぶん／＼唸るのを兩の掌を膨らましたその中に入れたまゝ、少女に頭から靱殻を出すやうにいひつけて、その代りに蠅をその中に押しこめて、孔を草で塞いでしまつた。それから二人はその頭をそつと耳に寄せてみた後で、恭々しく石の上に安置した。あの赤い罌粟の花冠がまだ載つかつてゐたので、このぶん／＼唸る頭は今度は豫言者の生首のやうに見えた。子供たちは互に抱き合つたまゝ、息をひそめてその豫言とお伽噺とに耳を傾けた。併し豫言者といふものは本来「恐怖と忘恩」の情を喚び起すものである。だからこのみすばらしい恰好をしたものゝ中に宿るはかない生命もまた、子供たちの胸に人間らしい残虐性を喚び起した。で、子供たちはこの首を埋めてしまふことにした。そこで彼らは墓穴を掘つて、囚はれの身の蠅にその意見をきくこともせず、頭を埋葬し、墓の上に畑の石で立派な石碑を建てた。ところで、かりにも形を備へた生物を埋葬したので彼らは何となく恐怖を感じるの

だつた。で、この薄気味の悪い場所から氣のすむ所まで遠のいた。

草臥れた少女は、緑草ですつかり蔽はれた場所ところに仰向けになつて、單調な節廻しで短い同じ文句を繰り返し／＼唱ひはじめた。少年はその側にしやがんで自分もすつかりねころんだものかどうかわからないで調子を合せてゐた。實はへと／＼に疲れて懶かつたのであつた。太陽がこの唄つてる少女の開いた口の中に射し込んで、その眩しいほど白い齒を照らし、ふつくらした眞紅な唇は透き通つてみえた。少年はふとその齒に眼をつけた。そして彼は少女の頭を手で支へて、その齒を物珍らしさうに調べながら叫んだ。

「幾つあるかあて、御覽、齒が！」

少女はほんたうに數へるやうに、ちよつと考へ込んで、それから出鱈目にいつた。

「百よ！」

「うゝん、三十二だよ！」少年は叫んだ。「待つといで、僕が勘定してみるから！」

彼は少女の齒を數へだした、ところがどうしても三十二にならないので、幾度も幾度も勘定をしまほした。少女は長いことちつとしてゐたが、この熱心な計算係がいつまでたつても數へ終らないので、起ち上つて叫んだ。

「今度はあたしがあなたの勘定してあげるわ！」

そこで、少年が草の中に横になつた。少女はその上に蔽ひかぶさつて、彼の頭を抱いた。少年が口を開けた。少女は數へだした。

「一つ、二つ、七つ、五つ、二つ、一つ」

この小さな別嬪さんはまだ數の勘定が出来なかつたのである。

少年はそのまぢがひをなほして、數の算方かたを教へてやつた。少女は幾度も幾度も初めからやりなほした。そしてこの遊びは、今日したいろんなことの中で一番氣にいつたものらしかつた。が、しまひには少女は小さい算術の先生の上にしつかりしなだれかゝつてしまつて、いつしか二人とも明るい眞晝まひるの太陽の下でぐつすり寝込んでしまつた。

そのうちに父親たちは各々畑を耕し終へて、土の香りの生々した、褐色の平地にかへつてしまつた。その時、一人の方の下僕が最後の畝を終へたので、仕事を止めようとする、その主人が大聲に叫んだ。

「何故やめるんだ？ もう一度戻るんだ！」

「もう了しまひやした！」

「だまれ！ 俺のいふ通りにするんだ！」主人がいつた。

彼等は引返した。そして眞中の主のない畑にぐつと一畝鋤を入れると、雑草や石が跳んだ。し

かし百姓はそれを取除かうとはしなかつた。そんな仕事は、あとからゆつくりできると思つたのであらう、今日のところは極くさつとで満足した。かうして彼らは緩やかな弧線を描きながら急いで丘を上つて行つた。頂きに着いて、爽やかな風がまたこの男の尖頭帽の先きを後ろへ跳ね返した時、向側の畑でもちやうど隣の百姓が帽子を前に傾けたまゝ、耕して行くところだつた。そして同じやうに真中の畑から大きな一畝を鋤きとつた。土の塊ばかりが片側へ跳ね飛んだ。彼らはどつちも相手のすることを見たに違ひない、が、どちらも見ぬ振をして、行き違つて来た姿を消した。いづれの星も黙々として互ひに行き交ひ、この圓い世界の彼方に沈んでゆくのであつた。かうして運命の梭はかたみに行き交ひ、「何を織るか、それは織手は知らない。」のである。

收穫は歳々にやつてきた。その度毎に二人の子供たちは大きく美しくなつて行つた。と、同時に幅の廣くなつた隣の畑の間で、あの主のない畑はだん／＼瘦せ細つて行つた。耕作の度毎にこちら側とあちら側とで一畝づゝ削りとられた。その事に就いて別に話し會つたこともなし、また誰一人この悪行を見ないかのやうだつた。石はどん／＼積み重ねられて、今はもう畑の全長に互つて立派な山脈を形造つた。そしてその上の草や木は高く伸びて、子供たちはもう大分大きくな

つてゐたけれど、兩側を歩いて互に相手を見ることが出来なかつた。

二人の子供は今も以前やうに一緒に畑には行かなかつた。十歳になつたザロモン——一人からはザーリと呼ばれてゐた——はもう青年や大人の仲間入りをしたと思つてゐたし、一方、鳶色のヴレンヒエンは、随分氣かぬ氣の少女だつたが、それでも他の人たちからお轉婆娘などと悪口されないためには、女性の保護色をつけて歩かねばならなかつた。それでも彼らは收穫のあつた度に、みんなが畑に出てゐるすきをねらつて二人をひきはなしてゐる／＼した石の山脈にのぼつて、その上から互ひに落しつこをする機會を捕へた。平常は互に交つてはゐなかつたが、この毎年の儀式は、父親たちの畑が此處より他に隣り合つたところを持たなかつただけに、愈々大事に保存されてゐるらしかつた。

そのうちにたうとうあの畑が賣られて、その代金は暫時お上で保管することになつた。競賣は現場で行はれた。が、百姓のマンツとマルチの他には、ほんの二三の見物人が集まつただけだつた。誰一人、この變な畑を競り落して、兩隣りの間に挟まれて耕してみる氣はなかつたから。といふのは、彼らは村でも最も優良な百姓の中に數へられてゐて、今度彼らがやつたことだつてかろした事情の下では恐らく他の人々の三分の二は矢張り同じやうにやつたであらうと思はれることだつたが、しかし今はみんな妙に黙つてみてゐた。そして誰一人としてこの削りとられた「孤

兒の畑」と一緒に彼らの間に挟まれてゐるよとは思はなかつた。元來大抵の人間は、空中にふらふらしてゐる不正に自分の鼻がぶつかると、それをやつてしまふだけの腕なり準備なりは持ち合せてゐるものだが誰かに先鞭をつけられると、彼らは自分がそれをやつた常人でないこと、自分が誘惑に遭はなかつたことを喜ぶ。そしてこの撰ばれたものを自分たちの性質の悪を測る尺度とし、神々の定めた禍よけの針としてそれとなしに敬遠主義をとる。そのくせこの撰ばれた者がその罪惡を冒して得た利益に對してはひそかに涎を流してゐるのである。

かうした理由でこの畑に眞面目に値をつけたものはマンチだけだつた。かなり執拗く競りあつた末、たうとうマンツが競りおとして、畑は彼の所有となつた。役人と見物人は畑から去つた。後に残つて自分の畑で仕事を續けた二人は、歸りがけにまた出會つた。マルチがいつた。

「お前さんはもとの新しいのと一緒にして、同じ大きさの二つにわけらうな？　俺が、もしあれを手に入れたら屹度さうするがね。」

「あゝ、俺もさうするよ。」マンツが答へた。「一枚の畑にしちや、俺にやちと大きすぎるからな。ところで俺はいつときたいことがあるんだがね。別のことでもないが、お前さんがこの間、今度俺のものになつたこの畑の下のところには、すに鋤を入れて、大きな三角に削りつつたのを俺はちやんとみたんだがね。お前さんは屹度、あの土地をすつかり自分のものにすりや、結局自分のも

のだといふ考へであんなことをしたんだらうが、今度俺のものになつたんだから、俺にやあんな曲つた地境まがひなんか欲しくもなけりや、辛抱もならねえんだ。そこはお前さんにもよくわかるだらうなあ。だから俺があつた境を眞直になほしてもお前さんに文句はあるまいね！　紛争なんかにならざる筈もないが！」

マルチは、マンツが話しかけたと同じやうに冷やかに返答した。

「俺だつて紛争なんか起らうたあ思はないね！　俺はお前さんがあの畑を現在いまのまままゝで買つたものと思つてるからな。一時間前にみんな一緒ですつかり見廻つたぢやないか、あの時と今と髪かみの毛一本程も變つてやしないぜ、馬鹿々々しい」マンツがいつた。「前のこたあかれこれいひたくはねえが、あんまり無茶なこたあ黙つてゐられねえからな。物事にやきちんとした眞直なところがなくちやならねえ。もと／＼この三つの畑は、墨細すみこでしるしをつけたやうに眞直に並んでゐたんだから、今更お前さんが變にからんだことをいひ出すなんて、それは全くお前さんの氣紛れな悪ふざけといふもんだよ。あの曲つたところをその儘にしといたら、俺たちはきつと碌でもねえ綽名なづなを買ふだらうよ。あれはどうしたつて除けなくちや！」

マルチは笑つていつた。

「お前さんは急に他人ひとの口が氣になり出したんだね。他人の口なんかどうだつていゝぢやねえ

か。俺にはあの曲つてゐるのは何でもねえよ。お前さんの氣持がわるいなら、まあいゝや、眞直にしよう。だがそれは俺の方の側でぢやないぜ。なんなら俺は證文にしてやつてもいゝぜ！」

「そんな常談はやめて貰はう。」マンツがいつた。「とにかく眞直にするんだ。それもお前さんの方の側でな。屹度だぜ！」

「そいつあ全くお目にかゝりたいもんだ！」

マルチがいつた。そして兩人はもう顔を見合はせずに別れた。それどころか彼らは、全精神をこめて觀察しなければならぬ不可思議な珍奇なものを眼前まのあたりにに見るかのやうに、各々ちがつた方角の虚空をちつと見つめながら。

マンツはもうその翌日に家に使つてゐる子供と日傭娘の息子のザーリを畑にやつて、後から石をなるべく容易く取除けることのできるやうに、雑草や木を引きぬいて堆ませた。彼が仕事なんかさせられたことのない十一足らずの少年を、女房のとめるのもきかずに一緒に野良にやつたそのことは、彼自身の一の變化であつた。彼はそれを眞面目な改まつた言葉で命じたので、なんだか肉身のものに對するこの苛酷な労働で今まで自分の犯してきたあの不正——それは今その結果を徐々に發展させつゝあつた——を、紛らさうとでもするやうだつた。だが畑にやられた子供たちは面白がつて雑草を刈りたふし、長年生ひ茂つてゐるいろんな種類の珍らしい草や

木を大喜びで伐りたふした。それは何の規則も注意も要らない、變つた、いはゞ雑な仕事だつたので、彼らにとつては寧ろ面白い遊びだつたのである。彼等は日光に乾かした草や木を積みあげて、きやつ／＼いつてはしやぎ廻りながら燃やした。と、濃い烟が一面に擴がつた。子供たちはまるで憑きものでもしたやうにその中をとび廻つた。これはこの「禍の畑」での最後のお祭りだつた。マルチの娘の幼いヴレンヒエンもそつとぬけだしてきて、まめ／＼しく手傳つた。この出來事の變つてくることゝ、嬉しい興奮とは、この可愛い幼な友だちにもう一度近づきたい機会を與へた。だから、子供たちはこの焚火の側でほんたうに仕合せで、また元氣だつた。すると他の子供たちも集まつてきて、すぐに楽しい仲間が出來てしまつた。併し二人がちよつとでも離れることがあるとザーリはすぐに又ヴレンヒエンの側に行かうと手を盡した。同じやうにヴレンヒエンも嬉しさうに微笑みながら常にザーリの方へ、すりよつていつた。かうして二人の子供には、この楽しい日は永久に暮れることのない、また暮れることのできない日のやうに思はれた。ところが夕暮になつて、年とつたマンツが様子を見にやつてきた。そして、仕事はすんでゐたのに、遊んでるのを叱りつけて、みんなを追拂つてしまつた。ちやうどこの時マルチも自分の畑にやつてきた。そして自分の娘を見つけると、鋭く命令するやうに指を口にあて、口笛を吹いた。娘がびつくりして走つてくると、いきなり二つ三つ耳打を喰はした。二人の子供はすつかりしよげして

まつて、泣きながら家に歸つて行つた。ザーリもヴレンヒエンも、今、何故かう悲しいのか、先刻は何故あんなに楽しかつたのか、さつぱり理由がわからなかつた。といふのは父親たちが何故こんな不機嫌なのか、それはかなり珍らしいことだつたので、無邪氣な子供たちにはそのわけがわからなかつたし、またそのために彼等の心を深く動かされもしなかつたから。

それから二三日、マンツは家の者を使つて石浚へをさせた。それは最早大人でなければできないなか／＼骨の折れる仕事だつたが、いつまでやつてもきりがないやうだつた。まるで世界ちゆうの石が残らずこゝに集まつてゐるやうに思はれた。併し彼はその石を畑から全然取り除けさせないで、マルチが綺麗に耕しておいたあの問題の三角地にみんな棄てさせた。彼は豫め境として真直な線をひいておいた。そして今、ふたりがもう何時からかわからない程前から投げすてゐた石をすつかりこの一廓に積みあげたので、大きなピラミッドが出来上つた。そして彼は、恐らくマルチがこれを他所に移すことを諦めてしまふだらう、と考へた。ところでマルチはよもやこんなことをされようとは夢にも思つてゐなかつた。彼は相手が今まで通り鋤をもつて仕事に出かけるだらうと豫期してゐた。だから相手が耕作者として出かけるところを見るまで待つ積りだつた。ところがもういゝかげんすんでしまつた時分になつて、マンツが其處に築き上げた大變な記念物のことを耳にしたのだつた。彼は眞赤に怒つて駈けだして行つた。そしてこの結構な贈物を

見届けるや、すぐに家に駈け戻つて、村の役人を呼びにやりこの石堆みに對して抗議を申込み、土地を差押處分にしようとした。この日以来この二人の百姓の間に訴訟が起つて、双方とも零落してしまふまでその争ひを止めなかつた。

以前あれ程利口だつたふたりの考へが今は刻菓のやうに寸断されてしまつた。彼らはどつちも、相手が何故かう公然と不法に、勝手にこのつまらない問題の畑の端を奪ひとることができるとか、それを理解することが出来なかつた、いや理解しようとしもないのだつた。そして唯々權利を傷けられたといふ氣持に充たされてゐたのであつた。マンツにはその他に均齊と並行線とに對する妙な觀念が加はつて、馬鹿々々しいにも程がある勝手な曲線をそのまゝにしておくことをどこまでも頑強に固持するマルチの狂ひじみた利己心によつて、實際に傷つけられたやうに感じた。併し二人共、かうしたことは哀れな意氣地なしに對してのみでできることで、聰明な、そしてしつかりした男に對してはできることでない、だからきつと彼奴は俺のことを圖々しく罵り見縊つて輕蔑すべき馬鹿者だと思つてゐるにちがひない、と信じてゐる點で一致してゐた。そして各々妙な名譽心から自分が傷つけられたと思ひ込んで、もう前後のみさかひもなく争鬭の情熱とその結果なる零落とに身を委ねた。だからその後の彼らの生活といふものは、それはちやうど、呪はれた二人の者が小さな板子一枚に乗つて暗い河を下りながら、互に争つて虚空を斬り、敵を擲へた

と思ひこんで實は自分自身に掴みかかり、刻一刻、身を滅ぼす淵に沈んで行くやうな、夢のやうな苦惱にもひとしかつた。かうして馬鹿げた訴訟をやつてゐたので、二人は極めて、た、ちのよくな、い魔術師の手に陥つた。魔術師は二人の頽廢した想像力をあふつて、それを全く無益な内容を以て満たされた恐ろしく大きな泡に膨ました。中で特に甘い汁を吸つたのはゼルドヴユーラの山師たちで、彼らにとつてはこの事件は思ひがけない喰ひものだつた。かうしてまもなく争訟當事者は各々その背後に仲裁人や、密告者や、助言者やの群を持つやうになつたが、それ等の人はみな百方手段を廻らして現金をまきあげる術を心得てゐた。それといふのも今はもう再び蕁麻や薊の花が一面に咲き亂れてゐるあの石堆みのある土地は、二人の五十男が従來とはまるで異つた新しい習慣や、主義や、希望を採ることになつた此のとりとめのない物語と生活との最初の萌芽であり、礎であつたからである。この二人のものは金銭を餘計に失へば失ふ程、愈々金銭が欲しくなり、儲からなければ儲からないで、愈々金持にならう、相手よりも先きに金持にならうと考へた。彼らにはありとあらゆる詐欺にひつかゝつた。年中ゼルドヴユーラを群をなしてぐる／＼まはる外國の富籤を残らず買ひ込んだ。併しまだ唯の一度も「ターレル」の儲けにもおめにかゝつたことがなく、いつも他人の儲けたことや、彼らをもそつとのことと當るところだつたといふやうなことをきくばかりだつた。こんなふうで彼らのこの情熱は毎年きまつて金を失ふことゝなつ

た。時にはゼルドヴユーラの人たちが悪戯をして、二人に氣のつかないやうに同じ番號の籤をひかせて、相手を壓しつゝして、滅ぼしてしまはうと双方の希望を一つ籤につなげたりした。彼らは自分の時間の半分を町で過ごした、各々酒場に根城を構へて、のぼせ上つて、馬鹿々々しい金使ひをしたりつまらない亂癡氣騒ぎをしたりした。しかも内心は血を流すやうな思ひであつた。つまりふたりは馬鹿者と思はれたくないばかりにこんな争闘をやつてゐながら、馬鹿の骨頂をやつてゐたのである。また誰からもさう思はれてゐた。残りの半分の時間は家でぶつ／＼いひながらゐる過すか、畑の仕事を見に出かけるかした。畑に出ると唯々怒鳴りつけてやたらにせきたてゝ、自分の勝手にうちやらかしておいたところを取り返さうとあせつたので、いきほひよく働くしつかりした雇人をみんな追ひ拂つてしまつた。かうして彼らはどん／＼おちぶれて行つた。そして十年とたゝないうちに、借金の山に埋まつて、巢の入口に一本足で立つてゐて、ちよつとした微風にも吹き落されてしまふ鶴のやうになつてしまつた。併し家の工合がどうならうと、彼等の間の憎悪は日毎に大きくなつてゆくばかりだつた。それといふのも各々自分の不幸は相手のためだと思ひ、自分を零落させるためにわざ／＼悪魔がこの世に送つた不倶戴天の仇であり、理窟のわからない反對者と思つたからである。彼らは遠くから相手の姿を見ただけでも唾を吐いた。

また彼らの家の者は家の者で、ひどいめに遭はされまいと思へば、相手の家の女房や、子供や、僕婢など一語も話してはならなかつた。女房たちは今からして家がどん／＼貧乏になり、苦しくなるにあたつて各々異なつた態度をみせた。氣立のいゝマルチの女房は、この零落に堪へきれず、娘がまだ十四になるかならないうちに苦勞に身體を痛めて死んでしまつた。これにひきかへてマンツの女房はこの生活の變化にうまく應じて行つた。そして前から持合せてゐた二つ三つの女らしい缺點の手綱を弛めて、これを惡徳に育てあげる——唯これだけのことをして彼女は亭主のよくない相棒になつた。彼女のうまいものすきは野卑な貪慾となり、その饒舌癖はまるで出鱈目なおべんちやらをいふ性質になつた。この手で、彼女はしよつちゆう心とは反對のことを云ひ、何でもかでもひつかきまはして、自分の亭主にまで白を黒といひくろめた。これまでは他愛もなく何でもお饒舌したその生來のあけつばなしの性分が、今は饒りあげた無恥に變つて、これである八百をならべたてるのだつた。こんなふうで彼女は良人と困難を共にする代りに、良人を欺瞞してゐるのだつた。良人がひどいことをすれば、彼女はそれに油をかけて、何一つ自分の欲望を抑へようとはしないのみならず、反つてこの滅びゆく家を導く大輪の花として咲き誇つた。

かういふわけで甚だ面白くない状態となつて、哀れな子供たちは、どこを見ても喧嘩と心配とがあるだけだつた。自分たちの行末に對して何ら幸福な希望を持つことも出来なければ、また懷

しく嬉しがるべきこの青春を楽しむことも出来なかつた。殊に、ヴレンヒエンは、母親を失ひ、ひとり荒れはてた家で荒みきつた父親の暴虐に委ねられてゐたので、みるからにザーリより一層不幸な境遇だつた。十六になつた彼女は、もう背丈のすらつとした綺麗な娘だつた。その濃い鳶色の毛髪は常に輝かしい鳶色の目のあたりまでたれ下り、眞紅な血は鳶色がかつた顔の兩頬を透して光り、生々した唇の上では暗紅色となつて輝いた。それは稀に見る美しさで、この色の黒い子供に獨特の外見と特徴とを與へてゐた。激しい生活慾と歡喜とがこの子供のどの血管にも波うつてゐた。彼女はほんの少しでも天氣がいと、といふのはひどく苦しめられることもなく、大して心配ごともないと、といふ意味であるが、そんな時はよく笑つて、ふざけたり騒いだりする氣になつた。併し心配は随分彼女を苦しめた。彼女は父と一緒に困苦を忍び、日増にひどくなつてゆく家の貧困とに堪へなければならなかつたばかりでなく、自分自身の身のまはりも氣をつけなければならなかつた。父親はそのために僅かの金もくれはしなかつたが、彼女は女なりに幾分かちんとさつぱりした身装がしたかつたのである。だからヴレンヒエンは小さな自分の身體をほんの僅かばかり飾るにも、ごく質素な日曜着を買ふにも、また模様のついた、殆んど何の價値もない頸布を二三枚集めるにも一通りの苦勞ではなかつた。そんなふうで、この美しい氣立のいゝ少女はあらゆる方法で抑へつけられ、妨げられて、虚榮に耽るやうなことは夢にもできなかつた。

のみならず母親の悩みと死を見たときは、もう彼女の理智が目醒めつゝあつたので、この母の追憶は、彼女の快活な熱性的な性質にかけられた一つの手綱であつた。だから何のかのといふことに一切お構ひなしに太陽の目さへ見えると、この可愛い少女は元氣づいて笑ひ出すのだつた。その様は見るからに可愛らしく、無邪氣で、人の心を動かさないではおかなかつた。

一方ザリーリの方はちよつと傍からみたところ、それほどひどい境遇には思はれなかつた。何故なら今は美しい容貌と、逞しい身體とを持つた青年となつて、自分の身を守る術も心得てゐたし、またその外にあらはれた態度は自ら、少くとも虐待を許さぬだけの威容を具へてゐたから。彼は兩親の思はしくない勝手の有様をみては、もとはこんなではなかつたがと思ひ出した。實際彼は、まだしつかりした、賢い、落ちついた百姓だつた父親の、以前の面影を記憶してゐたが、今はその父親を、喧騒と大言壯言とを以ていろんな愚昧な道や奸猾の道を彷徨ひ、一時間毎に蜩蛄のやうに後退りする胡麻噓頭の莫迦者、喧嘩好き、のらくら者として見るのであつた。どうしてかういふことになつたのか、人生に經驗の浅い彼にははつきり呑みこめなかつたが、わけがはつきりしないなりに、かうした父親の有様が厭しいものに思はれて、恥づかしさと憂はしさに胸がいつばいになることがよくあつた。が、かうした彼の悲しみは、また母親の阿諛によつて忘れさせられるのだつた。母親は自分のふしだらを妨げられないために、いゝ相棒をつくるために、また何

でも威張りたがる自分の癖を満足させるために、ザリーリの氣まゝにさせた。さつぱりした、そして見榮をはつた身装をさせ、ザリーリが享樂のために考へることは何でも手傳つてやつた。ザリーリは母親のするまゝにさせてゐたが、母親があんまりお饒舌りをしたり、虚言をついたりするので大してありがたいとも思はなかつた。彼は何をしてさう面白いとも思はなかつたが、氣に向いたことは何でも別に深い考へもなくやつた。が、まだ親たちの實例によつて害はれてゐなかつたし、また若いものらしい欲望は總體に單純で、冷靜で、かなり活動的であることを感じてゐたから、彼が氣の向くまゝにすることも別に害悪にはならなかつた。彼は彼とちやうど同じ年頃時分の父親と非常によく似てゐた。このことは父親に、混亂した良心と惱ましい追憶とを以て自分自身の若い時を思ひ起させ、知らず識らず息子に對する尊敬の念を注ぎ込んだ。ザリーリはかういふふう自由に自由だつたが、それでも彼は自分の生活を楽しい、とは思はなかつた。自分の目の前に何一つとして碌なことはなく、従つて何一つ碌なことを覚えなかつたことをはつきりと意識した。何しろマンツの家ではもう長いこと、纏まりのある、わけのわかつた仕事の話なんか誰も口の端にも出さなかつたから。そこでザリーリのこの上ない慰めといへば、自分の獨立と今のところ誰からも叱られないといふことを誇ることであつた、この誇りの中に、彼は傲然としてその日その日を過として、將來のことはわざと考へなかつた。

彼が従はなければならなかつた唯一の束縛は、マルチの名の關係したること、マルチを思ひ出させるすべてのものに對する父親の敵意であつた。併し彼はマルチが、父親に損害を蒙らせたことと、マルチの家でも同じやうに自分たちに敵意をもつてゐるといふことの他には別に何も知らなかつた。従つてマルチやその娘に顔を合せないやうにすることも、また自分の方から、まだどつしりと舞臺には着かないが、かなり冷淡な敵役を演ずることも大してむづかしいことではなかつた。それにひきかへてザーリよりもつと困難を堪へ忍ばなければならず、しかも自分の家では誰もかまつてくれなかつたにもかゝらずヴレンヒエンは、どうしても敵意を抱くやうな氣にはなれなくて、たゞいゝ身装をして幸福らしいザーリから輕蔑されてゐるものとのみ思ひ込んでゐた。そんなわけで彼女は、彼にあはないやうに心懸けた。彼が何處か近くにでもゐると、ザーリの方から強ひて彼女の方を見ようともしないのに、彼女は急いで行つてしまつた。こんなふうで彼は、少女をもう二三年以來近くでみたこともなく、少女が大きくなつてからどんなふうに変つたかもまるで知らなかつた。それでも彼は時々ひどく彼女のことを氣になつて、マルチの家の話などが出ると、ついあの娘のことばかり考へた。彼女の今の容姿ははつきり知らなかつたが、その思ひ出は彼にとつて決して厭はしいものではなかつた。

さてあの二人の敵同志のうちで、最初に生計がたゞなくなつて家屋敷を他人の手に渡さなければ

ばならなくなつたのは彼の父親のマンツだつた。マンツが一步先きにかうしたことになつたのは、マルチがその礎のぐらゝな王國での唯一人の消費者であつたにも拘らず、その娘は家畜のやうによく働いて鏝一文も無駄には使はなかつたのに反して、マンツには手傳ひをする女房があり、少ないながらも一緒になつて費ふ息子があつたからである。かうなつてはマンツも、日頃何やかと世話になつたゼルドヴエーラの人たちの勧めに従つて町に引越して、そこで料理屋を始めるより他に策の施しやうもなかつた。畑で年を寄せた百姓が僅かに残つた家財をもつて町に引越し、そこで小さな料理屋か酒場をはじめて、これを最後の救ひの錨とし、心にもない笑顔を賣る如才のない主人にならうといふのは、實に他目にも憐れなものである。マンツの家が引越すとき、人は初めて、彼らがもうどんなに貧乏になつてしまつたかを見た。彼らは古い壞れかゝつた道具ばかりを馬車に積んだ。もう長い間何一つ新調したり、買ひ込んだりしたものは一つもないことがよくわかつた。そんなふうなのに女房は、がた／＼馬車に乗込むときには一番いゝ晴衣を着込んで、痛ましげに垣根の蔭からこの可哀さうな行列を覗き見してゐる村の人たちに、自分はもう今に町の女になるのだといはぬばかりに輕蔑の視線を投げながら、いかにも希室に充ちた顔をした。彼女は自分の愛嬌と伶俐とで町の人たちをすつかり魅してしまふ確信を以て、腑抜けになつた亭主のできないことを自分が一たびお女將として立派な料理屋の帳場に坐りさへすれば美事にやつて

みせる積りだつた。ところがこの料理屋は偏鄙な、細い通りの、みすばらしい小料理屋で、しかもそこはすぐ前の代の人が失敗したあとで、マンツからまだ二三百「ターレル」取立てることができるところから、ゼルドヴェーラの人たちが彼に貸したものであつた。ゼルドヴェーラの人たちは彼に、交ぜものをした葡萄酒二三樽と店の道具を賣りつけた。白い安物の皿一打、同じ数の洋盃と縦の机と椅子が二三脚。この机や椅子ももとは朱塗りだつたが、今は見るかげもないほど剥げてしまつてゐた。窓の前には鐵の環が鈎にかゝつて音をたてゝゐるが、その環の中では一本の錫の手が赤葡萄酒を小さい瓶から洋盃についでゐた。その他にまだ枯れた冬青が一束戸口の上にかゝつてゐる。が、マンツはこれらもみんな一緒に借りたのであつた。こんなふうで彼は女房程いゝ氣持にはなれず、むしろいやな豫感を胸に抱き、それに腹立しさをも加へて、新しくきた百姓から借りた瘦馬に鞭をあてた。最後まで手離さなかつたこの瘦せ衰へた奴僕は既に二三週間前に彼を見棄てゝしまつたのであつた。こんな有様で出發するとき、彼はマルチがさまをみるといつた顔をして通りの近くで何か仕事をしてゐるのをみて、彼を呪つた。自分の不幸はたゞ彼のためだと思つた。ザーリは併し、車が動きだすとすぐに歩を早め、車の先きを越して獨り横道を通つて町へ行つた。

「さあ着いたよ！」

車が酒場の前にとまつたとき、マンツがかういつた。その聲をきいて女房はびつくりした。それは實際惨めな料理屋だつたのである。人々はこの新米の小料理屋の親爺を見ようと急いで窓の下や家の前に出てきて、ゼルドヴェーラの町のものだといふ優越感をもつて憐憫と嘲笑との表情を示した。マンツの女房はふくれ上つた。目に涙を浮べて車を攀ち下り、しばらく何かいひたさうに舌をもぐ／＼させてゐたが、斷じて顔を見せないといふ見幕で家の中へ駆けこんだ。彼女は今日一日は車から取り下される粗末な道具やいたんだベットが恥づかしかつたのである。

ザーリも恥づかしいには恥づかしかつたが、手傳はないわけにいかなくかつた。かうしてとにかく父親と一緒にこの小さな通りに妙な店を出した。すると財産を費ひ果したのらくら者の子供たちがすぐにこの通りを跳ね廻つて、零落した百姓の家のものをからかつた。併し、家の中は外よりもつと惨めで、まるで群盜の巢窟をつくりだつた。四圍の壁はぞんざいに白く塗つた、じめじめした煉瓦壁で、もと朱塗だつたあの机のある暗い薄氣味のわるい客間の他には、たゞ二つ三つの粗末な小部屋があるばかりで、到るところに、引越していつた前の者が手もつけられないやうな汚れたものや塵埃を残してゐた。

はじめがかういふ有様だつたが、その後も變りはなかつた。尤もはじめの一週間は、殊にその夕方は、田舎料理屋を、多分何か面白いことがあるだらうといつた好奇心から來る客で、時々机

がいつばいになることもあつた。彼らは亭主にはあまり目をくれなかつた。といふのはマンツはぎごちなく、無愛嬌で、憂鬱で、どう振舞つたものかまるで知らなかつたし、また知らうともしなかつたから。彼はのら／＼と拙い手つきで洋盃につき、濼い面してそれを客の前におき、何かいはうとしても、一語も口に出せないといふ有様だつた。それだけに女房はなほさら一生懸命になつた。そして實際二三日は客を集めた。が、彼女が思つたとは全然ちがつた別の意味で集まつたのだつた。かなり肥つたこの女房は、彼女獨特の普段着をきて、申分のない恰好と思つてゐた。彼女は染めてない田舎風の亞麻製のスカートに古い緑色の絹の短衣を着、木綿の前掛けをし、粗末な白い襟をつけてゐた。そしてもう多くもなくなつた毛髪に顛顛のところどころで珍妙な渦巻を拵へ、後ろの小さな鬘に齒の長い櫛を一つ挿した。かうして彼女は愛嬌をふりまき踊りまはつて、やさしく見えるだらうと口ををかしくすぼめ、跳ね反るやうに机にとんでいつて、洋盃か鹽味をつけたチースの皿を置きながら、微笑んで

「さう？ あらさうですか！ 美事、美事！」——そしてまだもつと頓珍漢なことを喋つた。以前彼女は磨きあげた舌をもつてゐたが、今は土地が變つて、来る客も来る客も知らない人たちばかりだつたので、調子のおふやうなうまい言葉が口に出なかつた。するとそこにぐづつてゐた最下層のゼルドヴューラのものたちは口に手をあて、をかしうて息がつまりさうだといふやう

な恰好をして、机の下で足でつゝつきあつていつた。

「驚いたね！ こりや實際素的な女だね！」この世の女ぢやないや！」も一人のものがいつた。「全く！ こゝまでできただけのこたああるよ、こんなのはもう長い間お目にかゝらないからね！」

彼女の亭主はそれに氣づいて、暗い目付をした。彼は彼女の胸をこづいて小聲にいつた。

「この婆牛め！ 何をするんだ？」

「邪魔するのよよしな！」彼女は不機嫌にいつた。「この老ぼれ爺め！ わたしがどんなに骨折つてゐるか、どんなに客あしらひがうまいかわからないのかい？ だがこいつらは矢張お前の仲間でのんだくれさ！ わたしのするやうにさせといてごらん、ちきにもつと上等なお得意を拵へてみせるから！」

この光景は、そこにともされた一本か二本の細い脂蠟の光りに照らし出されてゐるのだつた。息子のザーリは併し、薄暗い臺所に出て、竈の上に腰かけて父や母のために泣くのだつた。

客は御深切なマンツ夫人が彼らのために演じてくれる芝居にも、まもなく飽きて、もつと氣持のいゝ、そしてこの妙なやりかたを笑ふことのできるところに行くやうになつた。唯時折ぼつんと一人やつてきて、一ばい飲んで壁をみて欠伸をした。時には例外的に多勢が一度にきたが、こ

れはちよつと大騒ぎをやつて、この哀れな人たちを救はしていつた。彼らは太陽の目も殆んど見えないやうな狭い壁の隅で心配で悲しくなつた。以前、終日街に出てゐることになれてゐたマンツは、今はこの壁の間に挟まれてゐることが堪へられなくなつた。あの廣々とした自由な畑にゐた時分のことを考へると、彼はいつも暗い顔をして考へこみながら天井や床をちつと見つめ、それから狭い戸口に駈けていつた。すると近所の人たちがこの「意地悪親爺」——もう彼のことをかう呼んでゐた——の顔をぢろ／＼みるのでまた戻つてきた。併しこの生活もながくは續かなかつた。彼らは極度の貧困に陥つて、手許にもう一文の金もなくなつてしまつた。何か食べるにも、誰かきて僅かの金銭でまだ残つてゐた葡萄酒のいくらかを飲んでくれるのを待たなければならなかつた。そしてその客が賜詰か何かこんなふうなものを注文すると、彼らはそれを調べてくるのに一通りの心配ではなかつた。まもなく葡萄酒も他の酒場で内密に大きな壘につめて貰つて藏つておくやうになつた。こんなふうで今や彼らは葡萄酒もパンもない料理屋を営み、食ふものも碌に食はずに愛想よくしなければならなかつた。彼らは誰も來なければかへつて嬉しい位だつた。生きることも死ぬこともできないでこの小さな酒場に蹲つてゐた。女房はこの悲しい経験を嘗めたとき、あの緑色の短衣を脱いでまた趣向をかへた。以前は缺點を發揮したが、今度は女らしい徳性を少しばかり發揮した。いやむしろ危険が愈々迫つてきたので修養した。彼女は何事も忍耐

し、年とつた亭主をしつかりさせ、息子をいゝ方に指導しようと思つた。またいろんなことに自分の身を犠牲にした。つまり、彼女の思つた方法で一種の溫情的感化を與へようとしたのであつた。それは大して廣くも及ばず、また大して改善したところもなかつたが、とにかく全然ないか又はその反對よりはまじだつた。そして少くともさうでなかつたらもつとずつと早く到來したにちがひない破滅の時期をのばすのを手傳つた。彼女は今やほんのつまらないことにまで、自分の頭に應じていろ／＼と策を與へた。そして自分の策が何の役にも立たないやうに思はれて失敗すると、潔く男たちの憤怒を堪へ忍んだ。要するに彼女は、以前すればもつと役に立つたらうと思はれることをすべて老いの身もいとはずにやつたのである。

せめて何か食べられるものを手に入れるために、も一つは時を過すために、父親と息子は河あさりをやることにした。それも釣竿で、それを川に垂れるといふ、誰にでも許されてゐる程度の一——。それは財産を使ひ果してしまつた後のゼルドヴェーラの人たちの主要な仕事であつた。魚のよくかゝりさうな好天気には、彼らが釣竿と手桶をもつて十人、十二人とぞろ／＼出かけてゆくの見受けた。そして川岸を逍遙ふと、一歩おきに竿糸を垂れた連中が蹲つてゐた。長い鳶色の市民服をきて素足を水に浸してゐるもの、古いソフト帽を耳の上に斜に冠つて、裾の尖つた紺の燕尾服をきて柳の老木の上に立つてゐるもの、さうかと思ふとまた向ふにはもう他の着物が

なくてぼろ／＼になつた大きな花模様のある夜着をきて、片手に長いパイプをもち、他の片手に釣竿をもつて釣つてゐるもの。それから川のうねつたところに沿うて曲つてゆくと禿頭の布袋腹の年寄が一人素裸で石の上にたつて釣つてゐる。この男は水の中にゐるのに、長靴を穿いてゐるのぢやないかと思はれるやうな黒い足をしてゐた。誰もかも小さい壺か箱を側においてゐて、その中には今朝の幾時間かをつぶしてとつた蚯蚓がうよ／＼してゐた。空が雲に蔽はれて、蒸暑く鬱陶しい、雨催ひの日などには、かうした姿が流れの岸に最も多く立ちならぶ。そしてまるで立竝ぶ聖徒や豫言者の立像のやうに身動きもしない。農夫たちは別に氣にもとめずに家畜をつれ、車をひいて彼らの傍を通りすぎる。川の中の船頭は、邪魔な舟だなあなどと囁き交す彼らを願みようともしない。

十二年前、マンツがあゝの立派な馬をつけて川岸の上の丘で耕してゐた頃、若し誰かゞ、お前さんもいつかこの妙な聖徒の仲間入りをして、同じやうに魚を釣るだらうと豫言したなら、彼はきつと、何を吐かしやがるんだい——と怒鳴りつけたことであらう。ところが今は、彼もこの聖徒達の後ろを急いで通りすぎて、さながら暗い川岸に居心地のいゝ寂しい場所を探して歩く下界の我欲な亡者のやうに、岸に沿うて上流の方にのぼつて行つた。併し釣竿をもつてぼかんと立つてゐることは彼にも、彼の息子にも我慢がでなかつた。何故なら、他の百姓たちがいろんな方法

で魚を捕へることを、殊に川の中で手掴みにした時の得意な様などを思ひだしたので。そこで彼らは釣竿はほんのみかけにして、かねてから知つてゐる、高價ないゝ鮎のゐるところまで小川の岸に沿うて上つて行つた。

田舎に残つたマルチも、そのうちにだん／＼暮し向きが悪くなつた。それに退屈でたまらなかつたので、擲げやりにしてゐる畑で働らく代りに、たうとう彼も魚つりを思ひついて、終日水の中をうろつきまはつた。ヴレンヒエンは父親の側を離れることを許されないので、降つても照つてもぢく／＼した草原や、小川や、水溜を通つて、手桶や釣道具を運んで行かなければならなかつた。従つてその間は、どうしてもしなければならぬ家の用事を放つておかなければならなかつた。父娘二人の他にはもう誰もゐなかつたし、また持つてゐた土地の大部分を失つて、今は僅かの畑しか残つてゐなかつたが、それを娘とたまたま手を入れる、といふよりはむしろまるで耕さなかつたから、他に人を使ふにも及ばなかつた。

ある日の夕暮のことである。雨雲が一面に空を蔽つてゐた。彼は鮎がしきりに跳ねてゐるかなり深い、流れの早い小川に沿うて歩いてゐると、思ひがけなくも向う岸をこつちにやつてくる敵のマンツに出會つた。相手を見るや、彼の胸の中におそろしい憤怒と輕蔑の念がむら／＼とこみあげてきた。彼らは二三年この方、互に罵りあふことの許されない法廷の欄杆は別として、その

他にはこんなに眼近に見合つたことはなかつた。マルチはこの時怒りに激昂して怒鳴つた。

「何をしやがるんだ、此處で？ 犬め！ 貴様の乞食小屋にちつとしてゐられねえのか、ゼル
ドヴェーラの乞食犬め！」

「貴様だつてもうすぐにかうならうぜ、畜生め！」マンツも叫んだ。「貴様だつてもう魚つりを
はじめたんだから、大しておくれてもゐまいて！」

「黙れ、この絞首臺の犬め！」この時小川の波の音が高くなつたのでマルチは一層聲をはりあ
げて怒鳴つた。「貴様が俺をこんな不幸せにしあがつたんだぞ！」

川岸の柳までが吹きだした雨の前の風にひゆう／＼とさわめき立つたので、マンツは更に一層
大聲で怒鳴らなければならなかつた。

「いゝ面の皮だ、拔作め！」

「この犬め！」

マルチがこちらから叫べば、マンツも負けずにあちらから喚めき返した。

「この犢め、なんて馬鹿野郎だ！」

そしてマルチは怒りたつた虎のやうに小川に沿うて駈け出して、向う岸へ渡らうとした。何故
彼の方が餘計に腹をたてたかといへば、自分は不當にも荒れ果てた家で退屈してゐるのにマンツ

は料理屋の亭主として少くとも飲んだり食つたりするには支障なく、幾分か陽氣な生活をしてゐ
るだらうと考へたからであつた。マンツも彼に劣らず腹をたて、向う岸を急いだ。その後につい
てゐた息子のザーリはこの苦々しい喧嘩に耳もかさなないで、もの珍らしさうに、また怪訝さうに
ヴレンヒエンをよやつた。ヴレンヒエンは恥づかしくてたまらなかつた。鳶色の縮れ髪が顔にふ
りかゝる程顔を伏せて、父親の後からついていつた。彼女は木の手桶を片手に、も一方の手に靴
と襪をもち、その着物は濡れないやうにつまみあげられてゐた。併し向う岸をザーリが歩いてゐ
るのをみてから、恥づかしがつて裾を下したので、一度に三重の煩しさと惱ましさを感じなければ
ばならなかつた。といふのは、道具をみんな手にもち、スカートをきちんとし、また喧嘩のため
に心配しなければならなかつたので、もし彼女が顔をあげてザーリの方を見やつたなら、ザーリ
が今はもう立派な身装をしてゐず、また大して威張つてもゐず、却て彼自身もすゐぶんしよげて
ゐるのに氣づいたことであらう。ヴレンヒエンはたまらなさうに恥づかしがつて、うろたへて、
地面にばかり眼を落してゐた。ザーリはまた、すつかり狼狽して殊更に慎しやかに歩いてくる貧
しい装ひながらもすらすらとした可愛らしい少女の姿に見惚れてゐた。だから父親たちが、怒鳴り
立てる聲だけは静まつたが、なほ一層怒り猛つて、すぐそこにかゝつた、そしてその時ちやうど
見えだした木橋の方に走つて行つたのに氣がつかなかつた。

電光が閃いた。薄暗い憂鬱な水邊が氣味わるく映えた。灰色の雲の中で鈍く咆えるやうな雷鳴がした。殺氣だつた兩人は殆ど同時に細い、踏む度にぐらぐらする橋を目がけて走り寄つて、互ひに掴みあつた。憤怒とはちぎれた苦惱とのために蒼ざめてびくびく顫へてゐる顔を拳で殴りあつた。折しも大粒の雨がばらばらと降りだした。平生落付きのある人でも、時によると、自尊心や、無思慮や、また自己防衛の必要から、あまり近しくないいろんな人たちを相手に殴つたり、殴られたりすることがあるものだが、それは決して面白いことでもなければ、また上品なことでもない。が、しかしこれとてもまた上品なことでもない。互に古くからの知り合でありながら、互に胸の奥底からの敵意や生涯の物語の筋の運びから、互ひに素手で掴みあひ、拳で殴り合はねばならない二人の老人たちの不幸に比べれば、一場の無邪氣な兒戯に過ぎない。今のこの二人の白髪男がその通りであつた。五十年前、子供の時分に互に髪の毛を撈りあつたのが多分最後だつたらう。それ以來五十年の間彼らはもう何人の手とも觸れ合つたことはなかつたのだ。彼らがまだ幸運だつた時挨拶のために手を握りあつたのは別だが、(これとても彼らが無愛想で頑固な性格だつたのでごく稀だつた。)

彼らははじめ一つか二つ殴りあつたが、物をもいはずに顫へながら取組みあつた。たゞ時々呻めき聲と、苦しきさうな齒ぎしりの音とがするだけだつた。そして互に相手を今にも毀れさうにみ

し／＼いつてゐる欄干越しに水中に投げ込まうとあせつた。この時子供たちも駆けつけて、この悲惨な場面を見た。ザーリは風をきつて飛んできて、父親に味方し手傳つて、この憎い敵にとゞめをさしてしまはうとした。そのため、それでなくてさへ、マンツより弱さうに見えてゐた敵は今にも組み敷かれさうだつた。併しこの時ヴレンヒエンがまた何もかもを放りだして、長い叫聲をたてながらとんできて、父親を守らうと嚙りついた。が、それは却て父親の動作を妨げて、邪魔になるばかりだつた。彼女は眼に涙を湛へて、今にも彼女の父親に掴みかゝつて組み敷かうとするザーリの顔をぢつと哀願するやうに見つめた。すると思はず彼の手が彼の父親にかゝつた。そしてその手はしつかりした腕力を以て父親を相手から引き離した。そのために取組合ひはちよつとの間鎖まつた。といふよりも、むしろ彼らは一團になつて押し合ひながら纏れ合つた。その間にいつしか若い者たちは父親たちの間にもまれながらびつたり寄り添つた。ちやうどその瞬間雲切れがして、眩しい夕陽がバツと流れ出た。そして眼のあたりに少女の顔を照らした。ザーリはよく見覚えのある、そして以前とは大變かはつて美しくなつた顔を見た。ヴレンヒエンはこの瞬間ザーリの愕きの表情を見遁さなかつた。彼女は恐怖と涙の中からほんのちよつと、殆んど眼にもとまらない早さで彼に微笑みかけた。併しこの時父が自分を振り放さうとして藻掻いたのでザーリはハツとして我に返り、氣色を勵まして、ひたすら父をなだめながら、しつかと抑へたま

ま遂に全く敵から父親を引き離した。二人の年老いた喧嘩相手はふう／＼息をはずませて、互に引き別れながらもまた罵つたり叫んだりしはじめた。併し子供たちはぢつと息を潜めて、死人のやうにだまり込んでゐた。が、別れ際に父親たちにはそつと内密で、素早く、水と魚とに濡れて冷たい手と手とを握り合つた。

怒つた同志が各々家路に就いた時、またしても雲が空を閉ざして、あたりは次第に暮れはじめ、ざあ／＼降りの雨さへ加はつた。マンツは先に立つて仄暗い雨の道を歩いて行つた。両手を隠しにつゝこんで、深く頸垂れて、まだ顔の筋肉をびくつかせて、齒をぎし／＼噛み鳴らして。目に見えない涙が剛い髯の中を傳つて流れた。彼は覺られるのを惧れて、流れるまゝに、拭はうともしなかつた。しかし楽しい面影に魂を奪はれてしまつてゐた息子は、もう何物も見なかつた。雨も嵐も夜の暗さも我が身の不幸も、何にも氣がつかなかつた。いやむしろ、心の中も外も軽やかで、明るく、暖かく、自分自身が王子のやうに豊かに、幸福に感じられるのだつた。彼の目には間近に見たあの美しい顔の一秒間の微笑みが絶えずちら／＼と揺れてゐるのだつた。そして半時も経つた今はじめて、あの可愛い／＼顔の微笑みに應へるために、愛に満ちた心を以て夜と暴風雨の中へ笑顔を送つた。と、その可愛い／＼顔が暗の四方から現はれて來た。そこで彼は、ヴレンヒエンが歸りの途すがら彼のこの微笑みを屹度見て、あの方だわ——と氣づいたにちがひないと思

つた。

彼の父親は、翌日はまるでうちのめされたやうになつて、一步も家から出ようとしなかつた。

この事件の全體と長年の不幸とは、今日新たに、よりはつきりした姿をとつて、胸苦しいほど澱んでゐる酒場の空氣の中に暗くひろがつた。亭主と女房とは全く意氣沮喪して、怖々とこの幽霊のまはりをそつと忍び歩いて、店から薄暗い小部屋へ、其處から臺所へ、臺所からはまた今は絶えて客の姿を見ない店へと足をひき／＼歩きまはるのだつた。そして最後に各々隅つこに蹲つて、終日懶い、半分死んだやうな喧嘩口論に時を移し、疲れきると時々假睡をして、良心からくる不安な晝の夢に苦しめられて、再び目覺めるのだつた。併しザリだけは、その胸の中がヴレンヒエンのことではいつばいだつたので、父母のすることに就ては何も、見も聞きもしなかつた。彼は今、昨日遭遇した事件の意味をはつきり、確實に了解することが出來た。で、自分が言葉でいひ盡せない程豊かであるばかりでなく、ある正しいことを學び、無限の美しいことゝ、善いことゝを知つたやうな氣がしてならなかつた。この知識は彼にとつてまるで天から降つてきたやうなものだつた。その限りない幸福の嘆美の中に彼は陶然として浸つた。併しよく考へてみると、今かくも不思議な甘さで自分を充たしてくれるものをほんとはずつと以前から知つてゐたのだといふ

氣が彼にしないでもなかつた。といふのは、かくもはつきりした姿で、人間に近づいて來る幸福、僧侶から祝福され命名されて耳ざはりさへ他の言葉と違ふ固有の名稱を有つてゐる幸福、その幸福の豊潤さ、底ひなき深さは、これに比ぶべき何物もないものであるから。

ザーリはこの日は、懶さも不幸も貧しさも行末の果敢なさも感じなかつた。彼は唯々ヴレンヒエンの顔や姿の思ひ出にいそがはしく時の移るのも知らなかつた。ところがこの氣ぜはしい仕事のために却てその對象が殆んどすつかり消え失せてしまつた。といふのは、彼はたうとうヴレンヒエンの様子がほんたうにどういふふうだつたか、今はつきりとは思ひ出せない、その大體の姿は記憶してゐるが、さあそれをはつきり記述しようとなると、それは不可能である——といふことを考へたのであつた。彼はしよつちゆうこの記憶の中の姿を眼の前に立つてゝもゐるやうに見た。そしてその氣持のいゝ印象を感じた。併し彼はそれを、たつた一度みたことのある、そしてそのものにすつかり囚へられてしまつてゐながらもまだはつきりと掴めないあるものゝやうにのみ見るのだつた。彼はヴレンヒエンの幼ない時分の顔立を、はつきり思ひ浮べることが出來て躍り上つたが、それはもとより昨日みた彼女の顔ではなかつた。若しもヴレンヒエンと再び顔を合せることにならなかつたら、彼の逞しい想像力はその自在の翅を驅つて、あの可愛い顔を一筋も缺かさずに鮮かに描き出してくれたにちがひない。が、今は目が自己の權利と喜びとを望んだの

で、この想像力は狡猾に、そして剛情にその勤めを拒んだ。

午^ひすぎの太陽が黒い家々の上層を暖かく明るく照す頃、ザーリは町の門を抜け出して、彼のためには今初めて十二の輝かしい門のある聖地エルザレムとも思はれるわが故郷へと向つた。そしてだん／＼近づいたとき彼は胸の鼓動の激しく高鳴るのを覺えた。

途中、彼は、町へ出かけるところらしいヴレンヒエンの父親に遭つた。随分亂暴な、だらしない様子で、胡麻鹽になつたその髯は二三週間も前から剃刀を當てないのだつた。さながら、自分の畑をすつてしまつて、今や他人に害を加へに出かけてゆく實に性の悪い、手のつけやうもない百姓のやうだつた。二人が行き違つたとき、ザーリはもう憎惡の目付で、ではなく、自分の生命がこの男の手中に握られてあるかのやうに、そしてそれを争つて奪ひ取らうといふよりも、むしろ哀願して取らうとでもするやうに、こは／＼相手を見守つた。併しマルチは、彼を底意地の悪い目付で頭の頂^{てつぽん}邊から足の爪先までぢろ／＼測つて、さつさと行つてしまつた。併しザーリにとつてマルチと出遭つたことは却て好都合だつた。あの老人が村を出てゆくところを見たので、自分は何のために村に行かうとしてゐるのか——といふことが前よりもはつきりしてきた。彼は舊くから識つてゐる徑を辿つて、長い間村のまはりをうろついて、物蔭の細い道を抜けて、遂にマルチの家の向側までこつそり忍んで行つた。もう數年來彼は此の場所をかうも近くで見たことが

なかつた。といふのは、彼らがまだ此處に住んでゐた頃も、敵同志のこと故、互に相手の屋敷内に這入らないやうに避け合つてゐたから。彼は今、眼の當りに、自分自身の父親の家でみたことが此處にも起つてゐるのを見て驚いた。彼はその荒れはてた模様を怪しげな目を以て見つめた。マルチの畑は一つ／＼片端しから差押へられてしまつて、今はもう家とその前のちよつとした廣場と、他にいくらかの菜園と川岸の丘の側の畑（この畑は河としても頑固に最後まで手離さうとしなかつた。）の他何も有つてゐなかつた。

併し無論眞面目に耕作するなどいふことはなかつた。嘗て收穫期の來る毎に、穂頭を揃へてあんなに美しく波うつた畑が、今は落ちこぼれた種子の残物が芽を萌き、また古い種子箱や破れた紙袋の中からかき集めた蕪菁、野菜類、それにいくらかの馬鈴薯、といふやうなものも混つて成長してゐた。で、見るからにひどく手入の悪い野菜畑か、さもなければ奇態な標本紙のやうだつた。とにかくその日暮しの露命をつなぐためには、こゝで一握りの蕪菁をひき抜き、あそこで一荷の馬鈴薯か野菜をひき抜いて、残りは堆えやうが腐らうがかまはないといつた了簡で畑作りがしてあるかのやうだつた。その上また、誰でも勝手にその中を駆けまはつたので、さしも美しかつた廣い畑も今は殆んど、あらゆる不幸の源泉となつたあの主なし畠の昔そつくりだつた。かうした有様だつたので家の周囲には耕作の氣勢など微塵もみられなかつた。廐はがらんどろで、

戸はたゞ鈎一本でかゝつてゐた。薄闇い入口の前には夏ぢゆうかゝつて倍も大きくなつた無数の大蜘蛛がその巢を陽光の中に輝かしてゐた。嘗てこの豊饒な土地にできた穀物を幾臺もの車で運び入れた納屋の開けつ放しになつた戸口には、今はうつて變つた河稼ぎの證據として粗末な釣道具がかゝつてゐた。庭には鶏一羽も鳩一羽も、或は猫も犬も見られなかつた。生々としてゐるものといへばまあ噴井戸だけだつたが、それももう今は筒からは流れないで、地面に近い裂目からそこらぢゆうに迸り流れて、方々に小さな水溜を作り、怠惰の最もいゝ象徴をなしてゐた。何故なら、父親のちよつとした骨折りでその穴も埋まるし、筒をなほすこともできたのであるから。だが今は、ヴレンヒエンは飲み水さへこの壊れたところから汲みとらなければならなかつた。乾いてばら／＼になつた槽の代りに、地面の浅い水溜で洗濯しなければならなかつた。家も同じやうにみじめな有様だつた。窓といふ窓は大抵打ち毀されて、紙で貼りつけてはあつたが、でもこの頽廢した中では、一番見よいものであつた。といふのは、硝子は壊れてゐてもきれいに洗つてあつて、いやほんたうに磨いてあつて、貧乏な中でその他のすべての飾りを補はなければならなかつたヴレンヒエンの眼のやうに明るく輝いてゐた。そしてヴレンヒエンの眼に對して縮れ髪と橙色の更紗の頸布があるやうに、この輝く窓に對しては家のまはりにそこらぢゆうに蔓を絡みあつた緑草——風に翻る隠元豆の小さな森と、いゝ香のする橙色のあらせいたうの草原とがあつた。

隠元豆は、こちらで、熊手の柄や倒さに地面に突きさした擦りきれ帯に、懸命にしがみついているかと思へば、あちらではすつかり錆びついた短槍に絡みついている。(この短槍はスポントンとも呼ばれて、ヴレンヒエンの祖父が曹長時代に携へたものであるが、今は使ひ場もなく、隠元豆の中に植ゑこまれてゐるのであつた。)そしてまた向ふの方では、何時の頃からか家に凭せかけて雨曝しあまさらにされ放しの梯子を面白さうに攀ぢのぼつて、まるでヴレンヒエンの縮れ髪が眼に垂れかかるやうに明るい小窓に垂れかゝつてゐる。この経済的といふよりもむしろ繪畫的な庭はやゝ家の端寄はしりにあつて、近所に家など一軒もない。また折よくこのときは、何處にも人影も見られなかつた。で、ザーリはすつかり安心して三十歩ばかり距たつた古い納屋に凭れて、ちつと物音もないあばら家の方を見やつてゐた。長い間さうやつてゐると、ヴレンヒエンが戸口に現れた。そして、何か一心に考へ込んでゐるらしく、暫らく、ばうつと前の方をみつめてゐた。ザーリは身動きもしないで、彼女から眼を離さなかつた。大分たつた頃、彼女は何の氣なしにひよいとこちらをむいた。と、彼の姿が彼女の眼に止つた。二人は暫らく、まるで盛氣樓でもみるやうに互に顔を見合つてゐたが、しまひにザーリの方から立ち上つて、道や庭を越えてゆつくりとヴレンヒエンに近づいて行つた。そして少女の側に來た時、少女は両手を彼の方に差し伸べていつた。

「ザーリさん！」

彼はその両手をとつて、ちつと少女の顔を見入つた。顔を眞赤に染めた彼女の眼から涙がはらはらと落ちた。彼女がいつた。

「何しに來たの？」

「お前の顔がみたいばかりにさ！」彼は答へた。「またもとの通りに仲のいゝお友だちにならうぢやないか？」

「でもお父さんたちは？」

両手が自由にならなくて蔽ふことの出来ないヴレンヒエンは、泣顔をそむけながらかう訊いた。「お父さんたちがあゝなつたのはわたしたちのせゐぢやないぢやないか？」ザーリはいつた。「でもわたしたちふたりが一緒になつて本當に愛しあつてゆけば、今の不幸だつて屹度よくすることが出来るだらう！」

「とても、よくなることなんかなくつてよ」ヴレンヒエンは深い溜息をつきながら答へた。「ザーリさん、何卒あなたはあなたで御自分の道を立てゝ頂戴ね！」

「ひとり？」ザーリが訊いた。「ちよつと這入つてもいい？」

「お父さんは町に行つたわ、あなたのお父さんに何か用事があるつていつて。でも這入つちやいけないわ、遅くなるときつと歸るところを見つかつてよ。まだあたりがひつそりしてゝ、誰も

道にゐないから、お願ひだわ、今のうちに歸つて頂戴！」

「いやだ、そんなにすぐなんか歸るもんか。だつて僕は昨日からすつとお前のことばかり考へてたんだ、このまゝ歸るなんていやなこつた。どうしても一緒に、少くとも半時間か一時間は話さなけりやゐられないんだ。さうすれば何もかも判るんだ！」

ヴレンヒエンは暫らく考へ込んで、それからいつた。

「わたし、夕方うちの畑にゆくわ、どれだかあなた知つてゐるでせう、うちぢやまだあれだけもつてるのよ——あそこにわたし、少しばかり野菜をとりに行くわ。誰もゐやしないことよ、みんな何處か他の畑で刈つてるから。あそこなら大丈夫よ。よかつたらあつちへきて頂戴。でも今は歸つて頂戴！ 誰にもみられないやうに氣をつけてね！ こゝではもうわたしたちと交際つきあひふ人はひとりもゐないんだけれど、また噂でもたてられると、すぐにお父さんの耳に這入りますから。」

二人は今手を離しあつた。と思ふとすぐにまた握りあつた。そして二人が同時にいつた。

「でもこの頃はどうして暮してゐるの？」

併し互にそれに返事をする代りに、同じことを繰り返してきいた。そして返事はたゞ能辯な眼の中にあつた。愛し合つたものゝ常としてもう言葉を使ふ術を知らなかつたから。そのまゝ二人は何ももういはないで、たうとう半分嬉しげに、半分悲しげに別れたのだつた。

「わたしぢきに行つてよ、あなたこれからすぐ行つて頂戴ね！」

ヴレンヒエンは一度後ろから叫んだ。

ザーリはすぐに、あの二つの畑の擴がつてゐる静かな美しい丘をさして登つて行つた。輝かしい、それでゐて静まり返つてゐる七月の太陽、實みつた麥穂の、風に波うつ畑の上をかける白い雲、銀色に輝きながら丘の裾を流れる川、凡てが幾年ぶりかで初めて、あの苦惱の代りに幸福と平和とを以て再び彼の胸を充たしてくれた。彼はマルチの荒廢した畑の境際の、透かせば先きの見える疎らな麥の蔭に、なが／＼と身を横へて、さも嬉しげに空を覗いた。

ヴレンヒエンがやつて来るまで、十五分もかゝらなかつた。その間彼は我が身の幸福と彼女の名その他、何も考へなかつた、が、彼女が彼の前にたつて微笑みながら見下したときは、それが不意だつたので、彼はびつくりして、嬉しまぎれに跳ね起きた。

「ヴレーリイ！」

彼は叫んだ。ヴレーリイは黙つて微笑みながら彼に兩手を與へた。今は彼らは互ひに手に手をととりあつて、風に嘯やく麥に沿つて川岸まで下りて行き、また後へ引返へした。が、その間、二人ともあまり多く口敷をきかなかつた。そしてその往復を二三度繰り返へした。黙つて嬉しさうに、ゆつくりと。で、今この仲睦しい一組もまた、以前彼らの父親たちの着實ゆきじつに往來した耕作の

組がさうだつたやうに、陽光を浴びた丘の圓みを越えて、その背後に沈んでゆく星座のやうだつた。併し彼らがちつと見つめてゐた青い矢車草から、ちよつと眼をはなして見あげた時、思ひがけなくも一つ他の黒い星——どこからすうつとやつて來たのか眞黒い男が、彼等の前を歩いてゆくのを見た。その男は麥畑の中に寝てゐたにちがひない。ヴレンヒエンはぞつと縮みあがつた。ザーリは驚いていつた。

「ヴァイオリン弾きの黒んぼだよ！」

實際彼らの前をぶら／＼歩いてゆくその男はヴァイオリンを弓と一緒に小腋にかゝへてゐた。成程随分黒い様子をしてゐる。黒いソフト帽に煤けた黒い肌衣。毛髪も剃らない髯も瀝青のやうに眞黒い。顔から兩手まで矢張り眞黒い。何しろ彼はいろんな手仕事を、就中鑄掛仕事を、また森の中で炭焼きや瀝青煮の手傳さへもしてゐるのである。そして農夫たちが何處かでいゝ氣持になつてお祭りでもするやうなときは、何かいゝことはないかとヴァイオリン一つをかゝへて出かけてゆくのであつた。

ザーリとヴレンヒエンは、こそとも音をたてないやうに、そつと彼の後からついて行つた。その男が後もふりかへらずに、畑から遠のいて姿を消すだらうと二人は考へた。その様子が、ちつとも二人には氣づかないといつたふうに見えたので。そのために彼らは妙な呪縛まじなわにかゝつてしま

つて、思ひ切つて細い徑から離れることができず、知らず識らずの間にこの氣味のわるい仲間について畑の端まで来てしまつた。そこには今も猶ほ争ひの種なる畑の一隅を蔽うてゐる、あの厄介な石堆みがあつた。無數の籬罌粟がその上にはびこつて、さながら、眞紅に燃える小山のやうだつた。と、不意に黒ん坊のヴァイオリン弾きがこの赤い着物をきた石堆みの上に一跳びにとび上り、くるりと振り返つてあたりを見廻した。若い二人は立止つた。うろたへてこの黒い若者を見上げた。何故なら、道が村への一本道だつたので通りすぎることもできず、また彼の眼の前でひきかへすわけにもゆかなかつたから。彼は二人を睨みつけていつた。

「俺はお前たちをよく知つてるぞ。この俺の地面を盗んだ奴らの餓鬼共だらう！ お前たちのそのいゝ態さまをみると俺は胸がすうつとするのだ。俺はさう思ふんだ、きつとお前たちは俺の眼の前でさぞいゝ往生をするだらうつてな。おいお利口者のお二人さん、よろしく俺の顔をみておけ！俺の鼻が氣に入つたか、え？」

實際彼は偉大な鼻をもつてゐた。大きな曲尺のやうに、痩せた黒い顔の面にもりあがつてゐるといふよりもむしろ顔にうちこまれた太い棍棒、といふ形だつた。そしてその下に小さな圓い穴が、といつても實は口なのだが、それがまた奇妙な恰好に引きすぼんでゐて、そこから彼はたえず大きな息をしたり、口笛をふいたり、しつ／＼といつたりするのだつた。それにあの小さなソ

フト帽がひどく無氣味にみえた。圓いといふのでもなければ、角いといふのでもない、とにかく珍妙な恰好で、しかも別に動いてる様子もみえないのに、しよつちゆう、その恰好が變るやうに思はれた。それからこの男の眼といつたら、瞳がたえず稻妻のやうにすばやく變つて、まるで二匹の兎のやうに右へ左へとびまはるので、殆んど白眼より他何も見えなかつた。

「ようく俺の顔を見ろ！」彼はつゞけた。「お前たちの父親はようく俺を知つてゐるんだ。この村の者は誰だつて、この鼻さへ見りや、俺が誰だかわかるんだ。すつと前に奴らは、この畑の相續人に渡す倉が準備して藏つてあると貼紙をしたんだ。そこで俺はものゝ二十遍も、俺が相續人だといつて届け出たんだ。ところが俺には洗禮證書もなければ戸籍證書もない。現在俺の誕生をみたといふ友だちはあつても無宿者ぢや有効な證明も出来ねえといふ譯だ。といふんであれやこれやしてゐるうちに期限はとうに経つてしまつたんだ。お蔭で僅かに違ひねえが、俺にとつちや血の出るやうな金まで失くしてしまつて、もう何處へ訴へ出ることもできなくなつたんだ！で、たうとう俺はお前たちの父親に、證明してくれと頼みこんだんだ。奴らだつて良心に聞きや、俺を正當な相續人と思つたにちがひねえんだが、奴らは俺を庭先から追拂つて、さて今度は自分たちで悪魔のところに行つちまつたんだ！だがいゝさ、これが世の中の定法なんだから。俺はそれで満足だ。だがお前たち踊るんなら、俺がヴァイオリンを弾いてやるぜ！」

かういひ捨て、彼は石堆の向う側にとび下りて、村の方へ行つてしまつた。村では夕方から收穫祝ひが始まつて、人々はいゝ機嫌に浮れ上つてゐたのである。彼の姿が見えなくなつたとき、二人はすつかり萎れて、悲しさうに石の上に腰を下した。彼らは組みあつてゐた手をはなして、悲しみに閉された頭をその上に戴せた。あのヴァイオリン弾きの出現とその言葉とが、さつきまで、まるで子供のやうに彷徨ひ歩きながら浸つてゐた幸福な忘我の状態から二人を引戻したのであつた。今、かうやつて、ちつと彼らの苦惱の原因であるこの堅い土地に腰を下してゐると、晴れやかな生の光りも消え失せて、彼らの胸は石のやうに重くなるのだつた。

突然、ヴレンヒエンは、ふとヴァイオリン弾きの不思議な恰好と鼻を思ひだした。すると急に晴れやかに笑ひ出さずにはゐられなくなつて叫んだ。

「ほんとにあいつのをかした恰好つたら！まあ、何て鼻でせう！」

まるでヴァイオリン弾きの鼻が暗い雲を追拂つてくれるのを待ちかねてゐたかのやうに、少女の顔にいふにいはいはれぬ愛くるしい、明るい快活さが擴がつた。ザーリはヴレンヒエンの愉快さうな顔をちつと見つめた。ヴレンヒエンは何故自分がかう笑ひだしたのか、それさへもう忘れてしまつた、たゞしきりにザーリの顔をみては笑つてゐた。ザーリは呆氣にとられて、さながら、美味い小麦パンを見つけた飢餓者のやうに、我しらず口元に微笑を湛へながら、彼女の眼をちつと

見つめて叫んだ。

「あゝ、ヴレーリイ！ お前は何て綺麗なんだろう！」

ヴレンヒエンはたゞもう彼の顔をみながら笑ひかけるばかりだった。その上響きのいゝ咽喉から短かい元氣のいゝ笑聲を二つ三つ響かせたが、それが哀れなザーリにはどうしても鶯の唄としか思はれなかつた。

「おゝ、魔法使ひの女！」彼は叫んだ。「何處で習つたの？ 何といふ魔法を使ふのさ？」

「あら、あなた！」媚びるやうな聲でかういつて、ヴレンヒエンはザーリの手をとつた。

「魔法ぢやないことよ！ どんなに長いことわたしは一度でいゝから思ひ切り笑つてみたいと思つたでせう！ そりやたつたひとりである時なんかにも笑はずにはゐられないことも時々ありましたわ。でもそれはほんとに笑つたんぢやないの。けれど今のはほんとよ、あなたのお顔をみると、いつまでもいゝ笑つてゐたいわ。そしていつまでもいゝあなたのお顔がみてゐたいわ！ あなたも少しはわたしを可愛がつて下さつて？」

「おう、ヴレーリイ！」と、彼は叫んだ。そして眞心こめてしみじみと彼女の眼に見入りながら、「僕は今まで一度も他所の娘に眼をくれたことはない。いつも、いつかしらお前が好きになるにちがひないやうな氣がしてたから。でも僕は自分からさうしやうと思つたんぢやない、またさ

うとも知らなかつたけれど、いつも僕の頭の中はお前のことばかり考へてゐたんだ！」

「わたしもさうよ」ヴレンヒエンがいつた。「でもわたしの方がずつと餘計によ。だつてあなたはちつともわたしをようくみてくださらなかつたんですもの、わたしがどんなになつてるか御存じないんですもの。わたしはそれでも時々あなたを遠くから、いえ近い時もあつたわ、こつそりとよく拜見して、あなたが、どんな御様子かいつも存じてゐましたわ！ わたしたちは子供の時分、ようくこゝへきましたわね。まだ覚えてゐらして？ あの小さい車のこと覚えてゐらつしやること？ あの時分はまだどんなに小さかつたでせう。そしてあれからも何年経つたでせう！」

「お前今いくつ？」ザーリは幸福と満足に充ちて訊ねた。「ざつと十七位だらう？」

「十七と半年よ！」ヴレンヒエンは答へた。

「あなたおいくつ？ わたしちやんと知つてるわ、もうぢきに二十でせう？」

「何處できいたの？」

「えゝ、さうなんでせう？」

「お前いはないの？」

「えゝ」

「どうしても？」

「え、どうしても」

「いはなきやいけなし」

「無理にでもいはせやうとなさるの？」

「あゝいはせるよ！」

ザーリは手をばた／＼動かして、懲らしめるやうな振りをしながら、無器用な愛撫の仕方での美しい少女をいぢめるために、他愛もないことをいふのであつた。少女も自分の身を防ぎながら、負けず劣らずこの他愛もない口論をつゞけた。勿論何の意味もない口論だつたが、二人にとつてはそれがいかにも相應はしい、そして楽しいものに思はれた。ザーリはたうとう痼癢を起して大膽にもヴレンヒエンの手を抑へて、雛罌粟の中に壓へつけてしまつた。彼女は横たはつたまゝ、陽光を眞向に浴びた目をばち／＼させた。眞紅に燃える双頬、半ば開いた口、その間から二列の白い齒竝がちら／＼と光る。濃い眉は上品に美しく一文字に流れ合つて、若々しい胸は、絡みあつて打ちつ打たれつしてゐる四本の手の下で、元氣よく脹んだり沈んだした。ザーリは今、眼のあたりにこの華奢な、美しい少女を見て、これが自分のものかと思ふと、もう嬉しくて嬉しくて、どうしていゝか譯がわからなかつた。この少女が彼にとつては一つの王國であつた。

「まだあの白い齒をみんなもつてるね！」彼は笑つて云つた。「まだ覺えてゐる？ いったつた

か何遍も何遍も勘定したのを？ もう勘定ができる？」

「これはあのとさきのと同じぢやないことよ、赤ちゃんね！」ヴレンヒエンがいつた。「あれはもうとつくに脱けてしまつたのよ！」

ザーリは無邪氣にも今またあの遊戯を繰りかへして、輝かしい眞珠のやうな齒を數へようとした、ところがヴレンヒエンは急にその紅い口を塞いで、起き上つた。そして罌粟の花冠を編みだして、それを自分の頭の上に載せた。どつさり花のついた美事な冠は、色の浅黒い少女に神秘的な、妖艶な外貌を與へた。金持が繪に描いて部屋の壁にかけて見るだけでも高い金を支拂ふであらうと思はれるものを、貧しいザーリは今、その實體を、自分の腕に抱きしめてゐるのであつた。不意に彼女は跳ね起きて叫んだ。

「まあ、こゝは何て暑いでせう！ こんなとこに馬鹿みたいに坐つてゐて、身體をわるくしちまうわ！」

それから二人は足跡も残さない位にうまくそつと滑りこんで、金色の穂の中に、狭い隠家を拵へた。穂は、彼らが腰を下すと、すつと頭の上まで高く伸びてゐたので、二人は頭の上に濃青の空を仰ぎみるばかり、その他には世の中の何物も見えなかつた。彼らは抱きあふなり、すぐに、接吻した。長い長い間！。そしてしまひには二人とも、ちよつとの間疲労を感じた。といふより

は、ふたりの愛人同志の接吻が一分か二分空しくのびて、人生の春の陶酔のたゞ中にあつて、浮世の無常を豫感したといふ方がよからう。彼らは頭の上高く雲雀の囀りを聞いた。二人は眼を見張つて探しはじめた。そして一羽でも、蒼空に不意に輝き出た星か、さもなければ流れ星のやうに、陽光にちらつと光るのを見たと思ふと、彼らはまた褒美の意味で接吻し合つた。そして互に出来るだけ多く相手を負かし、また欺さうとやつきになつた。

「そら、あそこに一羽光つてるよ！」ザーリが囁くと、ヴレンヒエンも同じやうに低い聲で答へた。

「聲はよく聞えるんだけど、見えないのよ！」

「でも、よくみてごらん、あそここの白い雲のあるところね、あそこから少し右さ！」

二人は熱心に見上げた。そして雲雀を見つけたと思つたらすぐに接吻するやうに、まるで巢の中の雛鳥のやうに、ちやんと口を開けて待つてゐた。と、不意にヴレンヒエンがそれをやめていつた。

「あのね、わたしたちが各々おたからをもつてゐるといふことは定つたことね、あなたさうお思ひにならなくつて？」(譯者註、たからは愛人に通ず)

「あゝ、僕もさう思ふ！」

「ちやあなたのおたからはどんなふうにお氣に召して？ それはどんなものなの、それをあなたはどうなふうに仰しやつて？」

「そりやほんとにいゝもんだよ。二つの鳶色の眼と、紅い口があつてね、二本の足で歩くの。でもその心は僕はローマの法王様よりもつと知らないな！ だがお前のおたからはどんなふうなの？」

「それはね、二つの碧い眼と無駄口ばかりきく口があつて、その二本の腕は力が強くて、その亂暴つてないの。でもそのおたからの考へてゐることはわたしはトルコの皇帝よりもつとわからないわ！」

「そりやほんとだ、僕たちがまるきり會はなかつた、それ以上にお互に心を知りあつてゐないつていふのはね。僕たちが大きくなつてからの長い間が僕たちをこんな他人にしてしまつたんだね！ その間にお前の頭の中で、どんなことが起つた、え？」

「いゝえ、別に何も起りませんわ。そりやいろんなつまらない考へが起りかけたにや起りかけたんですけれど、わたしにはしよつちゆう悲しいことばかりあつたものだから、それが大きくなつてゆくことが出来なかつたわ。」

「可哀さうにな。でもお前隠してゐるんぢやないかい、え？」

「わたしをほんとに愛してゐて下されば、だん／＼おわかりになりますわ！」
 「先きで僕の女房になつたらつていふのかい？」
 ヴレンヒエンはこの最後の言葉を聞いてかすかに身顫ひした。そして更に長く、やさしくザーリに接吻しながら、その腕に挿々と縋りついていつた、眼には涙を湛へて——。二人は自分たちの果敢ない将来と父親たちの仲のわるいことなど思ひ浮べて、急にもの悲しくなつてしまつた。ヴレンヒエンは溜息を吐いていつた。

「行きませう、わたしもう歸らなければならぬわ！」

二人は起き上つて、手に手をとつて麥畑を出た。途端に、目の前にヴレンヒエンの父親を見た。眼の玉をきよ／＼させながら窺ひよつてくる彼女の父親を。

彼はザーリに出會つてから、怠惰な貧乏人の淺ましい敏感を以て、ザーリがひとりで村に何をしにゆくのだらうとも好きにいろ／＼と詮索したのであつた。そして昨日の出来事を思ひ浮べながら町の方へ足を運ぶ間に、たうとうたしかな見當をつけたのである。が、それはたゞただ怨恨と無益な悪意とからであつた。そしてこの疑惑がはつきりした形をとるや、彼はすぐに、ゼルドヴェーラの街の真中から村へとつて返し、先づ娘を捜したが、家の中にも庭にも、まはりの籬の中にも見つからなかつた。彼は益々募りゆく好奇心を胸に抱いて畑に駆け上つてみた。と、

そこにヴレンヒエンが日頃野菜をとつてくる籠だけがあつて、彼女の姿は何處にも見えなかつた。そこで今や隣の麥畑のまはりを窺つてゐると、そこへ子供たちが出てきてびつくりしたのであつた。

ザーリもヴレンヒエンも、化石したやうに立竦んでゐた。マルチもはじめ、そこに立つて、鉛のやうな蒼白な顔をして、さも憎々しげな眼付でちつと睨みつけてゐたが、やがて、もの狂はしい身振りをし、口汚く罵り出したかと思ふと、忽ち怒り猛つて、今にも絞め殺しさうな權幕で、若者に向つて掴みかゝつて來た。ザーリはひらりと身をかはして二三步後に引きさがつた。と、この老人は、ザーリの代りに顫へてゐる娘を捉へて、いきなり耳打を喰はせた。あの赤い花冠がとんだ。すると、老人は娘の髪の毛を手に絡んでぐん／＼引きすつた。そしてなほもひどいめにあはせようとするその有様を見て、ザーリはもう黙つてはゐられなかつた。彼は眞赤になつて亂暴者にとびかゝつた。そして無意識に拾ひ上げた石を以て、半ばはヴレンヒエンに對する心配から、半ばは短氣から、いやつといふほど年寄の頭を殿りつけた。マルチははじめよろ／＼とよるめいたが、それはちよつとの間ですぐに氣が遠くなつて石堆みの上に倒れ、悲鳴をあげるヴレンヒエンも共々にひきたふした。ザーリは更に少女の毛髪を喪心した男の手から解きはなして、少女を起した。それから彼は途方に暮れて、惘然と、さながら立像のやうにつゝたつてゐた。少女

は死んだやうに横たはつてゐる父親を見たとき、みる／＼うちに蒼ざめてゆく顔を両手で蔽ひ、身顛ひしていつた。

「あなたがおち殺したの？」

ザーリは無言のまま首肯した。と、ヴレンヒエンが叫んだ。

「あゝどうしよう！ わたしのお父さんよ！ 可哀さうに！」

彼女は物狂はしく父親の上に身を投げかけ、その頭を抱きあげてみたが、血が流れてゐる氣勢もなかつた。彼女は頭をまた下におろした。ザーリは失神した男を真中に、彼女と反対の側に腰を下した。そして二人は墓場のやうに黙りこんで、堅くなつて手も動かさず、生氣のない顔をちつと見つめ合つた。が、ザーリはちつとしてゐられなくなつていつた。

「でもすぐ死んじまう筈はないよ。大丈夫まだ／＼おしまいぢやないよ！」

ヴレンヒエンは雛嬰粟の花弁を一つ撿つて蒼白になつた唇の上においた。すると、それがかすかに動いた。

「まだ息があるわ」ヴレンヒエンは叫んだ。「ちや村にかけていつて、助けを呼んできて頂戴！」

ザーリがとび上つてかけ出さうとすると、ヴレンヒエンは後ろから手をさしのべて呼び戻した。

「でも一緒に歸つてくるのおよしなさいね。それからどうしてかうなつたのか何もいはないで

ね。わたしも黙つてゐるから、訊かれても何もいはないわ！」

彼女はかういつた。そして途方に暮れてまごついてゐる哀れな若者の方に顔を向けた。彼女の顔には悲痛の涙がいつばい流れてゐた。

「こつちへきても一遍接吻して頂戴！ いゝえ、行つて頂戴、行つて頂戴！ もうだめだわ、永久にだめだわ、わたしたちは一緒になれないわ！」

彼女はザーリを押しやつた。彼は押しやられたまゝに村の方に走つて行つた。と、彼は何處の子供か知らない子供に出あつたので、近所の人を呼んできてくれと頼んで、何處にその人たちが行つたらいいか、どんなに急いでゐるかなど詳しく話した。それから彼はがっかりしてそこを立ち去つて、夜ぢゆう森の中をうろつきまはつた。翌朝畑に忍んでいつて、その後の様子を探つてみた。と、早起きの百姓たちの話によつて、マルチはまだ生きてゐること、だが氣が變になつてしまつたこと、そして一體どうしてかういふことになつたのか誰も知らないんだから實に不思議だと云ひ合つてゐることなどを知ることが出来た。そこで彼はやつと町に歸つて来て自分の家の暗い片隅に隠れた。

ヴレンヒエンは彼との約束を守つた。いくら訊いても、父があゝなつてぶつ倒れてゐるところ

に偶然行き合せたのだといふことの他何も云はなかつた、そして父親は翌日、無論無意識でゝはあつたが、また元氣よく動きだして呼吸も恢復したし、それに誰も苦情を持ち込んで来るものもなかつたので、彼が酔つてゐて石の上に仆れたのだといふことにきめこんで、この話はその儘にされてしまつた。ヴレンヒエンは熱心に父親の看病に従つた。醫者の許に薬をとりにつくか、自分自身のために粗末なスープでも拵へるときの他ちつともその傍を離れなかつた。

彼女は夜も晝も起きてゐなければならなかつたが、殆んど何も食べなかつたし、また他に誰も手傳つてくれる人もなかつたのである。そのうちにもう病人は物も食べれば、ベッドの中ではかなり元氣にもなつたが、意識を恢復したのは殆ど六週間目であつた。併し今恢復した彼の意識は、もとの意識ではなかつた。病氣の恢復につれて言葉數の多くなればなるほど、彼が白痴になつてしまつたこと、しかも極めて不思議にさうなつたことが愈々明らかになつた。彼はあの出来事をしたとぼんやり、それもあまり自分に關係のない何か大變面白いことでも思ひ出すやうに思ひだして、しよつちゆう白痴のやうに笑つて、上機嫌だつた。まだベッドに横たはつてゐながら、彼はいろんな馬鹿げたとりとめもない常談や思ひつきをいつたり、顔を歪めてみたり、或はまた黒木綿の先きの尖つた帽子を眼深に、鼻も隠れて、その隠れた鼻が棺布で蔽はれた柩のやうに見える位に深くおろしたりした。蒼白く面やつれのしたヴレンヒエンは父親のたはごとくに辛抱強く耳を

貸しながらも、以前の兇暴にもましてこの哀れな娘を苦しめる愚かしい舉動に涙を流した。それでも時々、老人が何かあまりをかしいことをすると、彼女は心配しながらも聲を立て、笑はずにはゐられなかつた。彼女の壓へつけられた本性が、張つた弓のやうにいつも面白いことにとび上らうと用意してゐたからではあるが、その後の悲しさはまた一入であつた。併し老人が起き上ることが出来るやうになつたときには、もう手のつけやうがなかつた。愈々白痴になりきつて、笑つたり、何を捜すのか家のまはりをぐる／＼歩いたり、或はまた日向に腰を下して舌を出すか、隠元豆に向つて長い談議をはじめるのであつた。

それと同時に、以前の財産の僅かの残りも失はれて、家政の紊亂はその極度に達し、果てはずつと前から抵當に入れてあつた家と最後の畑とが裁判上の手續を以て賣却されることになつた。といふのはマンツの二つの畑を買ひとつた農夫が、マルチの極度の零落と病氣とを利用して、あの石堆みの場所に關する古くからの訴訟を簡単に決定的に片づけてしまつたのであつた。かくて訴訟に敗けたマルチの家は滅茶々になつてしまつたが、白痴の彼はもう何を知る由もなかつた。競賣が行はれた。マルチは、教區の世話によつて、同じやうな哀れな痴人のために設けられた瘋癲院に公費で容れられることになつた。病院は郡の一番大きな町にあつた。健康で食慾の盛なこの白痴は、十二分の食事を喰べさせられた上で、牡牛をつけた小さな車に乗せられた。これを

ある貧乏な農夫が町に曳いていつて、一時に一袋か二袋の馬鈴薯を賣つてこようといふのであつた。ヴレンヒエンも生きながら墳墓にゆくこの最後の旅立を送るために、父親により添うて車に乗つた。それは悲しい悼ましい旅立であつた。併しヴレンヒエンは、まめに父親に氣をつけて、何一つ不自由させなかつた。この不幸な男が巫山戯ちらして、人々が袖引き含つて眼を注いでも、ごとく揺れてゆくその車のあとを追ひかけてきても、彼女はそれに見向かうともしなければ、くよくよししたりすることもなかつた。

たうとう彼らのはあの大きな建物に着いた。そこでは長い廊下も、前庭も、氣持のいゝ庭も同じやうな痴人の群でいっぱいだつた。彼らはみんな白い短衣を着、愚鈍な頭の上には丈夫な革の帽子を冠つてゐた。マルチもすぐ、ヴレンヒエンの前でこの着物を着せられた。と、彼はそれを子供のやうに喜んで、唄をうたひながら踊りまはつた。

「今日は、皆さん！」彼は新しい仲間たちに呼びかけた。「これは結構なお屋敷をお持ちですなあ！ ウレンゲルや、お歸り、そしてお母おつかにいな、俺はもう家にや歸らないつてな。此處が氣に入つた！ あゝ愉快だ！ 狷はりねずみが籠を越えたぞ、俺は鳴くのをきいたんだ！ おう、お娘さん、年寄を接吻しなさるなよ、接吻は若い男に限りますぜ！ 小川はみんなラインに注ぐわ、棗の眼玉をもつてな、そりやさうしたもんだて！ ヴレーリイや、もう歸るのか？ お前は棺壺の

中の死人のやうな顔をしてるぢやねえか、だが俺は嬉しいんだ！ 牝狐めが畑でハレオ、ハレオつて鳴いてゐらあ！ 悲しいんだな！ ハハア！」

監守が靜かにするやうにといつて、彼を手輕な仕事に連れていつた。

ヴレンヒエンはそこを去つて車を捜しに出ていつた。彼女は車の上に腰かけ、パンを取りだして食べた、それから眠つた。が、いつの間にか百姓が、村へと車を急がせてゐた。夜になつてやうやく村に着いた。ヴレンヒエンは家に歸つた。が、その家も、彼女の生れたその家も、もうあと二日しかゐられないのだつた。そして今生れてはじめてたつた獨りでその中にゐるのだつた。まだ有つてゐたコーヒの最後の残りを煮ようと火を起して、それから竈の上に腰を下した。しみんと心細さが身に迫つて來た。彼女はたゞ一目なりともザーリに會ひたいと身も細るほど胸を焦した。そしてひたすら彼のことを想ひ耽つた。悲哀と心痛とは彼女の憧れを煽り立てるばかりだつた。そしてその憧れはなほ一層心痛を深めるのであつた。かうして彼女は兩手で頭を支へたまゝちつと坐りこんでゐた。と、誰かゞ開放しになつてゐた戸口から這入つてきた。

「ザーリさん！」

ヴレンヒエンは顔をあげるや、いきなりかう叫んで、彼の首に嘔りついた。それから二人は驚きの眼をみはりながら互ひに顔を見入つて叫んだ。

「なんて悲しい顔をしてゐるんだらう！」
 ザーリもヴレンヒエンに劣らず色蒼さめ、面寝れて見えた。何もかも忘れて、ヴレンヒエンは、
 彼を籠の上に、自分の傍にひきよせていつた。

「病氣だつたの？ それともあなたもやつぱりひどいめにおあひになつたの？」
 ザーリは答へた。

「いゝや、僕はどこもわるくはないよ。お前が戀しい病氣の他はね！ 僕んところは今なか／＼
 工合がいゝんだ。父親は他處の奴らからまきあげてるんだが、僕の見るところぢや賍品買ひにな
 つちやつたらしいね。だから今のところしばらく、これがつゞいて、とんだことでしまひになる
 までは、僕の店は大繁昌さ。それにお母さんがいくらかでも儲けたいつていふ浅間しい慾心から
 それを手傳つてるんだよ、そしてこんなよくないこともよく氣をつけてうまくやればなか／＼面
 白く有利にやつてゆかれるものと思つてるんだ！ 僕にはどうつて訊きもしないし、自分もそん
 なことにあんまり氣を使ふこともできなかつたんだ。夜も晝もたゞお前のことばかり想つてるん
 だから。いろんな無宿者がうちに出遣入りするんで、お前のところでどんなことがあつたか毎日き
 いてゐた。それをきいて親父は小さな子供のやうに喜ぶんだ。お前のお父さんが今日病院に送ら
 れたつていふことも、もうきいたよ。だから今頃はお前ひとりゐるだらうと思つて、會ひにきた

んだよ！」

ヴレンヒエンも、つゞいて、苦しかつたこと、惱んだことをすっかり彼に訴へた。併しザーリ
 が傍にゐて嬉しくてたまらなかつたので、まるで大きな幸福の話をするやうに輕いうちとけた口
 調だつた。そのうちに彼女は暖かいコーヒをどうかかうか皿いつばい拵へて、それを是非一緒
 に飲まうと愛人にせがんだ。「それぢや明後日はこゝを立ち退かなきゃならないんだね？」
 ザーリ
 がいつた。「さうしたらお前の身體はどうなるんだらう？」

「そりやわたしにもわからないわ。奉公でもしなけりや——。そして世間に出てゆかなきゃな
 らないんですわ。けれどわたし、あなたと別れちや、とても辛抱出来ないわ。でもあなたと一緒
 にはなれないのね、他のことは何もなかつたとしても、お父さんをぶつて馬鹿にしておしまひに
 なつたことだけで！ このことはいつまでもわたしたちの結婚の禍の基になるでせう。そしてわ
 たしたちには決して苦勞が絶えないでせうよ、決して絶えないでせうよ！」

ザーリは溜息を吐いていつた。

「僕ももう度々兵隊にならうか、それとも他處へ行つて召使に雇はれようかつて考へたよ、だ
 がお前がこゝにゐる間は、この土地をはなれることができないんだ。もしもはなれたらそれが死
 にしてしまふだらうよ。不幸せのために、お前に對する僕の愛が益々強く、切なくなつてきて、何

だか僕の生命が危くなつてきたやうだ！ こんなことは僕は夢にも思はなかつただけけれど！」
 ヴレンヒエンは男の顔を愛しげに微笑みながらちつと見入つた。彼らは後ろの壁に凭れて、もう何もいはないで、互に眞面目に愛し愛されてゐるといふ、すべての苦しみを超越した幸福な感じに浸つてゐた。そしていつしか二人とも居心地のわるい竈の上で、枕もなしに安らかに寝入つてしまつた。搖籃の中のふたりの子供のやうにすやくと。

夜があげかけた。ザーリが先きに目をさました。彼はできるだけそつとヴレンヒエンを揺り起した。併し彼女は正體もなく寐込んでゐて、いくら揺り動かしてもたゞ凭れかゝるばかりで、なか／＼、眼が覺めなかつた。そこで彼は彼女の口に激しく接吻した。と、ヴレンヒエンはとび起きて、眼をぱつちり開いた。そして彼を見て叫んだ。

「あら！ わたし今あなたの夢を見てゐたのよ！ あのね、わたしたちの結婚式で一緒に踊つてる夢なの、長い／＼間ね！ そして幸福で、さつぱりした身装で、何一つ不足はないのよ。しまひにわたしたちは接吻しようと思つて一生懸命にあせるんだけど、しよつちゆう何かと引きはなしてしまふの。ぢやわたしたちの邪魔をしたのはあなただつたのね！ でもあなたがすぐこゝにゐて下さつて、うれしいわ！」

彼女は堪らなさうに彼の首に抱きついて、まるでもう離れないつていふふうには、止め度なく接吻した。

吻した。

「そしてあなたはどんな夢をごらんになつて？」

ときいて、彼女は彼の頬や顎を撫でまはした。

「僕の夢はね、僕が森の中の長い道を何處までも何處までも歩いてゐると、お前が僕の前をしよつちゆう同じやうに遠くはなれて歩いてゐるんだ。そして時々僕の方を振りかへつては手まねきして笑ふんだ。と、僕はもう天國にゐるやうな氣がして——。それつきりさ！」

彼らは、すぐ戸外につゞく、開放しの勝手口に出た。そして互に顔を見合せた時、ぶつと吹き出さずにはゐられなかつた。といふのは、眠つてゐるとき互に凭せかけてゐたヴレンヒエンの右の頬とザーリの左の頬とが押しあつたゝめに眞赤に染まつてゐるのに反して、片方の頬の蒼白さが冷たい夜氣のために一層ひどくなつてゐたのであつた。彼らは互に、冷たくて蒼白い方の側も赤くしようと思つて、やはらかに擦りはじめた。新鮮な朝の空氣、あたりに立罩めてゐる露氣を帯びた靜かな平和、若々しい曙の光、それらはすべて二人の心を晴れやかにし、我れを忘れさせてしまつた。殊にヴレンヒエンには樂天主義の愉快な靈が宿つたかのやうに見えた。

「明日の晩はわたしはこの家を出ていつて、他の宿を探さなきやならないのね。でもその前に一度、たつた一度でいゝからほんとに面白く遊びたいわ、あなたとよ。何處かであなたとほんと

「ふたりが死ぬなら、それが一番いゝんだけどなあ！」

ザーリがいつた。彼らは悲しげに、さも辛さうに別れの抱擁をした。併し、二人が再び腕を解いたときは、明日の日の確かな期待の中に互に嬉しさうに微笑み交はした。

「でもあなた何時頃いらして？」

も一度ヴレンヒエンがいつた。

「おそくも十一時頃。ちやんと揃つてお午食を食べようよ！」

「嬉しいわ！ ちやいつそのこと十時半にはいらつしやいよ！」

併しザーリがもう歩きだしてしまつてから、彼女はも一度彼を呼び戻して、急に前と打つて變つた、がっかりした顔を見せた。

「でもだめだわ！」彼女はさも悲しさうに泣きながらいつた。「わたしいゝ靴がないんですもの。昨日もこのひどいのを穿いて町に行かなきやならなかつたのよ！ わたし靴なんかとても買へないわ！」

ザーリは當惑してつゝ立つてゐた。

「靴がないのか！ それぢやそれを穿いてゆくより仕方がないだらう！」

「いやあよ！ こんな穿いてわたし踊れないわ！」

「わたしお止めしないわ、ヴレンヒエンは顔を赧らめながらいつた。「だつてわたし、明日あなたと踊れなかつたら死んでしまひさうなんですもの。」

だ！」

「でもお父さんから貰つてらつしやるんぢやないでせうね、あの——あの盗んだのを？」

「うゝん、安心おしよ！ 僕はまだ銀時計を賣らすにとつて置いたから、あれを賣つちまふんだ！」

「いゝさ！」ザーリがいつた。「いくらか僕がもつてくるよ！」

「明日は此處からあんまり遠くないところで開基祭があるのよ。しかも二ところよ。そこならわたしたちをよく識つてゐないし、氣をつけもしないわ。わたしあの川端で待つてるわ。あそこなら何方へでも氣に向いた方に遊びに行けるでせう、一度、たつた一度つきり！ あゝ、でもわたしたちお金がないわ！」彼女は悲しさうに附加へた。「これぢやどうすることもできないわねえ！」

「とにかく僕と一緒にいつて行つて、お前が何處に泊るかみよう。」ザーリがいつた。「踊りなんか、お前となら喜んで踊るよ。可愛い赤ちゃん！ でも何處でさ？」

に楽しく、思ひきり踊つてみたいわ。だつて夢で踊つてから、それがどうしても頭からぬけないんですもの！」

「さうかい、それぢや一つ買はなきやならないね！」
「何處で？ どうして？」

「なに、ゼルドヴューラにや靴屋が澤山あるよ！ お金は僕が二時間のうちに拵へるさ。」
「でもわたし、あなたと一緒にゼルドヴューラの町を歩きまはれないわ。それに靴まで買つちや、お金が足りなくなるでせう！」

「仕方がないさ！ それぢや僕が買つて、明日もつて来よう！」

「あらお馬鹿さんね、あなたが買つたのはあはないことよ！」

「それぢや古い靴を片方おくれよ、それとも——待つた、いゝこと考へた。僕が寸法をとつてゆかう、それなら面倒はないだらう！」

「寸法をとるの？ほんとにね、それにや氣がつかなかつたわ！ さあ、いらつしやい、わたし細い紐を捜してあげるわ！」

彼女はまた籠の上に腰を下し、スカートを少しつりあげて、靴を脱いだ。足はまだ昨日の旅行のまゝ白い靴下を穿いてゐた。ザーリは跪いて、可愛い足の長さや幅を細紐でまはして見て、寧ろ結び目を持へながら、自分でいゝと思ふだけ寸法をとつた。

「靴屋さん！」

ヴレンヒエンはかういつて、顔を赧くしながら陸まじげに彼を見下して笑つた。ザーリも矢張り顔を赧くしながら、ヴレンヒエンの足を必要以上に長い間しかと抑へてゐた。ヴレンヒエンは愈々眞紅になつてたうとう足を引き込めた。そしてまご／＼してゐるザーリの首をも一度強く抱きしめて、接吻し、それからやつと歸してやつた。

彼は町に歸ると、すぐに、銀時計を時計屋にもつていつた。時計屋は六七「グルデン」(譯者註、一「グルデン」は邦貨約一圓に當る)くれた。銀鎖の分も二三「グルデン」貰つた。そこで彼はすっかり金持になつたやうな氣がした。この年になるまで、まだ、一度にこれ程の金錢をもつたことがなかつたので。早く今日一日が經つて、日曜になつてくれるといゝな、今朝から計畫してゐる幸福をこれで買ふんだから——と、彼は考へた。たとひ明後日あさうがこれまでより一層暗い、頼りない日にならうとも、たゞもう待ち望んでゐた明日の歡樂のみが妙に強い光輝を放つのであつた。併し彼はヴレンヒエンのために靴を捜し歩いたので、時を消すのにさう苦痛は感じなかつた。何しろその仕事は彼が今日の日までにした仕事の中で一番楽しいものだつたから。彼は一軒一軒靴屋をまはり歩いて、ありつたけの婦人靴を並べさせた。そして最後に軽い上品な、ヴレンヒエンが今まで穿いたこともないやうな綺麗なのを買つた。彼はその靴をチョッキの下に隠して、日の暮れるまで肌身を離さなかつた。それどころか、ベッドにまで持ちこんで、枕の下に入れた。今朝

も早くから少女に會つたし、明日またあふ約束になつてゐたので、彼は安心してぐつすり寐込んでしまつた。併し翌朝は早くから起き上つて、貧弱ながらも晴着を着込んで、精いつばいにめかしはじめた。その様子に目をとめたのが母親だつた。もう長い間そんなに念入りに身支度したことの無い息子が、今日はまあどうしたことだらう、と不審に思つて母親は息子にその計畫を訊ねた。

「僕はまあ田舎を歩きまはつて、少し遊んで来る。」彼は答へた。「さうでもしないと、僕はこんな家の中にばかりゐたんぢや病氣になるから。」

「近頃はこれで、俺にはなか／＼面白い暮しなんだぞ。」父親は呟いた。「それにぶらつきまはるなんて！」

「まあ黙つておやんなさいよ。」併し母親はいつた。「屹度あれの身のためになりますよ、ほんとはあれの顔色つたら、ひどいんだもの！」

「歩きまはる錢はあるのか？ 何處から貰つたんだ？」老人がいつた。
「錢は要らない！」ザーリは答へた。

「ぢやー「グルデン」やらう！」かう答へて、老人はそれを投げてやつた。「村の料理屋にでも行つて、うんと散財してきな。村の奴らから俺らがこつちで貧乏してると思はれねえやうにな。」

「村になんか行きあしない。その金も要らない。それはしまつといってお呉れ！」

「いらなきや遣らねえや、あとで欲しくなつた時に困るくせに。つむじまがり奴！」

と、怒鳴つて、マンツはその銀貨をまた隠しに入れてしまつた。女房は併し、今日は何故とはなしに息子のことが妙に氣にかゝつて、涙ぐましかつた。彼女は息子に赤い縁のある大きな黒いミラノの頸布をもつてきてやつた。それは彼女の秘藏の品で、ザーリがすつと以前に欲しがつたものだつた。彼はそれを頸に巻いて、その長い端をひら／＼させた。彼はまた不斷はいつも折り返してゐた襯衣の襟を田舎者らしい矜持から、はじめて大人びて氣取つた襟子に、耳の上まで立てた。それから靴を上衣の胸の隠しに隠して、七時過ぎにはもう出かけて行つた。部屋を出るとき、妙な感情に襲はれて、いつになく兩親に手を差し伸べた。そして街路に出て、も一度自家の方を振りかへつて見た。

「つまり奴は何處かの女の尻でも追つかけようてんだぞ。」マンツがいつた。「さうこなくちならねえな！」

女房はいつた。

「おう神様！ あれがいゝ運にめぐりあひますやうに！ 可哀さうなあれの幸せになりますやうに！」

「さうとも〜！」亭主はいつた。「そりや間違つてねえよ！ てめえのやうな氣まぐれ女にでもひつかゝるやうな厄介なことになつたら、それこそ天から授かつた幸福でもんだらうよ！ さうすりや、勿論、可哀さうなあれのためにもなるさ！」——

ザーリは、はじめ、ヴレンヒエンを待合せようと思つて、川の方へ歩を向けた。が、途中で氣が變つて、まつすぐ村に行つた。十時半まではあまり長かつたので、家までヴレンヒエンを迎ひに。

「村の奴らがなんだ！」彼は考へた。「誰の厄介にもなりやしないし、俺はまつすぐなことをしてゐるんだ。こはい奴なんかあるものか！」

それから彼は不意打ちにヴレンヒエンの部屋に這入つていつた。と、意外にも彼女はもうすっかり身支度を整へて、お化粧もすまして、出かける時間を待つてゐた。たゞ靴だけがなかつた。併しザーリは少女をみて、ぼかんと口をあけて、部屋の真中に棒立ちになつてしまつた。それ程彼女が美しく見えたのであつた。彼女は紺麻の粗末な服を着てゐるだけだつたが、さつぱりしたその身装が、かへつてすらつとした彼女の身體にしつくり合つてゐた。その上に純白のモスリンの頸布を巻いてゐた、——これが彼女のすべての装ひだつた。鳶色の縮れ髪は大變恰好よく整へてあつて、いつもはあれ程亂れてゐる毛髪が、今日は上品に可愛らしく頭のまはりにたれてゐた。

ヴレンヒエンはもう何週間も殆んど戸外に出たことがなかつたので、それに心配のためもあつて、顔色が一層やさしく、そして透きとほる程だつた。が、その透きとほつた中に今は戀と喜びとがかはる／＼紅を注いでゐる。そして胸にはロスマリンや、薔薇や、美々しい翠菊アネモネのきれいな花束をつけてゐた。彼女は開放つた窓際にかけて、靜かに虔しく、すが／＼しく陽光の射し込んだ朝の空氣を呼吸してゐたのであつたが、ザーリの姿を見るや、肘まで露はに出した綺麗な兩腕を彼の方にさしのべて、叫んだ。

「まあよかつた！ こんなに早く、しかもこちらにきて下すつて。でもあなた靴を持つてきて下すつて？ ほんと？ ぢやわたし、それを穿くまで立たないわ！」

彼はその待ち焦がれられてゐた品を隠しから取り出して、欲しくて欲しくてたまらなさうにしてゐた美しい少女に與へた。少女は古いのを放りだして、新しいのを穿いてみた。それは大變よく足に合つた。そこではじめて、彼女は椅子から立ち上つて、身體を揺つたり、熱心に二三度あちこち歩いてみたりして、その履き心地を試してみた。それから彼女は長い紺色の服を少し引きあげて、靴飾りの赤毛の蝶結びをさも氣に入つたらしく見つめた。ザーリは、愛らしく興奮してはしやぎ廻つてゐる彼女の上品な、そして艶やかな姿を隣きもせずに見守つてゐた。

「わたしの花束を見てらつしやるの？」ヴレンヒエンが云つた。「綺麗なのを拵へたでせう？」

これはね、この何もかも荒れ果て、しまつた中でわたしがめつけた最後の花よ。こゝに薔薇が一つ、あそこに翠菊が一つつて工合に咲いてたんですけれど、かうして結むすへてしまふと、こんな荒れ果てたところから集めて来たんだとは思はれないでせう！ でも、もう出かける時分よ。庭には花はもう一つも無いし、家の中も空っぽなの！」

ザーリは周囲を見廻して、今はじめて、昨日までそこいらに残されてゐた、持ち運びのできるものが、すっかり持ち去られてゐたのに気がついた。

「可哀さうなヴレーリー」彼はいつた。「もうすっかり持つて去つてしまはれたのかい？」

「昨日ね。」彼女は答へた。「運べるものはみんな持つてつてしまつたの。でもわたしのベッドだけは残していつたわ。でもわたし、それもすぐ賣つちまつて、今お金をもつてるわ、ほら！」

彼女は新しい光つた「ターレル」の銀貨を二三枚隠しから取り出して、彼に見せた。

「これでね。」彼女はつゞけた。「孤兒院のお役人がね——そのお役人もこゝへ来たのよ——町に行つて奉公口を捜せつていつたわ、そしてね、今日すぐに出かけるつて！」

「だがこゝにももう何もないんだね。」ザーリは臺所を覗きながらいつた。「薪も、鍋も、庖丁もないんだね！ ちやお前、朝の御飯もたべなかつたんだね？」

「えゝ、わたし何もたべないわ！ 何か買つて来ようと思へば来たんですけど、わたしね、

お腹を空かしておいて、あなたと一緒にたんと食べやうと思つたのよ。わたしほんとにそれが樂しみなのよ。どんなに嬉しいかあなたにはわからないわね！」

「お前に觸さわることが出来さへしたら、僕の氣持がどんなだかみせてやりたいがなあ！」

「駄目よ、あなたはわたしのお糞くそりをみんな壊してしまふから。この花をちよつと大事にするだけで、可哀さうなわたしの頭も助かつてよ。あなたはいつもわたしの頭を壊しておしまひなんですもの！」

「ちやおいでよ、これから出かけるでしょう！」

「まだ駄目、ベッドが持つて去かれるまで待たなきやならないの、その後でわたし、この空き家を閉めきつて、もうそれつきり歸つてこないんですから！ わたしの包はね、ベッドを買つたおかみさんに藏かくつといつて貰うの。」

そこで彼らは向ひ合つて腰を下した。待たれた農婦はまもなくやつてきた。見るからに丈夫さうな、お饒舌のおかみさんで、若い者を一人、ベッドを擔がせるためにつれてゐたが、めかしこんだヴレンヒエンとその愛人を見たとき、眼と口を大きく開け、腰に手をつゝ張つて叫んだ。

「おや、ヴレーリー！ もうお前さんはうまくやつてるんだね！ お客様はおいでになるし。お前さんはまた、まるでお姫様のやうなお支度だね？」

「そりやねえ！」ヴレンヒエンは嬉しさうな微笑をみせながらいつた。「ちや、これ誰だか御存じ？」

「あゝ、わたしは多分ザーリ・マンツだらうと思ふけれど？ 山と谷とは一緒にならないつていふけれど、人間はね！ でもお前さん、氣をつけなさいよ、そしてお父つあんたちがどんなことになつたかお考へなさいよ。」

「えゝ、それが今は變つちまつてね。何もかもよくなつてしまつたのよ。」ヴレンヒエンは微笑みながら親しげにうちとけて、いや殆んど自分の身を卑下するやうに答へた。「あのね、ザーリはわたしのお婿さんなのよ！」

「お婿さんだつて！ お前さんは何をいふんだらう！」

「ほんとよ、そしてこの人はお金持なのよ、富籤で十萬「グルデン」あたつたの！ まあ考へてごらんなさいよ、おかみさん！」

かみさんは跳びあがつた。びつくり仰天して手を打つた。そして叫んだ。

「あらツ十萬「グルデン」！」

「十萬「グルデン」よ！」

ヴレンヒエンは眞面目くさつて斷言した。

「おどろいだねえ！ でも嘘だらう？ お前さんわたしを昇いでるんだらう？」

「それちや、お前さんの好きなやうになさいな！」

「それがほんとで、お前さんがこの男にお嫁入りしたら、お前さん、そのお金をどうするつもりかね？ 貴婦人にでもなる氣なのかえ？」

「さうよ、三週間のうちに式を擧げるは！」

「いゝ加減にしとくれよ、お前さんはほんとに憎らしい嘘吐きだねえ！」

「もうちやんと、ゼルドヴェーラに大きな庭と葡萄酒のある立派な家を買つてあるのよ。わたしたちが世帯をもつたら、おかみさんも屹度訪ねて頂戴ね、わたしあてにしてゝよ！」

「まあ、お前さんはなか／＼隅におけない娘だねえ！」

「どんなにいゝか來てみて頂戴ね！ いゝ珈琲を拵へて、バターや蜂蜜のついた上等の卵パンを御馳走してあげるわ！」

「ほんとに果報者だねお前さんは！ 屹度と行くから待つてゝおくれよ！」

かみさんはすつかり感じ入つた顔付をして叫んだ。口いつばいに唾を沸かして。

「おかみさんがまたお正午頃にきて、市場からの歸りてくたびれてゐなざる時にはね、濃い肉粥と葡萄酒をいつでも用意しとくれわ！」

「そりや結構だねえ！」
 「それから家で待つてゐなされる可愛いお子さんたちにお土産の糖菓子か白パンをあげずにはゐないことよ！」

「そりや全く待ち遠しいねえ！」

「いゝ頸布とか、絹ものゝ残りとか、おかみさんのスカートにつける綺麗な古リボンとか、新しい前掛にする布とか、そんないろくものものがきつと見つかるわ、二人でゆつくり出来るやうな暇の時に箱の中でも探してみたら。」

かみさんは踵でくるつと一まはりして、有頂天になつて笑ひながらスカートを揺つた。

「それから、御亭主が土地や家畜の商賣でいゝ仕事がありながら、お金が足りないといふやうなことでもあつたら、わかつてゐるでせう、何處へきたらいいか。わたしのザリーがね、少しばかりの現金なら何時でも間違ひつこなしに、喜んで融通してよ！ わたしにだつて仲のいゝお友だちに用だてる位の貯へはあることよ！」

この時かみさんはもうたまらなくなつた。感激しながらいつた。

「だからわたしはいつもさういつてたんだよ。お前さんは感心な、氣立のいゝ、綺麗な娘だつてね！ 神様がどうか永久にお前さんたちを幸せにして下さるやうに、そしてお前さんがわたし

につくして下さることにいゝ酬いがあるやうに！」

「その代りわたしもまた、おかみさんがわたしのことよく思つてゝ下さるやうにお願いしてよ！」

「そりやもう、いふまでもないことさね！」

「それからおかみさんの商ふものは果物だらうが、馬鈴薯だらうが、野菜物だらうがいつでも、市場にもつてゆく前に、先づわたしのところにもつてきてみせて頂戴ね、さうすれば信用の出来るほんとお百姓のおかみさんを手近にもつてゐる譯だから。わたしどんなに安心してゐられるかしのれないわ！ 他の人が買ふ値段には、わたしも喜んで買つてあげてよ。わたしがどんな性分だかおかみさんも知つてゐるでせう！ ほんとに、あゝしたらかうしたらといつてくれるものもなく、始終邸やしきの中ばかり籠つてゐて、それでゐてゐるんなものを買つたり整へたりしなければならぬ町の物持の奥さんと、大切なことや爲になることを何でも心得てゐる正直な田舎のおかみさんとがいつまでも仲よくしてゆくつてことほどいゝことはないのねえ！ それは楽しいときでも悲しいときでも、名付親になるときでも婚禮のときでも、子供の教育にも確信式にも、修業に出るときでも他處に行くときでも、萬事に都合がいゝわ！ それから不作や洪水のときでも、火事や暴風雨のときでも。でもこんなこと眞平だわね！」

「ほんとに眞平だよ！」

人の好いかみさんは歎息しながらかういつて、前掛で眼を拭いた。「なんてわけのわかつた考へ深い花嫁さんだらうね、お前さんは！ お前さんはきつと幸せになるに違ひない。もしさうでなかつたら世の中に正義つていふものがないのさね！ お前さんは容貌が好うて、綺麗好きで、おまけに利口で辛抱人で、何でも上手に出来る！ この村ぢゆう捜したつてお前さん位のもは他にありやしない。お前さんを貰つた男は、天國にゐるんだと思はなけりやならないね。さうでなかつたらその男は、よつほどのぼんつくだよ。第一、わたしが黙つてみたりやしないやね。いゝかい、ザーリさん！ ヴレーリイに屹度やさしくしておくれよ、でないよ、このわたしがとんと思ひ知らしてあげるから。ほんとにお前さんは果報者だよ、こんな薔薇の花を手折るなんて。」

「それぢや、この包をお約束通りもつていつて頂戴な、あとからとりにやりますから！ おかみさんに支障さへなかつたら、自分で馬車でとりに行つてもいゝわ！ そのときにはおかみさん、牛乳の一ぱい位はいやだつていやしないでせうね。それに添へる巴旦杏のお菓子位わたし屹度もつてゆきますから！」

「幸せな娘だよ！ その包をおだしな！」

ヴレンヒエンは、おかみさんが床敷を括つて頭の上のせたその上に、襦袢などの全財産をつ

めこんだ長い袋を載せたので、この哀れなかみさんは、頭の上にぐら／＼する塔を頂いたまゝ立往生してしまつた。

「こりや一度にや重過ぎるわ。」かみさんがいつた。「二度にしちやいけなかしら？」

「いゝえ駄目よ、わたしたちは今すぐ出かけなけりやならないの。随分遠方まで、身分のいゝ親類を訪ねて行くんですから。その親類つてばね、わたしたちがお金持になつたら早速訪ねてきたのよ。おかみさん、世の中つてかうしたものね！」

「ほんとだよ！ ぢやさやうなら、立派な暮しをしてゐなさつても、わたしのことは忘れないでね！」

百姓のかみさんは一生懸命に平均を保ちながら、頭の上に塔を載せたまゝ立ち去つた。その後から下男が随いて行つた。下男は以前は綺麗な繪の描いてあつたヴレンヒエンの寝臺を背負つて光を失つた星に蔽はれたその天蓋に頭をつゝ張り、天蓋を支へてゐる緻密な彫刻を施した前側の二本の柱を握つて、さながら第二のシムソンといふ恰好だつた。

ヴレンヒエンはザーリに凭れかゝつて、この一行の後を見送つてゐたが、そのさ迷うて行く殿堂が庭園にさしかゝつたときいつた。

「あれを庭の中に据ゑて、その中に小さな机と椅子を置いて、まはりに鼓子花の種をまいたら、

氣持のいゝ四阿になるわね！ その中に一緒にかけてみたくないこと？ ザーリさん！」

「あゝヴレリーイ！ 殊にその鼓子花が大きくなつたらね。」

「なんでわたしたちはぼんやり立つてゐるんでせう？」ヴレンヒエンがいつた。「もう何も心残りになるものはないのに。」

「ちや行かう、家を閉めておしまひ！ 鍵は一體誰にわたすの？」

ヴレンヒエンはあたりを見廻した。

「この槍にかけておきませうよ。これは百年以上もこの家にあるんだつて、よくお父さんがいつてたわ。今はこゝに最後の番人さんになつて立つてるんだわ！」

彼らは錆ついた鍵を、隠元豆のからだ古い武器の錆ついた巻柄にかけて、立ち去つた。併しヴレンヒエンは急に蒼ざめて、暫くの間、手で眼を蔽うた。で、ザーリは、ふたりが十二三歩遠ざかるまで、抱くやうにして行かねばならなかつた。が、彼女は振りかへつてみようとはしなかつた。

「はじめ何處へ行きませう？」

彼女は訊ねた。

「やつぱり終日面白く遊べる田舎の方へ行かうよ。急ぐのはよさうね、夕方になつてからだつ

て屹度踊り場はみつかるよ！」

「それがいゝわ！ 終日一緒にゐませうね。そして何處でも行きたいところへ行きませうね。でもわたしお腹が空いたわ、すぐどこかの村で珈琲を飲みませうよ！」

「無論さ！ とにかく急いでこの村を出よう！」

間もなく彼らは廣々とした野原に出た。その中を、二人は黙つて並んで歩いて行つた。それは美しい、九月の日曜日の朝であつた。空には一片の雲もなく、霞の薄衣を纏つた丘や森は四圍の風景を一層神秘的な、嚴かなものに見せてゐた。鐘の音が響いて来る。教會堂の鐘の音があちらから、こちらからも。裕福な町の調和した重々しい鐘の音、寒村の騒々しい二つの小さな鐘の音、戀人同志はどうなることやらわからぬこの日の終りのことも打ち忘れて、まるで正式に結婚した二人の幸せ者のやうに、さつぱりした身装をして、自由に、今日の日曜日に出かけて行かれる、といふ胸も高鳴る欣び、えもいはれぬ喜びにたゞもう只管に全身を委ねてゐた。日曜日の静けさの中に消えてゆく物音や遠方の叫び聲などが一つ一つ、彼らの魂を揺がして鳴り響いた。戀といふものは極めて遠いもの、極めて無關係なものをも反響させて、特種な音楽を奏でる一つの鐘なのだから。

空腹ではあつたが、隣村までの半みちが、彼等にはほんの猫の一飛び程にしか思はれなかつた。

そして、彼らはためらひながら村の入口のとある料理屋に這入つた。ザーリは上等の朝食を誂へた。それが出る迄の間、彼らはこゝともいはせないで、この大きな綺麗な客間の、如何にも行届いた、そして親しみのある商買振りをちつとみてゐた。主人は同時にパン焼きだつたので、丁度今焼けたてのパンが家ぢゆうに香ばしい匂ひを漂はせてゐた。またいろんな種類のパンが籠に積込まれて、運ばれた。それは教會からの歸りに人々がこゝで白パンを買つてゆくか、朝の茶を飲んでゆくかしたからだつた。もの優さしい綺麗なかみさんは、子供たちに、ゆつくりと深切に着物をきせてやつてゐた。その中に、一人の子が手離されると、すぐに馴々しくヴレンヒエンの傍に走つてきて、着物の綺麗なところを見せたり、自分の嬉しい、そして自慢になるものゝことをあれやこれやと話した。

さて香のいゝ濃い珈琲が運ばれると、ふたりはまるで客に招かれてきたかのやうに畏まつて卓に着いた。でもまもなく元氣を出して、といつてどこまでも度ましやかさを失ふことなく、嬉しさうに囁き交した。咲きそめた花のやうなヴレンヒエンには、上等のコーヒーや、濃いクリームや、出来たてのまだ温かいパンや、上等のバターや蜂蜜や、卵菓子や、その他いろく並べられた御馳走がどんなに美味かつたことであらう！ その上ザーリの顔を見てゐられるので一層美味かつた。彼女はまるで一年間も断食してゐたかのやうに喰べたほどだつた。それにまた上品な食器や

銀の珈琲匙が嬉しかつた。何故なら、二人を良家の子女と見込んで、丁寧にもてなさなければならぬと思つてゐるかみさんの心遣ひがそこに見られたから。その上かみさんは時々自分も彼らの傍にやつて来て、もてなし顔に話した。と、二人はてつきりそれらしい返事を與へたので、それがすつかりかみさんの氣に入つてしまつた。無邪氣なヴレンヒエンはいゝ氣持になつてしまつて、また戸外に出て戀人とふたりきりで草原や森の中を歩き廻つた方がいゝか、それとも鄭重にもてなしてくれるこの客間に居て、ほんの二三時間だけこの立派な場所を我が家のやうに空想してゐた方がいゝか、どちらにも愛着を感じて迷はざるを得なかつた。併しザーリが、これからまだ豫定の大切な道中をつゞけなければならぬかのやうに、きつぱりと、さも忙がしさうに出發を促したので、それがヴレンヒエンの選擇を容易くしてくれた。かみさんと亭主は彼らを戸口まで送つて、持合せの少ないことは見え透いてゐたが、たゞその振舞の上品なばかりに、極めて懇ろに別れを告げた。すると貧乏な若者たちもこの上もなく上品な態度で別れを告げて、塵揚にそこを出ていつた。

それから、凡そ數哩も續いてゐる櫛の林に這入つてからも、やつぱり、喧嘩や貧乏の充ちてゐる零落した家の子供ではなくて、楽しい希望の中を彷徨ふ良家の子供のやうに、楽しい夢に耽りながら、料理屋を出たときと同じ態度で並んで歩いた。ヴレンヒエンは妙に沈んで、花を飾つた

胸にその頭を垂れ、両手を慎み深く着物の脇にあて、平らな、じくした森の道を歩いて行つた。それにひきかへ、ザーリは身體を眞直にして、どれを伐り倒したら一番儲かるだらうか、と考へる農夫のやうに、聳え立つた榎の木をちつとみつめながら、大股に、さも思慮深さうに歩を運んだ。遂に彼らはこの空しい夢から醒めて、互に顔を見あはせた。そして自分たちが料理屋を出たときと同じ態度でそのまゝ歩いてゐるのに氣がついて、ぼつと顔を染めて悲しさうに頭を垂れた。併し青春に道徳はない、森は緑に、空は蒼く、そして彼らはこの廣い世界にたゞふたりきり……。そこで彼らはすぐに氣を取り直して、再びこの楽しい感情に身を委ねた。だが、彼らはもうさう長くふたりきりではゐられなかつた。美しい森の道は、教會から歸つて後の時間をふざけたり、歌つたりしながら過ぎてゐるそゞろ歩きの若い人たちの群や、二人づれの人たちやで賑はつたのであつた。何故なら、この美しい森の道は村人たちの遊歩場だつたから——。田舎の人たちも都會の人たちと同じやうに特に選んだ遊歩場や公園といつたやうなものをもつてゐる。たゞちがふところは、田舎の方が維持費もかゝらず、且一層美しいといふことである。彼らは日曜日といふ特別な氣持で、花盛りの野や、實つてゐる畑の間を散歩するばかりでなく、特に森の中や雑草の生えてゐる崖に沿うて歩く。そしてこゝでは爽かな見晴らしのいゝ丘に、あそこでは森の端に腰をおろして、彼らの唄を響かせ、美しい自然のえもいはれぬ感觸の中に心を浸す。か

うしたことを彼らが明らかに、何等の後悔をも伴はずに享樂してゐるところをみると、彼らがその有用といふことを論外に置いて、自然を愛する純情をもつてゐることが推察される。若い者も、娘時代の古馴染の道をたづねる老婆たちも田舎道を行く時は、常に、何かしら青いものを撈り取る。働き盛りの頑丈な農夫さへも、森を通るとすぐに細い管を切りたがる。そして先きの方だけに緑の房を残して、その他の葉は悉く撈つてしまふ。それからこの管を笏のやうに前に立て、持つて行く。事務室か役所に這入るときは、その管を片隅に恭々しく立てかける。併し極めて大切な用件をすませた後も、鄭重にとりあげて、損はずに家にもつて歸ることを決して忘れない。そして家ではじめて、管を滅茶々々にしてしまふことが一番小さな男の子に許されるのである。

ザーリとヴレンヒエンはこの多勢の散歩の人たちを見た時、心竊かに喜んだ。そして自分たちも二人連れなのを嬉しく思つた。が、こつそり森の狭い横道に外れて、深い静寂の中に消えて行つた。そして、氣に入つたところがあると立ち止り、また急いで行つてはまた休んだ。清らかな空に一片の雲もないやうに、このとき彼らの胸には心配の影だになかつた。自分たちが何處から來たのか、また何處へ行くのか、それさへも打ち忘れてゐた。しかし上品に行儀よく振舞つてゐたので、こんなに大はしやぎにはしやいで騒いだりしたにも拘らず、ヴレンヒエンの可愛らしい質素な身なりは朝の儘で少しも汚れてゐなかつた。ザーリはこの散歩の途中では、二十歳はにもう

間のない田舎の若衆か、零落した居酒屋の息子といふよりも、寧ろ二つ三つ若い、立派な教育を受けた青年であるかのやうに振舞つた。そして彼が優しさと心遣いと尊敬とを以て絶えず、愛らしい快活なヴレンヒエンばかり見守つてゐる様子は、殆んどをかしいくらゐだつた。しかしそれも無理はない、可憐な一人は彼らに與へられたこの一日の間に戀のあらゆる形式と氣分を経験し、失はれた青春の日を取り返さねばならなかつたばかりでなく、生命を犠牲にして情熱的な結末に急がねばならなかつたから。

かうして彼らは處々方々を歩き廻つた。そしてまた空腹になつた。そこで、とある人目を離れた蔭深い山の嶺から、陽光に輝く村を眼下に見た時は嬉しかつた。その村で午食をした、めることにして、急いで下りて行つたが、村にはひる時はまた前の村を出たときと同じやうに行儀よく取りすましてゐた。途中では彼らを知つてゐさうな人には誰にも出會はなかつた。何故なら、殊にヴレンヒエンはこゝ二三年の間まるで、人中に出たことがなく、他の村などへはなほさら行つたことがなかつたから。で、彼らは何か急用があつて旅をしてゐる良家の快活な夫婦になりすましてゐた。村のとつゝきの料理屋に這入つて、ザーリは食事をたつぷりと誂へた。特別の食卓には二人のために、日曜日らしく上等の卓掛けがかけられた。彼らは、また黙りこんで、おとなしくその側にかけて、ニス塗りの胡桃材をきれいに張つた壁や、やつぱり同じ用材の田舎らしい、

併しよく手入れが届いてきら／＼光つてゐるブツツフエや、眞白い窓掛けを見まはしてゐた。と、かみさんが馴々しくやつてきて、きりたての花を盛つた花瓶を卓の上においた。

「スープがくるまで、彼女はいつた。」宜しかつたら暫らくこの花でお目に御馳走をしておやんなさい。こんなことをお訊ねしちやなんですけれど、お見受けするところ許嫁同志で、屹度町にいらつしやるんでせう？ 明日式をおあげにならうつていふんで？」

ヴレンヒエンは赤くなつて、顔をあげることも出来なかつた。ザーリも何とも答へなかつた。と、かみさんは續けていつた。

「そりや、あなたがたは無論お二人ともまだお若いけれど、若いうちに結婚すると長生きするつて、よくいふぢやありませんか。それにあなたがたは第一お容貌がよくて、御様子が立派でいらつしやるんだから。何もおかくしになるには及びませんよ。地道な人たちは、あなたがたのやうに若くて一緒になつて、精だして、お互に眞面目にしてゐれば、何かしら出来るもんです。でも無論精ださなきやなりませんよ。時といふものは短いやうでまた長いもので、そりやいろんな日がありますよ、いろんな日がね！ でも家持ちさへよければ、世の中つてもものはなか／＼いゝもんで、またたのしいもんですよ？ 悪く思はないで下さいよ、あなたがたのお顔を拜見して嬉しんですから。ほんとに綺麗なお配偶だこと！」

そこへスープを運んで来た給仕女がかみさんの言葉尻を耳にはさんで、みるから華やかな道を歩いてゐるらしいヴレンヒエンの方を流し目にみやつた。常日頃から彼女自身結婚したがつてゐたので。それから給仕は隣りの部屋に行つて、自分の不愉快をさらけだして、そこで何か用をしてゐたかみさんに、店にきこえよがしの大聲をあげていつた。

「ありややつぱり正直正銘の乞食娘だよ。御都合なりに町に駈け出して結婚するんだよ。一文なしで友だちもなけりや、嫁入仕度もなく、貧乏して乞食になるより他何の見込もないくせに！ 短衣をひとり着ることもできなけりや、スープも拵へられないあんな娘が結婚してどうなるんだらう？ あーあ、わたしやあの綺麗で若い男が氣の毒でならないよ、あのやくざな娘つ子にきれいにまるめられてゐるんだからね！」

「しつ！ おだまりな、憎まれ者！」かみさんがいつた。「あの人たちの迷惑になるやうなことはだまつちやゐられないよ！ ありやきつと工場のある山の方のちゃんとした人たちだよ。着物は粗末だけれど、さつぱりしてゐるし、好きあつて働きさへすりや憎まれ口ばかりきくお前よりやすつとよくなるよ！ お前こそもつと愛想よくしないと、いつまで経つたつて、連れに来る人なんかありやしないよ、この酢徳利！」

かうしてヴレンヒエンは、わけのわかつたかみさんの好意ある言葉と激励の言葉。腹立たしさ

から戀人を褒めたり氣の毒がつたりする意地悪の、結婚したくてならない女の嫉妬。戀人の傍でたべる美味しい午食など、婚禮のために旅をしてゐる花嫁のあらゆる悦びを味ひたのしんだ。彼女の顔は赤い石竹のやうに燃えた。胸がどきどき鳴つた。が、それでも彼女は美味さうに食べた。り飲んだりして、側で給仕をしてゐる女にも却て一層やさしくしてやつた。だがその間も、ザリーの顔をやさしく見やつた、囁きあふことを止めなかつた。ザリーの胸も何となく亂されてきた。かうして彼らはこのたのしい幻覺から醒めるのをためらひ怖れるかのやうに、長い間樂しさに食卓についてゐた。かみさんが後食に甘いパン菓子をもつてきたので、ザリーは更に上等の強い葡萄酒をたのんだ。それをほんの少しばかり飲むとヴレンヒエンは、もう焼きつくやうな血管の流れを感じた。しかし彼女は用心して、ほんの時々舐めるだけにして、ほんとの花嫁のやうに淑やかに、羞かんでゐた。彼女は半ばはいたづら氣から、またどんなふうにするものかやつてみやうとする氣持からこの役を演じたのだつたが、半ばは實際さうした心持になつてゐたのであつた。で、心配と熱愛とのために胸が張りさけさうになつたので、何だかこの部屋の中が息苦しく感じられて、遂に戸外に出やうといひだした。

彼らは何だか、二人きりでこのまゝ横道にそれて人のゐないところに行くのを恐れてゐるやうだつた。といふのは、彼らは別に相談した譯でもないのに本通りを人々の真中を分けて歩いて、

煙突掃除夫になつて覗いてゐる。開放つた窓際には小さい眞赤な口の、頬のまるく肥つた小人たちが抱きあつてゐる。手の速い實際家の畫工が一つの點で同時に二つの口を拵へたので、かう互に溶けあつてしまつたのであらう、二人はそれこそほんとに接吻してゐる。黒い小さい點々が生々した眼を現はしてゐる。薔薇色の戸には併し次のやうな詩句が讀まれた。

おはいりなさい、おう愛しの君よ！

けれどはつきりいつときますが、

こゝちや接吻した後で

勘定するんですよ。

愛しの君のいふことにや、おう戀人よ！

妾はなんにもこはくはない

よくよく考へてみましたが

妾の幸福は貴方なんです！

右にも左にも振りむかうとはしなかつたから。併しこの村を抜けて、開基祭のある隣り村さしてゆく途すがら、ヴレンヒエンはザーリの腕に縋つて、顛へ聲で囁いだ。

「ザーリさん！ 何故わたしたちは一緒になつて、幸福になれないんでせう？」

「僕にも何故だかわからないね！」

と答へて、彼は、草原の上に顛へてゐる軟かい秋の陽光にちつと眼を据ゑた。そして自分を抑へ、變に顔を歪めないではゐられなかつた。彼らは接吻しやうと思つて立ち止つた。と、人々の姿が見えたので、やめてまた歩きだした。

開基祭の行はれる、教會の在る大きな村はもう大變な賑ひだつた。村の若い衆がもう正午頃から踊りはじめたので、その舞踏場に當てられた立派な料理屋からは華かな音楽が鳴り響いてゐた。その料理屋の前の廣場には、甘いものやパン菓子などをのせた二三の卓と、二三軒の飾物店とかななる小さな市場が開かれて、そのまはりには子供たちとちよつと見ただけで満足しやうとする人たちが押し合つてゐた。ザーリとヴレンヒエンもこの賑やかな店先に近寄つて、一渡りすうつとみやつた。ふたりは同時に隠しに手を入れた。二人共はじめて、しかも唯一度に一緒に市場にきたので、何か相手に贈りたい、と思つたのだつた。ザーリは薑菓子の大きな家を買つた。それは糖皮で白く塗つてあつて、緑色の屋根の上に白い鳩がとまつてゐる。煙突からはキューピットが

とうくと考へてみれや
それでわざ／＼やつて來ました！

おはいりなさい、天の恵と御一緒に
そしてしきたり通りにやつて下さい！

紺の燕尾服を着た紳士と、ひどく胸を膨らました淑女とが左右の壁に描かれて、この詩句に従つて互に挨拶しながら家の中に這入つて行く。ヴレンヒエンはそこでザーリに一枚のハートを贈つたが、その一面には次の字句を書いた紙が貼りつけてあつた。

甘い巴旦杏の核がこのハートの中にある、でもそれよりもつと／＼甘いわたしの愛！

そして片方の面には、

このハートを食べてしまつても

この言葉を忘れてはいけません！

わたしの鶯色の眼は破れても、

わたしの愛は決して破れません！

彼らは熱心にこの句を読んだ。そしてこの胡椒菓子ペッパーの句程美しい、深い感動を興へる詩や文章を今まで見たことがないと思つた。彼らは、彼らが讀んだものが特別に自分たちのために作られたものゝやうに思つた、それ程それは自分たちの身の上に當筈まるのだつた。

「あゝ、」ヴレンヒエンは溜息をついた。「あなたは家を一軒下さるのね！ わたしも一軒、しかもほんとのをあげましたわ。だつてわたしたちの心が今はわたしたちの家で、その中にわたしたちは住んでゐるんですもの。そして蝸牛のやうに家を擔いで歩いてるんだわ！ 他の家はわたしたちにはないんだわ！」

「それぢや僕らは二匹の蝸牛で、各々相手の家を擔いでゐるんだね！」
と、ザーリがいふと、ヴレンヒエンが答へた。

「だから各々自分の住居の近くにゐやうと思へばなほさら別れられないわね！」

併し彼らは、自分たちがその談話の中で、いろんな恰好をした蕪菓子の上に讀まれたのと同じやうと同じやうな洒落をいつてるのだとは氣がつかなくかつた。そしてそこに陳列されてゐる、就中いろ／＼に飾られたハートの小さいのや大きいのに貼りつけてある甘い單純な戀愛文學の研究を續けるのであつた。すべてが美しく、そして自分たちにもあてはまるやうに思はれた。ヴレンヒエンは七、絃琴のやうに絃を張つた一枚の金箔塗りのハートに「わたしの心は一弦琴のやう、つよく觸れ、ばつよく鳴る！」と、書いてあるのを讀んで、すつかり音樂的な氣持になつて、何か自分の心臓の高鳴るのが聞えるやうに思はれた。ナポレオンの肖像があつたが、それも愛の句の擔人たなひてでなければならなかつた。即ちその下に次のやうに記されてあつた。

英雄ナポレオンは偉大だつたが、

彼の劍は鋼で、心は粘土だつた。

私の戀人は手に持つ薔薇の花を折るに委せてはゐるけれど

その心は鋼のやうにかたい！

二人とも夢中になつて讀んでゐるやうだつたが、各々、こつそり機會を捉へては、何かそつと

買ひ込んだ。ザーリはヴレンヒエンのために綠色の硝子の石の這入つた鍍金の指環を買つた。ヴレンヒエンは金で句忘草を象眼した黒色の羚羊角の指環を買つた。彼らは、別れるときにこの貧しい記念品を贈らうと同じやうに考へたに違ひなかつた。

かうしたことに夢中になつて何もかも忘れてゐたので、彼らは自分たちのまはりにだんだん人が寄り集つて、注意深くもの珍らしさうに見てゐるのに氣がつかなくかつた。彼らの村から多勢の若い衆や娘たちが來てゐたので、彼らはすぐにそれと氣づかれてしまつたのであつた。皆の者は、少し離れて彼らのまはりに立ちならび、いかにも睦まじげにまはりのことなんかすつかり忘れてしまつたやうに見えるこの綺麗に着飾つた二人連れを不思議さうに見守つた。

「おい見ろよ！」と、その中の一人がいつた。「ありやたしかにヴレンヒエン、マルチと町のザーリだぜ！ 奴らは互に惚れてくつゝいたんだよ！ まあみるよ、なんて甘えこつたらう！ 一體奴らはどうするつもりなんだらう？」

この見物人の不審は、彼らの不幸に對する同情と、兩親たちの零落とその非道に對する輕蔑と、二人の睦じさと幸福とに對する嫉妬とが混り合つたものであつた。二人の睦じさと幸福さといへばそれは全く異常であつた。あたりかまはず愛撫し合ひ、興奮しきつて我を忘れてゐる様は殆んど嵩高にさへ見えた。人々からは見棄てられ貧窮のどん底に沈んでゐた時と同じやうに、今彼ら

の周圍に集まつてゐる粗野な人々には全くの別の世界の人のやうに思はれた。遂に彼らとその美しい夢から醒めてあたりを見廻した時は、彼等は四方からちつとこちらを見つめてゐる顔の他何も見えなかつた。誰一人彼らに挨拶するものもなかつた。彼らも誰に挨拶したものが、まごついてしまつた。かう變にお互ひに知らんふりをしてしまつたのは、兩方ともわざとふよりはあわてしまつたのだつた。ヴレンヒエンは不安になり、熱くなつた。顔が蒼くなつたり、赤くなつたりした。ザーリは哀れな彼女の手をとつてつれ去つた。料理屋では喇叭が面白さうに鳴り響いて、ヴレンヒエンは踊りたくてならなかつたが、今は自分の家を手に持つておとなしくついて行つた。

「こゝちや踊れないね！」群集から大分離れた時、ザーリがいつた。「あんまり面白くもなささうだもの！」

「ほんとに、ヴレンヒエンは悲しさうにいつた。「踊るのはもうすつかりやめにしちまひませうよ。さうしてわたしは何處か泊るところを探しますわ！」

「いけないよ、ザーリは叫んだ。「一度踊らなさいいけないよ。僕はそのために靴をもつてきたんだもの！ 何處か貧乏人たちが面白くやつてるところへ行かうよ、僕らも今はその仲間なんだから。そこなら僕らを輕蔑しやしないだらう。こゝのお祭りの時ならあの「極樂園」ぢや何時も

踊つてるよ。あそこはこゝの教區の中だから。あそこに行かう、あそこならもしかしたら泊るところもできるし！」

ヴレンヒエンは今夜はじめて知らないところに寝るのだ、と考へて身顛ひした。併し彼女にとつて、この案内者は今や彼女がこの世の中で持つてゐるすべてのものであつたので、すなほに従つて行つた。

「極樂園」といふのは人里離れた山の中腹の景勝の地にある料理屋で、随分遠くまで見晴らしのきくところだつたが、かうした祭の日などには、貧しい人々、極く／＼貧しい百姓や日傭人の子供たち、さてはいろんな浮浪人たちなどが集まつてくるに過ぎなかつた。この極樂園といふのは凡そ百年ばかり前にある金持の變り者が、小さな別荘として建てたのであつたが、その人の後にはもう誰一人住まはうといふものがなかつた。といつて場所が場所なので他に何に使ふこともできなかつたので、この妙な別荘はだん／＼荒廢して、果てはある料理屋の手に落ち、營業がはじめられることになつたのであつた。併しその名前と、名前に相應はしい建築の様式とはこの家にそのまゝ残つてゐた。それはほんの一階建てで、床は四方の開いた石畳になつてゐて、屋根はその四隅を砂岩の像が擔つてゐる。その像は四人の首天使を型取つたもので、風雨のためにすつかりいたんでゐた。屋根の飾縁には、トリアンゲルや、ヴァイオリンや、笛や、銅鉞や、タンブーリ